music UP's

TAKE FREE!!
2020.3.20
Vol.185

コブクロ

Interview … lynch.　水樹奈々　OKAMOTO'S　超特急　amazarashi　ROTTENGRAFFTY

music UP's Q! …『タイムマシンがあったら何をする？』

L→R　黒田俊介、小渕健太郎

コブクロ

真っ白な状態から作りたい歌をふたりで作った

31 枚目のシングル「卒業」は小渕健太郎と黒田俊介の共作で、卒業式の新たな定番ソングになるであろう珠玉のバラードに仕上がっている。カップリングに収録の杉並児童合唱団による合唱バージョン、大阪マラソンの新公式テーマソング「大阪 SOUL」を含め、ふたりにじっくりと話を訊いた。

――表題曲の「卒業」はものすごくシンプルかつストレートな題材ですけど、このテーマで楽曲を作ることになったのはどういうところが始まりでしたか？

小渕：昨年、結成 20 周年の長い全国ツアーが終わったあとに 1 週間くらい時間をもらって、僕らとスタッフ何人かでニューヨークに行ってミュージカルやライヴを観たりする機会があったんですよ。半分遊びで半分撮影も入れながら、次にどんな音楽がやりたいかを話す機会もあったりして。もし、このエンターテイメントの中心地で自分たちがストリートミュージシャンから始めてたら、いったいどれだけのことをやらないといけなかったんだろうとか。新鮮な感覚を味わいながら、次に目指すところに対して矢を刺していく気持ちがどんどん芽生えてきたんです。そんな中、これまでは何かのタイアップのために曲を作ることが多かったんですけど、久しぶりに全て真っ白な状態からふたりだけで作りたい歌を作ろうっていうのがポンと浮かんで。曲作りを始めていった結果、生まれたのが「卒業」なんです。

黒田："春の曲"みたいなテーマさえなかったもんね。本当に何もない中で作ったので、出すのはもう少し先でも良かった。ただ、小渕が"卒業"っていうワードを投げてきたから春のリリースになって、それで前倒しにしたんですよ。2 カ月くらい早なったよな？　"卒業！？　ほんなら、もっと最短でやろう！"っていう話になったんです。

――コブクロには今や国語の教科書にも掲載されてる「桜」（2005 年 11 月発表のシングル）だったり、「YELL～エール～」（2001 年 3 月発表のシングル）といった春の歌があるので、ここに来てさらにこういう曲が生まれてくるのは意外でした。

小渕："「桜」で卒業式を迎えました"と言ってくださる人たちが 5 年とか 10 年とか前にたくさんいらっしゃって。今はその方々が社会に出て…例えばミュージックビデオを制作してるカメラマンさんから"卒業のタイミングで「蕾」（2007 年 3 月発表のシングル）を歌いました"という話を聞いたり、いろんなことが一周した気持ちもある中で、「桜」も「蕾」も卒業式のために作ったわけではないから、"卒業"って言葉はひと言も入ってないんですよね。それでもこんなに歌ってきてもらった。"じゃあ、思い切って卒業にスポットを当てて曲を作ったらどうなるんだろう"って自分たちでも楽しみになったんです。卒業式で流れた音楽や歌った歌は、僕にとっても人生におけるハイライト、忘れられない曲のひとつなので、長く歌ってもらってこその、いつか思い出になるような曲を目指して作りました。

――そんな「卒業」ですが、おふたりの共作だそうですね。

小渕：僕が行きそうじゃない方向のメロディーを黒田が提案してくれたのが大きかったですね。"このコードでこっちなの！？"みたいなびっくりする音階を言ってくるんですけど、回数を重ねると"あっ、絶対こっちのほうがいいわ"ってなったり。僕は歌詞にしても何かと詰め込みすぎちゃうんですよ。そうすると黒田が"いやいやいや、ここはホームランをバコーン！と打つような伸びのあるメロディーがええやろ"と。それは歌い手だからこそ分かる部分だと思うんですよね。ライヴの会場に溶け込んでいく瞬間の旨味を分かってるというか。その駆け引きが今回むちゃくちゃ楽しくて、"一生この作り方にしようかな。今まで何やってたんやろ"くらいの気付きがありました（笑）。"そう言えば、結成当初はこうやって作ってたよな"って。

黒田：サビの《今　消えてゆく》の部分とかな。ここの"く"は 6 拍伸ばすんですけど、伸ばさんといっぱい言葉を入れようとしてたな。せやから"待て待て待て！"と。

小渕：今のかたちになって良かったです。1 番と 2 番で終わりっていうシンプルな構成もいいと思うし。まずは僕らがずっと歌っていきたい想いがあるので。

――1 番と 2 番のサビが同じ歌詞なのが印象的でした。

小渕：2 番の A メロと B メロの歌詞を経て、1 番と同じサビをまた聴いた時、なんでか分からないですけど、僕は違う景色が浮かぶんです。《今　消えてゆく　この風景》が短い中でもう変わってる感覚がある。こういうのが音楽を作ってていつも面白いなって思うところですね。

――2 番からストリングスが入ってきたり、展開も独特の味わいがあって。

小渕：終わりに向かってゆっくりゆっくり締めていく感じも気に入ってます。ストリングスのアレンジは僕たちの元プロデューサーでもある笹路正徳さんにやっていただいたんですけど、"最後の《歩いて　つまづいて》のあとに弦が見え隠れするのは、ここでひとつずつ思い出が浮かぶのをイメージしたんだよ"って言われて。で、最後の一音で集合写真がバーン！って見えるようなアレンジになってるんです。"うわぁ、そこまで考えてやってくれたんだ"って感激しましたね。アレンジもバンドでやってみたり、かなり試行錯誤しましたが、僕らのバンドメンバーの松浦基悦さんがスルッと全部を弾いてくれた時、その素晴らしさに涙が出そうでした。

黒田：アレンジは曲を作りながら決めていく感じやったな。最大に足してるバージョンと最小にしたバージョンとやってみたんですけど、このかたちに落ち着きました。ギターもなかなか出てこないし、ほんまにいろいろ試して。

――《消えてゆく》《気付けなかった》とサビで否定的と取れなくもない、ある種の厳しさを感じさせる言葉を多く使いながら、それでもじんわりと温かみを出せるのもすごいなと思いました。

小渕：あぁ、確かにそうですね！　ポジティブな言葉を並べてなかった。それは意外と気付いてなかったです（笑）。

黒田：マネージャーやスタッフに初めて聴いてもらって"すごい曲ができましたね！"って言ってもらった時、"えっ、そうなの？"と思ったりもしました。僕らはただただナチュラルに作っただけなので。ほんで"大至急リリースしましょう！"って話になって。

小渕：合唱バージョンを別で作ってみて、先にそれをリリースしたり。

――「卒業～合唱～」を聴くと本当にいい曲だというのは、自分たちでも客観的に思えたのでは？

小渕：それは思いました。合唱バージョンを先に作ったんじゃないかってくらいの完成度になりましたから（笑）。

黒田：だから、すっごい違和感あんねん。違和感というか、"そうなるんや!?"みたいな驚きね。僕らの音源よりも先に別バージョンが出るのも初の試みやし。

小渕：ファンのみなさんは「卒業～合唱～」を聴き込んだあとに、やっと黒田の歌が聴ける流れなので、より楽しみにしてくれてたみたいで。

黒田：いっそ僕らのバージョンも合唱とまったく同じ歌い方にしたろかなって思いました。"黒田、合唱のほうに引っ張られてるやん！"みたいな（笑）。

――そして、カップリングの大阪マラソン新公式テーマソング「大阪 SOUL」はまたガラッと曲の雰囲気が変わりますね。

小渕：はい。この雰囲気は走ってる時に伝わってくる沿道からの華やかな応援、いろんな色の旗を振ったり風船を持ったりしてくれてる様子が反映されてます。前回の大会公式テーマソング「42.195km」（2014 年 10 月発表の配信シングル）ではその感じがあまり出せてなくて、エンジンを積んだ乗りものがひたすらゴールに向かってるイメージだったんですけど、今回の「大阪 SOUL」は周りに手を振りながら走ってる曲。ブラスバンドやチアリーディングがいる大阪マラソン独特の楽しさを表現してみました。

――"大阪らしさ"みたいなものも意識しましたか？

小渕：「42.195km」では関西弁的なテイストをガーッて入れたんですけど、今回はタイトルや歌詞でストレートに"大阪"と言ってますね。大阪の人って"大阪！"って叫ぶのが好きやと僕は思うんですよ。あと、"大阪ー！"って言われるのが好きというか。ライヴでも呼び掛けるとものすごく盛り上がるので（笑）。

取材：田山雄士

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

「卒業」

Single　3/18 Release
WARNER MUSIC JAPAN
WPCL-13184
¥1,000（税別）

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■小渕健太郎…昨日の昼に戻りたい
「タイムマシンのことを考えると出てくる答えは、いつも昨日なんですよね（笑）。昨日は夜に美味しいごはん屋さんで、たくさん食べる予定だったのに、昼におにぎりとか焼きそばとか置いてあったのを結構食べてしまって。あれを食べなかったら夜に食べた美味しい和食コースのデザートも食べられたのに…と後悔してますね（笑）」

■黒田俊介…小 3 に戻って野球を真剣にさせたい
「野球選手になりたかったから小学 3 年生に戻って、子供の自分に"もっとちゃんと野球をしなさい"と言いに行きますね。こんなに身長があって、野球に恵まれた体形をしっかりと活かさなあかんから…"頑張れ！　頑張れよ！"ってめっちゃ言ってしまうと思います（笑）。今の自分のまま子供に戻れるならいいんですけどね」

CONTENTS

music UP's Vol.185　2020.3.20

■ Interview

music UP's Q！…『タイムマシンがあったら何をする？』

0 コブクロ
4 水樹奈々
6 OKAMOTO'S
8 超特急
10 ONE N' ONLY
12 ウォルピスカーター
14 樋口楓
16 吉田山田
18 寺島拓篤
20 工藤晴香
22 上田麗奈
38 The Biscats
40 エルフリーデ
42 ナノ
44 vistlip
46 Plastic Tree
48 amazarashi
50 ROTTENGRAFFTY
52 lynch.

■ Live Report

30 超特急、内田雄馬
31 FLOW、新居昭乃

26 Pop'n' Roll Special Photo
28 DISC GUIDE
32 『MUSIC SUPPORTERS』 MOSHIMO、リュックと添い寝ごはん、錯乱前戦
34 Editor's Note & Listener's Voice &読者プレゼント
36 全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳の『スターの証明』 石川さゆり

※ music UP's は毎月 20 日発行です（地域により多少遅れる場合があります）。全国 300 カ所以上のライヴハウス・新星堂・TOWER RECORDS・HMV・disk union・音楽スタジオなどで配布しています。配布店舗はmusic UP's の WEB をご覧ください。

© ジャパンミュージックネットワーク株式会社
本誌に掲載している記事、写真等の無断複写、複製、転載を禁じます。

■発行
ジャパンミュージックネットワーク株式会社
〒107-0062
東京都港区南青山 6-10-12 フェイス南青山
TEL：03-6712-6490

※広告に関するお問い合わせ
TEL：03-6712-6579(music UP's)

【発行人】
竹田秀一
【JMN 統括編集長】
烏丸哲也

【編集】
■ music UP's / OKMusic
・編集長
石田博嗣
・スタッフ
千々和香苗　岩田知大
・アシスタント
草野奈穂
■ BARKS
・編集長
梶原靖夫
・スタッフ
森本 智　星出智敬
宮川直子　堺 涼子　服部容子
髙橋ひとみ　井上 舞　安藤沙耶佳
■ Pop'n'Roll
・編集長
鈴木健也
・スタッフ
鶴岡 舞
■全日本歌謡情報センター
・編集長
仲村 瞳
・スタッフ
西角郁哉　本多 秀

【営業】
今井壱克　小田 新

【WEB】
田中功雄　瀬田拓己　上月悠平

【ライター】
荒金良介　池田スカオ和宏　榑林史章
小町碧音　清水素子　田中隆信　田山雄士
土屋恵介　フジジュン　舟見佳子　帆苅智之
宮本英夫　村上孝之　山口智男　山本弘子

【印刷】
昭栄印刷株式会社

music UP's サイト
http://www.music-ups.jp

水樹奈々

巨大コンボイを駆る水樹奈々が燃えた！

昨年開催された同名ツアーから９月15日に千葉・ZOZOマリンスタジアムにて開催されたファイナル公演の模様を収録し、特典映像には昨年５月５日に幕張イベントホールで行なわれた座長公演『水樹奈々大いに唄う 伍』などを収録したライヴ映像作品『NANA MIZUKI LIVE EXPRESS』。ZOZOマリンスタジアム公演を振り返りながら、映像でぜひ再確認してほしいポイントなどを語ってもらった。

――７年振りのZOZOマリンスタジアムは30代最後のツアーのファイナルであり、200公演目という特別な日でしたね。

「はい。“LIVE EXPRESS”という、みなさんに音楽を届け、感謝の気持ちを届けたいという想いを込め、直球のタイトルを付けたツアーでした。「METANOIA」（2019年７月発表のシングル）をリリースした時期でもあったので新曲はもちろん、30代最後のツアーということでデビュー当初の曲からも選曲して。この日に披露した「真冬の観覧車」（2001年12月発表のアルバム『supersonic girl』収録曲）は18年振りに歌いました。新旧幅広いセットリストで、自分の歩みを振り返るツアーになったと改めて感じます。今年がちょうど歌手デビュー20周年イヤーになるので、節目を迎える前にこれまでの自分としっかり向き合うことができて、いろいろな発見がありました。出会ってきた作品や生み出してきたものがあったから今の水樹奈々があるということを再確認しながら、次はどんな曲を生み出したいのか、どんなことがしたいのか、未来へ向けたビジョンが見えてくるツアーになりましたね」

――懐かしい曲は会場ごとに違うものを披露していたんですよね。

「自分の年齢の39歳と感謝を届ける意味を掛けて“39（サンキュー）EXPRESS”というコーナーを作りまして（笑）、30代になって１度も歌ったことのない曲を選曲し、毎会場違う曲を披露しました」

――聴く側としては懐かしさと新鮮さがあって楽しかったのですが、歌う側としてはどんなお気持ちでしたか？

「20代だからこそのかわいい振り付けやポーズが付いた曲もあって、それも当時のまま再現したんですけど、振り付けを確認しようとしたら残っている映像がVHSのビデオテープしかなくて歴史を感じました（笑）。たどたどしいダンスを踊る自分を観て恥ずかしくもあり、ノスタルジックな気持ちにもなりましたね。ステージでは“あの時より成長した姿を観せられたらいいな”と気合が入りつつ、当時は気付かなかった曲の新たな表情も見付けることができました」

――そして、お馴染みの乗り物は今回はコンボイという。

「やはり“LIVE EXPRESS”ですから、直球でトラックしかないと思いました。すると、プロデューサーが“だったら、デコトラや！”って（笑）。とにかく派手で大きなものにしたかったので、海外仕様のコンボイにしました。そこから“トラックと言えば、襲われがち”という話に広がり（笑）、襲われたらヒーローが駆け付けるもの！ということで、ちょうど私が映画『キャプテン・マーベル』の吹き替えを担当した年でもあったので、それらを合わせてストーリーを考えてみようということになったんです」

――他に演出の面で“この曲を歌いたいからこういう演出がやりたい”と曲先行で思い浮かんだものはありました？

「曲先行では「サーチライト」（2018年10月発表のシングル「NEVER SURRENDER」収録曲）ですね。昨年３月に愛媛のひめぎんホールで開催した『NANA MUSIC LABORATORY 2019 ～ナナラボ～』のリハーサル中に歌いながら浮かんだのですが、歌詞に《携帯のライトを翳して》というフレーズがあるから、歌詞と同じようにみんなで携帯のライトで照らし合えたら素敵なんじゃないかと思って。「サーチライト」は地元の愛媛を思いながら作った曲ですし、地元公演で新たなライヴのお約束が生まれることはとても嬉しいし、『ナナラボ』のステージからの光景がとても感動的なものだったので、ツアーでもぜひやりたい！と提案して、スタッフのみなさんに賛同していただきました」

――客席から観てもとても感動的でしたが、ステージからだともっときれいな光景だったんでしょうね。

「ペンライトやサイリウムのように全方向に光るものとは違って、携帯のライトは前方だけだから、ステージの私たちだけが味わえる本当に贅沢な景色でした。今回の映像にはステージ側から撮ったアングルも出てくるので、ぜひ観ていただきたいです！」

――逆にステージ側からは分からないけど、観客側では楽しめるというものもありましたね。

「300発の花火とAR演出ですね。ARは今まで観たことのない新しい演出を取り入れたいと思っていたところ、演出家さんから提案していただきました。スーパーガールに変身するというストーリーなので、それにリンクした演出にしたくて」

――とはいえ、まさか燃えるとは。

「本当に燃えているんじゃないかと、会場のみんなが一瞬焦ったという話も聞きました（笑）。あれは私の動きをとらえるカメラがコンボイの先端に付いていて、私の動きに合わせて炎が出現し動く仕組みになっているんです。動きの制限はなく、自由に動いても炎が付いてくるので、最新技術はすごいと思いました。実はそれと同時に後ろのムービングライトも、私が装着していた特殊なブレスレットと連動して一緒に動いていたんですよ！ 「METANOIA」は普段、あまり動かず凛として歌うことが多いのですが、ムービングライトと連動していると聞いて、ここぞとばかりに腕をたくさん動かしました（笑）」

――最新技術もあれば、「サーチライト」のようにある種アナログな演出もあって。

「そういう意味では、このツアーのテーマととてもリンクしたものになったと思います。新旧織り交ぜたセットリストで、ノスタルジックな気持ちになるところもあれば、最新の水樹を感じてもらえるところもあって。演出もアナログなものから最新のデジタル技術までと、選曲と演出がとてもリンクしたものになりました」

――そして、特典映像には幕張イベントホール座長公演『水樹奈々大いに唄う 伍』の様子も収録されているという。

「いつものようにミニライヴとお芝居の二部構成で、お芝居パートは真田十勇士をモチーフにオリジナルストーリーを作らせていただきました。声優仲間と結成した水樹一座で、笑いあり感動ありの壮大な時代劇コントを繰り広げております（笑）」

――これも水樹さんの20年を構成する大事な一部ですね。

「はい。役者としての水樹奈々を楽しんでいただきつつ、自分のルーツでもある演歌を歌う姿を観ていただける、とても大切な公演です。ステージを走り回って激しい曲を歌うのも水樹奈々だし、しっとりと演歌を歌い上げるのも水樹奈々。自分の核となっているものと、そこから生まれた現在の水樹奈々の両方を観ていただけるので、これがひとつのパッケージになっているのがすごく嬉しいです」

取材：樗林史章

okmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『NANA MIZUKI LIVE EXPRESS』

Blu-ray&DVD
3/25 Release
KING RECORDS

【Blu-ray】
KIXM-422～4
¥7,700（税抜）

【DVD】
KIBM-835～9
¥7,700（税抜）

music UP's Q! 今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■高校時代の自分にそっと靴下をプレゼントする
「過去に行って、極貧生活を送っている高校生の水樹に靴下を買ってあげたいです（笑）。ずっと穴あきの靴下を履いてたんですよ。校章が入った１足700円もする学校指定もの以外は校則違反になってしまうのですが、高校生にとっての700円は高くて！ 穴があいたらチクチクと縫って修繕して使っていたので、新しい靴下を何足か買って、そっとプレゼントしてあげたいです（笑）」

写真左上より時計回りに、ハマ・オカモト(Ba)、
オカモトコウキ(Gu)、オカモトレイジ(Dr)、オカモトショウ(Vox)

OKAMOTO'S

ちゃんと夢をもう 1 回見られる自分たちでいたい

デビュー 10 周年という節目に初のベストアルバム『10'S BEST』をリリースする OKAMOTO'S。新たな一歩を踏み出すため、これまでの 10 年を集大成した彼らはどんなふうに成長したのかを、これからの展望も含め、4 人に話を訊いた。

――デビュー 10 周年という節目にリリースする初のベストアルバムは、アートワークが 1st アルバム『10'S』のセルフオマージュになっていますが、ふたつのアートワークを見比べて、どんなことを思いますか？

レイジ：10 年前だけど、古いとかダサいとかは全然思わなかったですね。

ショウ：良かったよね、そう思わずに見られるってね。

コウキ：10 年後にまた使おうと思えるものを作っておいて良かったって思いました。自分たちのビジュアルも 10 年経っても耐えうるもので良かった(笑)。

ハマ：撮影に使っているオブジェは 10 年前に使ったものなんですよ。作り直してないんです。

――取ってあったんですか？

ハマ：今回のアイディアを思い付いた時、オブジェを作り直して、少しでもニュアンスが変わってしまったら、やる意味がないと思って、スタッフに"さすがにないですよね"って話をしたら、"去年、廃棄されました"って言われて。"逆に、なんで9年取っておいたの!?"って残念な気持ちになったんですけど、"まぁ、しかたないか"と思ってたら大どんでん返しで、"実はまだ廃棄してませんでした！"って。"それなら 10 年振りに対面するところから撮りましょう"ってことになって、梱包をはがすところから撮影したんです。ほんとに 10 年振りに同じオブジェで…しかもカメラマンさんもスタジオも同じっていう。

――改めて振り返って、どんな 10 年だったと思いますか？

ショウ：音楽の聴かれ方も社会もめちゃめちゃ動いた 10 年だったと思うんですけど、そんな中を 19 歳から始めて、よく生き残ってきたなって気持ちはありますね。なかなか大変だった 10 年だったと思うんですよ。やり始めた時は正攻法というか、ひとつの必勝パターンがまだある時代だったと思うんですけど、それがどんどんなくなっていって、それぞれにしか正解がない時代に変わってきた。それは音楽だけに限らないと思いますけど。

――その中で OKAMOTO'S なりの正解は見付けられたのでしょうか？

レイジ：正解が見付かったわけではないですけど、10 周年記念イヤーに日本武道館をちゃんと売り切って、それまでの 10 年間を肯定された感じはありますね。"自分たちは間違ってなかったんだな"って思いました。

コウキ：途中でもう、"正解がなくて大変なんです"ってのを曝け出すことを正解にしましたね。そのドキュメントを楽しんでもらうっていう。

ショウ：そのまま曝け出すしかないって思ったもんね。

コウキ：結果、それが 10 年続けられた要因になりました。

――もちろん産みの苦しみもあったと思うので、これまで作った曲はどれも思い入れがあると思います。その思い入れのある曲の数々から Disc 1 にはファンの人気投票順に 17 曲が収録されているのですが、それはどんなところからの発想だったんですか？

コウキ：音楽性も変わってきているから選ぶ基準がなかったんですよ。それだったら自分たちよりも聴いてくれる人たちに決めてもらったほうが、みんなが納得できるんじゃないか、それが自然なことなんじゃないかと思えたんですよ。

――人気投票の結果はいかがですか？

レイジ：かなり納得してます。良い意味で意外性もないし、こんなにファンとバンドのコミュニケーションがちゃんと取れている 10 年だったんだって思いました。"うん。こうなるよね"っていう。"ここだけちょっといじって"とか思うこともなかったんですよ。…"これ、ものすごいことが起きている!?"って、さっき気付きました。完全にファンに委ねているのに。

ショウ：寸分違わない。

レイジ：そこは特別なバンドだと思いました。それも 10 年やってきた結果なのかな。

――一方の Disc 2は新曲やレアトラックも含め、こちらはメンバーによる選曲で。

ショウ：いわゆるシングルの B 面曲ですね。そういう曲をシングル以外でも聴けたらいいよねって入れたり、『NO MORE MUSIC』(2017 年 8 月 発 表)『BOY』(2019 年 1 月発表)というアルバムを作った時に、"今回のタイミングじゃない"ということで外れた曲を入れたりとか。ファンが選んでくれた Disc 1 と、機会を作らないと聴けなかった曲…でも、ライヴではやるような曲をまとめるのはありなんじゃないかってところから選んでいきましたね。

――その選曲は大変でしたか？

ハマ：いえ、もう 40 分ぐらいで。新曲、未発表曲、未 CD 化曲を入れようというのは、すでに決まっていたので、"もう半分はどうしようか"ってなった時、基本はB面曲とカバーと…

レイジ：人気投票の 18 位以降の曲から"これは入っていたほうがいいよね"って曲と。

ショウ：「HAPPY BIRTHDAY」がそうなんですよ。

ハマ：だから、全然悩まずに。Disc 2 の曲順は年代順というか新しい順なので、そこも潔く。ちょっとでも手を加えると、変な未練が残っちゃう気がするので。

――そうは言っても、メンバーで選曲するにあたっては、それぞれに"これは入れたい"という曲があったのではないでしょうか？

ハマ：いや、挙げた人に拍手ですよ。"俺はこれを入れたい"って言ったら、"お一"ってパチパチパチ。それの連続でしたね。"異論なし"っていう。

――そんな中、アダルトでアーバンな魅力がある「Dance To Moonlight」は書き下ろしの新曲ですね。

ショウ：はい。ネットショップ『STORES』の CM で、今、流れてます。去年、いろいろ制作した中で一番良かった曲なんです。

コウキ：アルバムのカラーとかコンセプトとかを気にする必要がないってところで、純粋にメロディーが良いことも含め、たくさん候補がある中から選びました。

――じゃあ、これが今の OKAMOTO'S が一番やりたい曲というわけではなく、こういう曲もあるという感じ？

コウキ："これで次の 10 年は行きます！"ってことではなく、今の楽しいムードを出したという感じです。今回のベスト盤は 10 年間のまとめだから、その次を示すっていうのはちょっと違う気がするし…でも、"今はこうですよ～"っていうのも示したいしっていう。

――その「Dance To Moonlight」の歌詞はラブソングにも聴こえるし、バンドのことを歌っているようにも聴こえます。

ショウ：そうですね。俺も歌詞を読み直しながら、そう思いました。ベスト盤として 10 年をまとめた時、こういう歌詞があるっていうのは、幸先がいいというか、ロマンチックな気がして、すごくいいですね。それを意識せずに書けたのが良かったです。

取材：山口智男

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『10'S BEST』

Album 4/15 Release
Ariola Japan

【完全生産限定盤(BD+LP付)】
BVCL-1070～4
¥15,000(税抜)
※豪華パッケージ
【初回生産限定盤(BD 付)】
BVCL-1075～7
¥6,500(税抜)
【通常盤】
BVCL-1078～9
¥4,200(税抜)

music UP's Q! 今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■オカモトショウ…恐竜が住む世界で生活がしたい
「恐竜が好きなので、ジュラ紀に行ってみたいですね。特にステゴザウルスが好きなんですよ。ステゴザウルスって脳が親指くらいしかないんで、絶対にバカでかわいいはずだから、実際に見てみたいですね」

■オカモトコウキ…1966 年に行ってみたい
「66 年に行って The Beatles の新曲をリアルタイムで聴けたら最高ですよね！ 3～4 年は滞在して、ライヴとか観に行きたい。でも、新曲として発表されても知ってるわけだから…いや、新鮮な気持ちで楽しめるはず(笑)」

■ハマ・オカモト…タイムマシンを壊しに行く
「タイムマシンの仕組みを理解してから、開発された時代の自分に壊すように言います。今現在、未来の自分が会いに来ていないということは、世の中にあってはいけないものなんだと思うんですよ。きっと未来では違法の機械になってると思う」

■オカモトレイジ…近未来の技術力を見てみたい
「今でも携帯の発達や 5G とか、10 年前には想像もしてなかった技術が生まれているので、近未来の技術力を見に行きたいです。未来で何かするとかではなく、情報を知って戻って来て、現代でみんなに教えてびっくりさせるのも面白いかと(笑)」

超特急

超特急史上最大規模のアリーナツアーで開いた新しい扉

L → R　タカシ、ユーキ、タクヤ、リョウガ、カイ

年をまたいで7万人を動員したアリーナツアー『Revolución viva』が早くも Blu-ray 化。初のムービングステージでダイナミックに魅せた東京・大阪それぞれの最終日を完全収録し、当日入っていた全カメラの映像によるオールマルチスクリーンは観るたびに新たな発見がある。常に挑戦し続ける5人の輝きを、ぜひその目で確かめてほしい。

――大阪はクリスマス直前、東京は年明けに行なわれたツアー『Revolución viva』ですが、それぞれ異なるテーマがあったんですよね。

ユーキ：はい。大阪城ホール 2 デイズは"感謝"をテーマにクリスマスメドレーだったりレイヴトラックで、超特急の楽曲以外でも"ダンスで魅せる"ということにこだわりました。ただ、感謝という意味では「Billion Beats」がひとつのキーで、映像でみんなの表情を観てもジーンとくるものがありましたね。年始の代々木第一体育館3デイズは"この荒波に乗っかって、2020 年も俺たちと突っ走って行こう！"という覚悟をテーマに、その想いを東京公演のテーマ曲である「On & On」で表しつつ、初披露の「Body Rock」では今までになかったアプローチでも魅せられたと思います。

タクヤ：確かに「Body Rock」のセクシーさはカメラのアングルもあって、映像で観た時にずば抜けて印象深かったですね。あとは、「バッタマン」のタカシの狂いっぷりとか要所要所に素敵なところがあって観応えがあります。

――両公演ともアッパーな曲では、みなさん遠慮なくカメラに突っ込んでいってましたよね。

ユーキ：そうですね。クレーンカメラが近寄っているところで、メンバーそれぞれ知らないところでアプローチしているのが結構使われてるんですよ。他にも「Don't Stop 恋」のタクヤとタカシのカオスな変顔とか、メンバーのぶっ飛び具合は面白かった。

タクヤ：実際にステージに立っている時はどうしても自分のパートに集中しちゃうんで、改めて映像で観るといろんな発見があるんですよね。"あっ、○○、こんなことを実はやってたんだ！?"とか、自分自身のダンスの癖だったり、振りのニュアンスに気付いたり。

リョウガ：特に東京公演の殺陣は出番以外は裏にいたんで、観れていない部分がたくさんあって。それが映像で観れたし、ばっちりと決まっていて！　殺陣の先生に"ここでこの動きやれば客席が盛り上がりますよ"って言われて半信半疑だったところも想像以上にめちゃくちゃ沸いていた。

――特に沸いていたのは？

リョウガ：やっぱりタクヤが刀を舐めてるところかな。8号車（ファンの呼称）が斬られたのか！? ってくらいの悲鳴が聞こえたので、さすがですよね。本番中はイヤモニをしているのもあるし、パフォーマンスに集中しているので、正直言って歓声に気付かなかったりするんです。それが改めて確認できたし、ひとつのショーとして成り立っていたのは良かったですね。

――殺陣に限らず、物語や感情がみなさんの表情から伝わってくる部分も大きくて、そこは2公演通して改めて感じたところです。

カイ：そこは他のグループに負けない、僕たちのひとつの強みではあるとは思います。大きな会場でのカメラの使い方は、今までかなり学んできましたからね。歌や踊りを高めていきたいのはもちろんとして、表情でのアピールの仕方ももっと上手くなっていきたい。特に今は楽曲面でもどんどん表現の幅が広がっているので。

――このツアーでも曲調やジャンルの幅の広がりは明らかで、その最たるものが「Body Rock」ですよね。

ユーキ：あれだけ色っぽい雰囲気を出せる曲は今までになかったですし、曲が始まった瞬間に8号車もテンション上がったんじゃないかな。椅子を上手く使うことで色気というものを理にかなったかたちで表現することができましたし、新しい超特急を提示できたっていう自信にもなりましたね。こうやって新しい扉をどんどん開けていきたいし、今までやらなかったことに挑戦したいっていう想いを示したのが、テーマ曲の「On & On」なんですよ。

――それこそ大阪公演でのクリスマスメドレーでも、新しい扉をバンバン開いていたのでは？　超特急らしいハッピーな場面からダークな魅せ方、最後はダイナミックなショーステージと、表現の幅がとても広くて楽しめました。

カイ：あのメドレーだけで振付師の方が4人も入っていますからね。前半のレイヴトラックも違う方なんで、大阪公演だけで新しく5人の方にお願いしています。

リョウガ：それぞれのジャンルで一流の方々と！

カイ：例えばクリスマスメドレーの最初はシアタージャズだったので、テーマパークでも活動されている方に振り付けをしていただいたり。ただ、僕たちからすると今まで1ミリも踊ってこなかった、むしろお客さん側として観てきたレベルのものだったから、初めはすごく難しかったんですよ。それこそ身体の使い方から教えてもらったんですけど、結果としてやって良かったです。楽しかったし、まだまだ未熟とはいえ、経験できたこと自体が実になりました。

――また、本編映像の他に東京 49 台、大阪 23 台と、入っていたカメラの全映像を収めたオールマルチスクリーン映像が初の試みとして収められているのは、観る側としては楽しみでしかありません！

タカシ：観られる側としてはちょっと怖いです。後ろ向いている時とか、もしかしたら映されているかもしれないし。

タカシ：水を飲んでいるところとか、恥ずかしいからあんまり観られたくない！

――今回は初のムービングステージで、メインステージからセンターステージ、真反対のエンドステージまで会場内を大移動したりと、ダイナミックで立体的なパフォーマンスが観どころでしたから、いろんな角度からの映像が収められているのはぴったりですよ。

タクヤ：画期的ですよね。今までは自分たちが動いたり走ることで移動していたけど、踊っていて気付いたらアリーナの一番後ろにいるとか。何よりも一番後ろの人たちがいきなり最前列になったりとか、物理的な距離が平等になるのは素敵だと思いました。

カイ：僕たちはチケット代が一律なので、どの席の人にも同じように楽しんでもらいたいんですよね。なので、そうやって移動できるのは嬉しいですし、スタンドの方と同じ目線になれるのもありがたかったです。

ユーキ：これがリリースされたら8号車同士で集まってもらって、どこか大型のスクリーンでライヴ会場と同じくらいの爆音で観てもらえたら、心も躍るだろうし、感動を共有してもらえるんじゃないかな。

タカシ：ちょっとした映画館とかで、そういうイベントやれたら楽しそう。

リョウガ：完成披露試写会みたいな（笑）。

取材：清水素子

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

music UP's Q!

今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■カイ…"未完"と言われている漫画の最終回を知りたい
「未来に行って『ONE PIECE』とか『HUNTER × HUNTER』の最終回を読みたいかな。"未完"と言われている漫画がいつ終わるのかを知りたいですね」

■タクヤ…地球存続の瀬戸際を見てみたい
「未来ですね。地球外生命物と交流しているかもしれないし。地球がいつまで存在しているのかも気になるから、その瀬戸際を見てみたいです」

■ユーキ…恐竜時代や戦国時代を見てみたい
「恐竜時代や戦国時代を見てみたいと思いますね。未来は…最先端すぎるがゆえになんか悲しいことが待っていそう。だから、未来は知らないほうがいいかな」

■タカシ…使用しない
「"あの時にああすれば良かった"と思うことってあるけど、それがあるからこそ今の自分がいると思うんですね。それを何かひとつ変えてしまったら、悪い意味で自分が変わってしまうと思うんです。未来は…本当はめっちゃ気になるんですけど、それが怖い自分もいて。いい未来が待っている保障はないじゃないですか。なるようにしかならないと思ってるので、未来にも行かないですね」

■リョウガ…過去に行ってタイムマシンの設計資料を燃やす
「人間誰しも悪の心を持っているものなんです。転売とか一獲千金を考えたり。って考えると、タイムマシンなんてあるべきじゃない！　だから、過去に行ってタイムマシンの設計資料を燃やします。もしかしたらタイムパラドックスが起こって、燃やした途端に僕も消えたりするかもしれないけど。時間という絶地的な力に逆らうようなことはしてはいけないんですよ、人間は」

『BULLET TRAIN ARENA TOUR 2019-2020 Revolución viva』

Blu-ray　3/25 Release
SDR
【通常盤】
ZXRB-3059 ～ 61
¥9,600（税抜）
【Loppi・HMV 限定盤】
¥12,327（税抜）
※アクリルキーホルダー 5 個付

『ARENA TOUR 2020 SPRING WELCOM TO THE BULLET TRAIN DINER』

6/09（火）　神奈川・ぴあアリーナ MM
6/10（水）　神奈川・ぴあアリーナ MM
6/13（土）　大阪・エディオンアリーナ（大阪府立体育会館）
6/14（日）　大阪・エディオンアリーナ（大阪府立体育会館）

2020年に生きる僕らだからこそ、叫べるメッセージを届けたい

昨年はオリコンウィークリー1位を2作連続で獲得し、YouTube上で公開された5作のMVは合計1000万回再生を突破！　海外からも熱い視線を浴びるONE N' ONLYの1stアルバム『ON'O』には始動からの軌跡と進化、そして彼ら自身の誠実なメッセージが詰め込まれている。

――始動から1年半が経ち、世界中から注目を集める中で待望の1stアルバムですね。

EIKU：はい。"ついに来た！"って感じですね。

TETTA：最近、かなりハイペースでレコーディングしてきたから、密かに"アルバムできたらいいな"って思ってたんですよ。そしたら発売が決まったんで、本当に嬉しかったです！

――そうして出来上がったアルバムはどんな作品になりました？

HAYATO："ON'O"というタイトルの通り、ONE N' ONLYの歴史が詰まったアルバムですね。デビュー曲の「I'M SWAG」と2ndシングルの「Dark Knight」をはじめ、これまでに出したシングル3枚からの9曲に新曲6曲と、いろんな曲がぎっしり入っているから、初心者の方でもこれを聴けば全部分かる！　ダンス&ヴォーカルユニットということで、普通にノリやすい曲からファンのみんなと一緒に踊れる曲、ディープなラブソングやバラードもありつつ、僕たちが今、この立場だから言える社会に対してのメッセージを乗せた曲が増えた気はします。特にリード曲の「Shut Up! BREAKER」ではそういうリアルな叫びを、ありのままの僕たちの表現でダイレクトに伝えてるんですよ。

――他人を枠にはめたがる世間への怒りを訴えた最新シングル「Category」と同じく、「Shut Up! BREAKER」もかなり攻撃的で力強い曲ですが、今回は何を歌っているんでしょう？

EIKU：今、社会問題にもなっているSNS上での虐めや誹謗中傷への、僕たちの心の叫びですね。歌詞の中に"魔女狩り"っていう言葉が出てきますけど、今の社会では無記名で特定の人物を叩くことが横行していて、そのひとつひとつの言葉に追い詰められてしまう人がたくさんいるじゃないですか。僕たちも表に出る活動をやっているので、同じような目に遭ったことはありますし、この曲を通してひとりでも多くの人を助けたいなと。もちろん、すぐに現実を変えることはできないけれど、まずは僕たちから発信したかったんです。

REI：僕のパートには《思うまま生きてはいけない》っていうフレーズもあるように、SNS上の罪の意識がない言葉に追い込まれて、友達にも誰にも言えずに自殺に追い込まれてしまう…そういう悲しい事件は実際に起きているわけで。そんな世の中に対する僕たちのメッセージが、少しでも社会を変えていければなと。

KENSHIN：僕がラップしてる《隠れなきゃ出来ない誹謗中傷》っていうワードも、今の状況を的確に言い表していると思うんですよ。あとは、TETTAくんの歌う《指のナイフ》とか。

――さらに、これまでマイクを持たなかったNAOYAさんが初めて歌割りに加わっているのも注目すべき点かと。

TETTA：最初はNAOYAも"ダンスに力を入れたい"って言ってたけど、今年から6人体制になったのもあって、メンバー間でも6人で歌いたいっていう話はしてたんですよ。

NAOYA：特にこの曲はメッセージ性が強いんで、ダンスだけじゃなくて6人の声でしっかり伝えられたのは嬉しいですね。最近ラップを担当するHAYATOとKENSHINの成長ぶりをライヴとかでも感じていたんで、そこに自分も混ざっていけたらっていうのは、前から感じていたんですよ。3人のほうがもっと違う色を出せるだろうし、このアルバムの制作を通して"歌とダンスを並行してやっていくのもいいな"って、改めて初心に返った気がします。

TETTA：新曲の中で最初に録ったのが「Shut Up! BREAKER」だったから、この曲で1回やってみたことで、たぶんNAOYAのラップ心にも火が付いたと思うんですよ。"もうちょっとやってみたい"って言うようになったし。

REI：「Beautiful」に入ってる《いつものあの場所で》っていうNAOYAの声とか、ヤンチャな感じの表現が曲にめっちゃ合ってる！

――それぞれの歌声の特性を活かすことで、よりバラエティー豊かな表現が可能になっていますよね。3曲目の「Breathe」もかなり込み入った歌割りでありながら、サビはTETTAさんが一手に担うことで、息ができないほどの切なさを強く感じさせたり。

TETTA：こういったメロウな曲から激しいナンバー、バラードと、曲調に合わせてそれぞれの得意のレンジを活かすようにはなってます。すごく大まかに言うと、REIが低音、EIKUが中音、俺が高音みたいな振り分けで、ラップだったら攻撃的なものはHAYATO、メロウなものはKENSHINとか。

――そして、ラストの「Only One For Me」が素晴らしくて！　ピアノで始まるやさしいサウンドの中に、みなさんの力強い決意を感じさせられました。

TETTA：やさしい曲ですよね、包み込まれるようで。

EIKU：この曲、マジで大好きですね！　他の曲では自分が思っていることをストレートに伝えているけど、この曲は自分たちだけじゃなく、支えてくれてるスタッフさんだったり家族、ファンのみんなと一緒に走り続けていくぞ！っていう歌詞になってるんです。特にグッとくるのがHAYATOとKENSHINのラップの部分で、歌詞の中に僕たちのファンの名称である"SWAG"とか、グループ名である"ONE N' ONLY"が入ってるのがすごく嬉しくて。

TETTA：ふたりのラップの使い分けも素晴らしくて、レコーディングで聴いた時に鳥肌が立ったんですよ。実際に出来上がってから聴いたら、もっと鳥肌が立った。曲自体、俺たちの"今"に対しても"将来"に対しても歌っているような気がして、去年のツアーで初披露した時も心が落ち着くというか、すごく温かい感じがしたんですよね。

EIKU：一番伝えたいのは"ひとりひとりがナンバーワンだよ"ってこと。僕たちが思ってることは昔からずっと変わらないから、どれだけONE N' ONLYが大きくなっても"存在が遠くなってしまう"なんてSWAGのみんなには感じてほしくないんです。

取材：清水素子

L→R：KENSHIN、NAOYA、HAYATO、EIKU、REI、TETTA

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『ON' O』

Album　4/15 Release
SDR

【TYPE-A】
ZXRC-2062
¥2,500(税込)

【TYPE-B】
ZXRC-2063
¥3,000(税込)

【TYPE-C(Blu-ray付)】
ZXRC-2064
¥4,000(税込)
※店頭・オンライン販売限定商品

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■ TETTA…過去の予言者になりたい
「歴史のことは今なら大体が分かるので、知識を付けて過去に行きたいです。坂本竜馬とかの歴史上の人物に"未来はこうなるよ"と伝えて、過去の予言者になりたいですね。でも、過去を変えたら自分もいなくなるのかもしれない…」

■ REI…歴史を変えてみたい
「自分がいなくなってもいいので、過去に起こった合戦の勝敗を変えてみたいですね。指揮官に作戦の進め方とかも伝えて、先導者として活躍したいなと。タイムマシンがあるからこそ、ifの世界を見てみたいと思います」

■ EIKU…戦国時代で活躍してみたい
「戦国時代に行ってみたいですね。憧れの武将もたくさんいるので、自分も若くて強い武士として戦場で活躍したいと思います。刀を持ってみたいっていう気持ちが強いだけなのかもしれませんが」

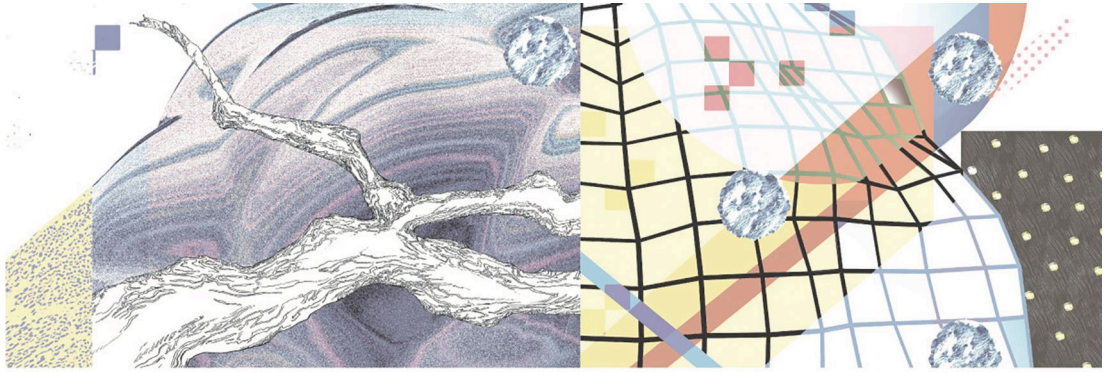
■ HAYATO…現代の予言者になりたい
「未来に行って仕入れたいろんな情報を現代で広めて有名人になりたいです。"何年に何が起こる"ということを未来で記録しておいて現代の予言者になるっていう。2～3年後の情報だとリアルですよね」

■ KENSHIN…未来の自分を見てみたい
「60歳くらいになった自分を見てみたいですね。夢を叶えて、仕事もやり切った60歳でいたいな～。ちゃんと子供もいて孫もいるのかも気になりますよね。でも、60歳でそれは少し早いかな(笑)」

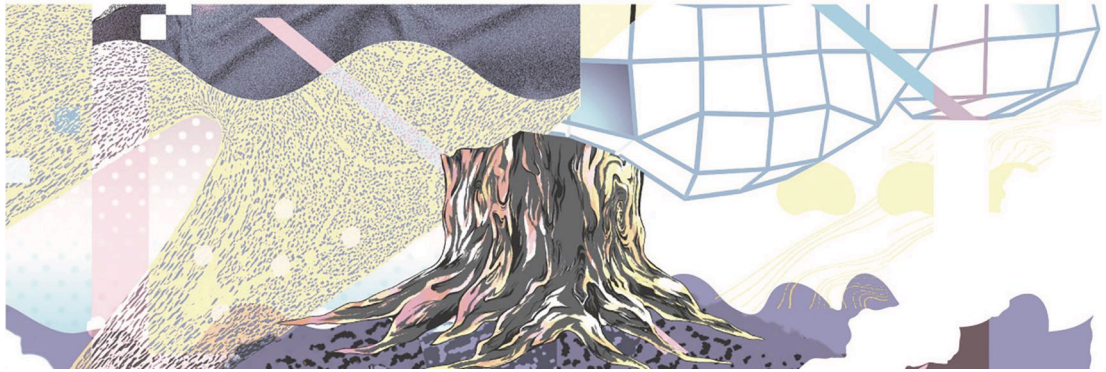
■ NAOYA…過去の人をびっくりさせたい
「スマホとか現代にある物を持ったまま過去に行って、過去の人を驚かせたいですね。どんな物でも、その時代になければ驚くと思うんですよ。スマホは電波がつながらないとか、充電がなくなるとかは別としてですけど(笑)」

“また新しいことがしたい！”と挑んだ作品

“高音出したい系男子”を標榜し活動中のウォルピスカーター。そのクリアーで少年性を擁したハイトーンヴォーカルで、これまで多くの株主（ファンの呼称）を魅了してきた。そんな彼のニューアルバム『40果実の木』は新機軸も多数な逸品。歌唱キーのレンジの広さや楽曲タイプごとの表現力も魅力だが、ほぼ全曲自身が歌詞を手掛けたという意欲作でもある。



W O L P I S C A R T E R



――ウォルピスカーターと言えば、高音を活かした歌唱が特徴的ですが、まずはその出自とも呼べる“歌ってみた”を始めたきっかけから教えてください。

「投稿を始めたのは高校３年の頃でした。もともと高校の軽音楽部でヴォーカルをやっていたんですが、引退して歌う場所がなくなってしまって。そんな時に友人からニコニコ動画の“歌ってみた”の存在を教えてもらったんで、それこそ勢いで始めました（笑）。歌うことは生涯の趣味にしたいと思ってたので」

――趣味？　意外です。てっきり“ゆくゆくはプロの歌い手を！”との願望を持っていたと想像していました。

「いやいやいや。それこそ長く続けられる趣味として歌い始めました。家でできますし。今ではお仕事として歌をやらせていただいてはいますが、自分としては歌は趣味の範疇を抜け出ていない感がまだあって。もちろんこれからも高い声は開発し続けていくし、歌っていきますよ」

――そのハイトーンは当初から？

「全然です。当初は今より１オクターブ半ぐらい低い歌声で、普通の男性キーの曲をかろうじて歌えるレベルでした。やり続けた結果、ここまでキーが高くなりました。もともと高い声への憧れはあったんですよ。“こんな高いキーの歌声の方もいるんだ!?”と知り、“もしかしたら自分でも出せるのでは？”と思ったことが挑むきっかけでした。それまでは高い声で歌うのは海外のメタルバンドのヴォーカルの方だけと思ってましたから。ところが、ネットでは普通の会社員の方や学生さんとかまで高い声を出して歌っている。そこで“どうやらハイトーンって選ばれし者のみに与えられる特権じゃなさそうだぞ”と。そこからですね、練習や挑戦が始まったのは。そのうちに高音もどんどん出せるようになり、出せると楽しくなり、もっともっと高い声へと…で、気付いたらこんなことになってました（笑）」

――（笑）。今や驚異的でもあります。

「今やキーを上げながら、その高さでいかに生で歌えるかへの挑戦でもありますからね。そのキーが上がっていったのも、キーを上げていくことで従来歌っていたハイトーンを出すのが楽になる、そんな考えからなんですよ。150キロの球を投げられる人は120キロぐらいの球なら楽勝で投げられるじゃないですか。それと同じで。より高い声を歌える人のほうが、楽勝でそれまで高かったレンジも歌えるだろうって」

――なるほど。では、ここからはニューアルバム『40果実の木』の話に移ります。先ほどまでのハイトーンの話とは対照的に、今作はハイトーンもですが、それを支えるハーモニー的なロートーンの歌声も印象的でした。それによってより聴きやすくなったり、ハイトーンがしっかりと浮かび上がっていたのも特徴的で。

「ありがとうございます。まさしくその辺りが狙いでもありました。というのも、これまでの作品の延長戦ではなく、今回は間口が広がっていくタイミングでもあったので、より多くの人たちに聴いてもらいたくて。そのためにも親しみやすく聴きやすい作品を目指しました。やはりハイトーンばかりで攻めても聴いてくださる方も疲れるでしょうし、トゥーマッチに感じるでしょうから。過去によく言われたんですよ、“聴いてて疲れる”って（笑）」

――あと、今作の特筆すべきところのひとつは、ほとんどの曲の作詞を自身で担当していること。過去作品では１～２曲ぐらいしかありませんでしたよね。

「そうですね。今作には自分の中で“好きな作家さんたちにテーマなど関係なく楽曲をお願いする”というコンセプトみたいなものもあって。そんな中、歌詞は自分で書いてみようと。僕の場合、楽曲制作をしていない関係上、かなり楽をしたり、ズルをしてきた後ろめたさがあったんです（笑）。それもあって」

――とは言いつつも、ここまで大量の作詞は大変だったのでは？

「もともと文章を読んだり書いたりするのは好きだったんですよ。なので、当初は特に重荷もなく。でも、書き始めるとかなり大変でした（笑）。その分、今回は“自分で作ったアルバムです！”と堂々と言いたいです」

――今まで軽いジョギング程度だったのが、いきなりフルマラソンに挑戦したようなものでしょうからね（笑）。

「今回の楽曲提供のクリエーター陣はウォルピスカーターの作品を支えてくれてきた方々なんですが、これまでは作詞込みの依頼だったんです。ところが、今回は作曲だけの依頼ということもあり、みなさん驚かれてました。“えっ、作曲だけでいいの!?　どうしたの？”って（笑）」

――やはり自分で歌詞を書いたものと提供曲とでは感情移入や歌への思い入れも違いますか？

「ところが自分の場合、変わりなかったんです。僕のヴォーカルスタイル自体、曲に合わせて自分の歌声をコロコロと変えていくタイプだったもので。良い意味でその各曲に飲み込まれていくみたいな」

――クリエーターの個性に自身を投影していくタイプだったと。

「そうですね。曲のほうに歌声を寄せていくタイプなんです。なので、提供曲もカバーもオリジナルも自分の中ではそう変わらなくて。内容的にも多岐に渡っていたし、自分の好きな曲をジャンルを問わず、その曲ごとに合っていると思しき歌い方で臨んだだけでした」

――ところで、今作はどこかこれまでの作品の延長戦ではなく、また新たなスタート感もありました。

「それはありました。これまでインディーズで３枚のアルバムを出してきて、自分の中でひとつ区切りが付けれたんです。そこから“また新しいことがしたい！”と挑んだ作品でもあったので。それもあり、ジャケットもタイトルもあえて従来の作品を踏襲せずにまったく新しいものにしたんです。歌も意外性も含め、これまでなかった幅広いタイプの曲を入れてみたし。なので、自分では非常に満足するものになりました」

――「ありきたりなさよなら」「徒花の涙」などのミディアムテンポの楽曲やバラード曲も印象的でした。どちらも非常にダイナミズムがあって。

「実はバラードが大の苦手で…。ミディアムやバラードって勢いや気合いだけじゃ敵わない表現力が求められるじゃないですか。これまで高い声に注力していたため、表現力をあまり気にしたことがなく、おざなりにしてきちゃってたんです。“高い声さえ出したら勝ち！”みたいな。だから、今回このようなタイプの楽曲を入れたのも、ある種のチャレンジや今後に向けてという意識もありました」

――最終的には活動の目指しているところや着地点はどこだったりするんですか？

「ぶっちゃけ“これから自分は何をやっていくか”や“何をやっていきたいか”ってあんまりないんです。強いて言うなら“マルチにやっていきたい”ぐらいですね。歌だけでは勝負できない実力だと自分では評価していますから。なので、歌以外の部分でもいろいろな基盤が作れたらなと思ってます。歌もですが、トークなど…ラジオをやっているのもそれもあってのことだし。基本的にしゃべるのは好きなので、声を使った職業をしていきたい。とはいえ、もちろん今は歌がメインです。最終的にはウィキペディアの職業欄に“マルチタレント”と載るのが夢なんです（笑）」

取材：池田スカオ和宏

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『40果実の木』

Album　3/25 Release
日本コロムビア

【初回限定盤
（歌ってみた CD付）】
COCP-41112～3
¥2,700（税抜）

【通常盤】
COCP-41114
¥2,300（税抜）

『真・株主総会』
9/27（日）　東京・Zepp Haneda

**『ハイトーン刑務所
～LIVE でキーを下げただけなのに～』**
11/01（日）　大阪・Zepp Namba

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■子供の頃に戻ってピアノを習わせたい
「音楽におけるアドバンテージって、子供の頃に身に着くと思っているんですよ。例えば、僕には絶対音感がないんですけど、子供の頃にピアノを習っていたら習得していたのかなって。だから、過去に戻って小さい頃の自分と両親に“将来的に必要となるからピアノを習わせなさい”と伝えに行きたいです」

樋口楓

樋口楓のこれまでとこれからがギュッと詰まっている

YouTube 実況を中心に歌い手やトーク配信などで、高い人気を誇るバーチャルライバー(VTuber)の樋口楓。当初よりファンメイドの楽曲を歌い、大会場でのワンマン成功の実績も持つ彼女が、ついにシングル「MARBLE」でメジャーデビューを果たす！

――活動開始から２年。いろいろな広がりがうかがえる中、今回いよいよメジャーデビューですね。

「まさかここまでになるとは、当初は想像もしていませんでした。そもそも始めたきっかけも、現在所属している『にじさんじ』のアプリ技術を広めるためのテスターとしてでしたから。そこでは音楽をするとかは夢にも思っておらず、“コメントをくださる方と会話をしたい”レベルのスタートでした」

――そこからここまでに至る、何か自身が思う要因があったりは？

「やはりファンやリスナーの方々の存在ですね。みなさんがいろいろとストーリーを生み出してくださったのが大きいです。中でも、歌うことに関してはファンメイド曲（ファンが VTuber に歌ってもらうために曲を提供）がかなり大きな要因です。結果的にライヴができるほどファンメイド曲も増えていきましたから」

――では、自身の活動や行動力に加え、ファンやリスナーがここまで育ててくれたのも大きかったと？

「大きいです。それも 100 パーセントに近いぐらい。私たちは日常を配信しているだけなので。そこからみなさんがイラストや小説、私らしい歌詞や曲を派生してくださり、それが広まって今に至っている実感は非常にあります」

――現在では VTuber もある程度市民権を得ているように思いますが、始めた２年前はまだその土壌が育ってなかったこともあり、理解もされづらかったのでは？

「そうなんです。最初の VTuber の方々は 3D が多く、いわゆるリアルな人間と変わらず、身体も動かせる動画が主流だったんです。そんな中、私たちは上半身だけを動かしての生配信メインだったもので、当初は“わざわざ二次元の顔を出す必要があるのか！”などの批判もありました」

――そこで挫けずに続けてこられたことに、何か今後への自信や信念を感じます。

「正直言って当初はここまで根付く確信はありませんでした。しかし、周りの『にじさんじ』の VTuber たちや楽しんでくれているリスナーの方々のおかげもあり、乗り越え、続けてこれた面も大きいです。特に『にじさんじ』の仲間は同じような批判を受けていたと思うのですが、それでも挫けずに続けていた。そこにはかなり勇気をもらったし、“よし、私も頑張ろう！”という気になりました。“ひとりじゃないんだ！”って。そんな気持ちをずっと抱いてやってきた感があります」

――そんな中、このメジャーデビューシングル「MARBLE」で樋口さんの活動に、さらなる広がりが出そうですね。まさに今後に向けてのスタートにぴったりな曲ですし。

「ありがとうございます。樋口楓のこれまでとこれからがギュッと詰まった一枚になりました。というのも、「MARBLE」の歌詞には、これまでの私のオリジナル曲の中から汲み取ったフレーズが入れ込んであるんです。そこにみなさんの応援があって今があるし、CD も出せるし、これまで以上に大きくなっていける可能性も出てきた、そんな想いも込めて歌わせてもらいました」

――全体的に力強く、“これから何があってもみんなと一緒に進んでいく！”というような気概も感じました。

「この曲にはこれからの樋口楓の覚悟みたいなものも詰め込みました。《かかって来いよ》っていう歌詞なんて、まさにその表れで」

――そんな楽曲のレコーディングはいかがでしたか？

「難しかったし、感動しました」

――感動？

「これまでの作品はいわゆる宅録で、その場でのディレクションもなく、クリエイターさんとファイルのキャッチボールを経て作品を完成させていたんです」

――今回はがっつりとしたバンドサウンドですもんね。

「実際にバンドのレコーディングも見学させていただいたんですが、“うわっ、やっぱりプロってすごい！”ってなりました(笑)。デモ音源をそのまま演奏するのではなく、その場で自分たちのアイデアを盛り込んでくれたりして。デモですらかなり良かったのに、そこに各個人のアレンジが加わって、“こんなにも色付いて、ブラッシュアップされるんだ!?”と感激しました。その分、私も“頑張ろう！”ってなったし」

――対して、難しかった面というのは？

「私、今までは自己流で思った通りにただ歌っていたんです。だから、“果たしてこの歌い方でいいのか”と悩んじゃって。“そんな歌い方で想いが伝わるのか”と自問自答や試行錯誤に陥ってしまったのですが、いろいろアドバイスをいただき…時間は非常に掛かりましたけど、この歌にもっとも合う自分のスタイルに至れたかなと」

――“これから行くぞ！”感や“足掻いてでも進んでいく！”的な歌詞に樋口さんの過去と今後を感じました。

「ここに至るまでの道のりは、決して楽しいことだけではなかったですからね。さっきの VTuber としての偏見しかり、自分なりに落ち込んでいた過去や、歌がどうしても上達しないジレンマ…みなさんもいろいろな苦悩や葛藤がおありでしょうが、私にもそういうものがあって。VTuber もリアルなアーティストさん同様、傷付いたことや挫折があって今があるので、その辺りも歌に込めています。未だに二次元などに抵抗がある方に、VTuber もリアルな方々と同じように生きているんだと伝えたかったし、偏見の目もなくしてもらいたい。それらも含め、この歌詞は今の私の気持ちにぴったりでした。なので、気持ちを重ねて歌わせてもらいました」

――M2 の「Sugar Shack」はライヴでのお客さんの光景やいろいろなシーンが浮かんでくる曲ですね。

「1 曲目がギターが中心のバンドサウンドだったのに対して、こちらはシンセやキーボードのラインを前に出したくて。あと、ライヴ映えする曲も欲しかったし。だから、煽りも入れたい、ラップもしたい、盛り上げたい、歌もしっかり歌いたい…など、私がリクエストした要素を一曲に集約していただきました」

――打って変わって３曲目の「For you」はミディアムバラードで。歌詞はファンも交えて作られたそうですね。

「作曲は影山ヒロノブさんにしていただきました。それを配信でみなさんに聴いていただき、それに合った感じで私が歌いそうなフレーズを募って、私の作った歌詞をもとに幾つか入れ込まさせていただきました」

――そこではさぞかし素敵なフレーズの応募があったのでは？

「私にはそぐうでしょうけど、楽曲にはそぐいそうもないものもあって…」

――例えば？

「私的にはファンのみなさんに感謝の気持ちを伝える歌詞にしたいと思ってたんですけど、《バトルしようぜ》とか《ホームランを打て》とか(笑)」

――なるほど(笑)。では、今作でメジャーデビューということで、これからのビジョンを教えてください。

「やはり VTuber が広がる未来のために自分ができることをしていきたいです。とにかくこれまでの VTuber ができなかったことをやってみたい！　その中のひとつに野外イベントがあって」

――みなさんの形態を考えると、かなりハードルが高そうですが。

「でも、やりたいですね。できれば甲子園球場で！　関西出身だし、野球が好きということもありますが、高校野球の応援に行った時、グラウンドでもスタンドでもみんなが輝いていたのがとても印象深かったんです。特にグラウンドが。なので、私もそこに立って歌ってみたいなって。そこでやったとなったら、“VTuber っていうのが甲子園でライヴをやったらしい！”“屋外で 3D が動いてライヴをやったんか!?”“そもそも VTuber って何なん？”と話題になって、VTuber のことを知ってもらったり、広まるきっかけになるかもしれないし。だから、いつか実現させたいです！」

取材：池田スカオ和宏

okmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

「MARBLE」

Single　3/25 Release
Lantis

【初回限定盤(Blu-ray 付)】
LACM-34976
¥2,200(税抜)

【通常盤】
LACM-14976
¥1,400(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■未来に行って VTuber 業界の盛況を見てみたい
「5 年後、10 年後に行って、私を含めた VTuber 業界がどんなふうになっているのか知りたいですね。将来の目標として三次元のアーティストさんと一緒にテレビに出たり、ライヴをしたりしたいので、それが実現する未来を見てみたいと思います。樋口楓がテレビで歌っている姿なんて、想像しただけでもワクワクしてしまいますよ！」

L→R　吉田結威（Gu&Vo）、山田義孝（Vo）

吉田山田

今回のベストアルバムを出すことが、すごく新鮮に思える

昨年 11 月に中野サンプラザホールにて開催した『大感謝祭』で、デビュー 10 周年を締め括った吉田山田がリリースする初のベストアルバム『吉田山田大百科』。10 年の軌跡であり、11 年目への架け橋となる本作について訊きつつ、ふたりの今の心境も語ってもらった。

── デビュー 10 周年に向けて『変身』『欲望』『証命』という三部作となるアルバムを作るなどしてきましたが、デビュー 10 周年を終えた今の気持ちはいかがですか？

吉田：10 周年を迎えて燃え尽きようと思ってたんですよ。今までもアルバムを作って、そのアルバムを携えてツアーを回って、そこで燃え尽きようと毎回思ってはいたんですけど、ツアーが終わる頃には、次の作品への制作意欲だったり、自分たちの未来像が思い浮かんでいたんですね。それはすごく良いことだし、それで歩みを止めずに 10 年間やってきたことは誇りに思ってるんですけど、立ち止まって、ひとりの人間として自分の人生について考えるにはいいタイミングだと思ってて。それぐらいの気持ちで本当に燃え尽きないと 10 周年という区切りは迎えられない。だから、そのためにも三部作となるアルバムを作り終えて、自身最大規模となる中野サンプラザのライヴで全部出し切るということを目標に、ここ 3 年くらい集中してやってきたので、さすがに燃え尽きましたね。気持ち的には吉田山田の第一章が終わったみたいな。だから、今回のベストアルバムを出すことが、すごく新鮮に思えるんですよ。

山田：僕も中野サンプラザを目標にやっていたので、それが終わったあとは…まぁ、真っ白まではいかないまでも、ホワ～とした状態になってましたね。で、“次に何をやりたい？”とかは考えないで、とにかく出てくるものをかたちにしようと思って、今は曲作りばかりしてます。そこから“この先”が見えてくるんじゃないかと思ってるので、沸き出てくるものをかたちにしている最中です。

── ということは、ちゃんと 10 周年を迎えれたと？　『変身』のインタビューの時には“今の自分の人間性だったら全然ダメだなって思うし、10 周年を迎えても満足できない”と言っていたわけですが。

吉田：そうですね。あの 10 周年を象徴する中野サンプラザが、自分の人生の中で一番いいライヴだったと思えるんですよ。だからでしょうね。足りない部分も含めて、吉田山田としてひとつのものが完成したと思えたので。

── そして、今回のベストアルバム『吉田山田大百科』。5周年の時はシングル集（2014 年 12 月発表の『吉田山田シングルズ』）だったから選曲に悩むことはなかったと思うのですが、今回は悩んだのでは？

吉田：めちゃくちゃ選曲が難しかったです。楽曲の思い入れを言い出したら切りがないんですよ。そんなのは全曲にあるし、到底選べないから、僕らふたりとスタッフ 5 人の多数決にしました。“この曲はセットリストに入ててほしいよね”も含めて、基本的に“吉田山田と言えば！”という曲を選んで、そこにプラスして“この曲だけは入れたい”というものを選びました。

── 新曲も収録されているのですが、「いくつになっても」は今回のために作った曲になるのですか？

吉田：いや、少し前に出来上がっていた曲で…昨年の『47 都道府県ツアー　～二人またまた旅 2019 ～』を回ってる時かな。なんかね、気持ち良くできた曲なんですよ。山田がデモを持って来てくれて、それをアレンジャーの涌井啓一くんと 3 人で、その場で基本のかたちを作っていったんですけど、“あっ、これからの吉田山田の曲の作り方ってこうなのかもしれない”と思えた曲ですね。ボーナストラック盤にもう 1 曲ありますけど、曲調も含めて今回のベストアルバムの最後に入れるのはすごくいいなと思って入れました。

── 山田くんはどんな曲を作ろうと？

山田：『証命』を録ってる段階あたりからフォークソングっぽいものが増えてきてて、その後半ぐらいにできた曲だったんですけど、作りながらも“ずっと歌ってたいな”と思ってたんで、それをかたちにした感じですね。

── 新曲はもう 1 曲あって、ボーナストラック盤に「微熱」が収録されるわけですが、これについては？

吉田：三部作は決まったアレンジャーとディレクター、バンドメンバーで作ってたんですよ。それはそういうコンセプトだったんですね。土台を固定して、その中で僕らがどういうものを作れるかっていう。そんな三部作を作り終えたあと、久しぶりに今まで一緒にやったことのない方とやってみたいと思って、一番最初にトライした曲なんですよ。ボーナストラック盤に入れようと思って作るんじゃなく、自由に…ベテランの方にディレクションしていただいので、何かを吸収しようという気持ちもありつつ。だから、良くも悪くも固まった自分のやり方を 1 回壊して、新たな発見をする時期なのかなってトライしてみたんです。そういう意味では、聴く人の気持ちとか、今の吉田山田の立ち位置とかは一切考えず、いろいろ実験しながら作っていきました。「いくつになっても」はすごく分かりやすい“これからの吉田山田”でしたけど、この「微熱」にも最新の吉田山田の挑戦が詰まってるんです。

山田：節回ししにしても、自分たちは聴く人が覚えやすいようにシンプルにしたりするんですけど、癖を出してもいいってディレクションしていただけて。だから、出来上がったものを聴くと自分でも違和感があったりするんですけど、それが味になってたりするんで、“あっ、こういうやり方もあるんだ!?”って勉強になりましたね。

── このベストアルバムが総括になると思うのですが、10 周年を迎えたことで見えた次のビジョンはどんなものですか？

吉田：それは次の作品を作る時にはっきりとする気がしていて、今はまだそうしないでいる時期というか…山田も言ってましたが、“11 年目だな”とか“こういうのを作ろう”も考えず、今は出てきたものをそのまま出すだけ。10 周年を迎える前は“10 周年を終えたら誰かとコラボするのもいいな”って漠然と考えていたけど、11 年目になっての今の気持ち的には意外とそこに向いてないんですよ。新しいことには挑戦したいんだけど、それは自分たちの中にあるような気がしてて。それが結果的に“憧れのあの人にアレンジしてもらおう”ってなるかもしれないけど、今は“あれ？　どうしてこのひと言にときめくんだ？　今までは何も思わなかったのに”という積み重ねが、これからの自分を作っていくのかなって思っていますね。なので、今はフラットに生きている…という感じです。11 年目をどうするかは、これからはっきりしていく気がするし、それが分かった時、もう自分は迷わないと思います。人によっては受け入れられないものであっても、“ごめんね。俺はこれがやりたいんだ”って選べる…そういう目をちゃんと持って 11 年目に行けるなって。それって今まで以上に濃く、自分たちの人間性が音楽に出ると思うから、きっとすごく面白いことになると思いますね。

山田：まだ僕も“これだ！”というのものがないんで、それを探す時間というか…今はそれでいいと思ってるんですけど、曲を作ってて思うのは、身近なことにアンテナを張ってるなって。いつも通ってる道なんだけど、“こんなところにこれあったっけ？”みたいな。そういう些細なことに心が動いたり、ピントが合ってたりしているので、身近にあるものを大事に見る時間なのかなって思ってます。

取材：石田博嗣

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『吉田山田大百科』

Album　4/8 Release
PONY CANYON
【デラックス盤（Blu-ray付）】
PCCA-04936
￥3,900（税抜）

【ボーナストラック盤】
PCCA-04937
￥2,500（税抜）

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■吉田結威…タイムマシンを使用する権利を売る
「このタイムマシンって僕だけが乗れるんですかね？　だとすれば、その権利を 2 兆円ぐらいで売ります。僕は過去にも未来にも行きたくなんですよ。過去に行って恐竜を見たいとは思うけど、今の人類には免疫がないウイルスが蔓延してるかもしれないじゃないですか。逆に未来…例えば 100 年後とかに行って、地球が廃墟みたいになってたら、今を生きる気力がなくなるというか、もう能天気には生きれなくなってしまう。だから、使わずに、その権利を 2 兆円ぐらいで売って、今を贅沢に暮らします」

■山田義孝…過去の自分を思い止まらせる
「僕の大好きな遊びって子供の頃から変わってなくて、未だにカードダスやミニ四駆にときめいたりしてるんですよ。で、ずっと大事にしているカードダスがいっぱいあって、キラカードっていうレアなものだけを集めてるんですね。なのに、ある時、大量に捨ててしまったことがあるんです。こんな子供っぽい遊びはもうやめないといけないと思って。そこに戻って思い止まらせたいです！　“お前はこの先もずっとカードダスが好きなんだぞ！　36 歳になっても楽しんでいるんだから”って言ってやりたいですね」

個性的なヒーローが集合したようなアルバム

約３年振りとなるアルバム『ASSEMBLE』はTVアニメ『転生したらスライムだった件』オープニング主題歌の２曲やTV『ウルトラマンタイガ』オープニングテーマなどのシングル曲の他、ダンスチューン、ボカロ風、エモ系ロックなど多彩な楽曲を収録。本人が全作詞を担当し、寺島ワールドが詰まった一枚となっている。

――タイトルの“ASSEMBLE”は“集める”とか“招集する”という意味があるそうで。

「アルバムタイトルの意味合いは後付けなんですけど、どうしようかと悩んでいる時に担当から提案があって。理由を尋ねたら“とあるヒーロー映画の台詞”とのことだったので、なるほど確かにいいなと」

――シングル曲のひとつ「Buddy, steady, go!」(2019年８月発表)はTV『ウルトラマンタイガ』オープニングテーマなので、すでにヒーローがひとりいますしね。

「いますね(笑)。それに、同時にライヴの開催も前提にしていたので、“みんな集まれ！”と号令を掛ける意味も含んでいます」

――新曲では、まずリード曲の「UNBREAKABLE」はダンスチューンで、MVでもダンサーと一緒にダンスを繰り広げていますね。

「シングル「Buddy, steady, go!」のカップリングで「MONSTER」という曲があって、昨年末のライヴイベント『Original Entertainment Paradise』(以下、『おれパラ』)で披露するためにダンスの振りを作ってもらったんです。久しぶりのダンス曲だったし、いい感触があったので、その流れを引き継げたらいいなと思って、ゴリゴリのダンス曲を作っていただきました」

――作詞は寺島さんで。今作もご自身が全楽曲の作詞を担当されていますが、毎回作詞の時は自分の好きなアニメや漫画、ゲームなどをモチーフにして書かれているんですよね。

「はい。曲を聴いてどんなキャラクターや作品が合うかを想像するんですけど、「UNBREAKABLE」は攻めた曲でありつつもクールさもあって、雷のイメージも感じたので、僕の中でそれに当てはまるキャラクターを思い浮かべながら歌詞を書いていきました。どんな作品のキャラクターなのかは、みなさんで想像していただければと」

――「カクシンボ」はZAQさんの作編曲ですね。

「担当がZAQさんと同じということもあって、以前から勧めてくれていたし、いつかお願いしたいと思っていたので、それが叶ったかたちです。イントロのクラップは絶対に入れたかったんですよ。一気にアガるし、簡単にみんなで音を奏でることができるし。そういうイントロの感じと、ボーカロイドの曲みたいな雰囲気にしたいという、その２点を発注の時にお願いしました。ニコニコ動画内におけるボカロの曲ってボカロPのみなさんが何のしがらみもなく作りたいものを作っていて、その何の忖度もない自由さがすごくいいと思っていたので」

――「ハートチューニング」はラジオをチューニングする音から始まる曲で、寺島さんのラジオ愛が詰まっていると思いました。ちなみに寺島さんが思うラジオの魅力というのは？

「歌詞にも書いたんですけど、《一方通行でも意思疎通》がラジオの醍醐味だと思っています。リスナーは“読んでほしい”とか“相談に乗ってほしい”などパーソナリティーのことを頼ってお便りを送り、パーソナリティーはリスナーの相談に親身になって応える。直接触れ合うこともないし、電波は一方通行だけど、パーソナリティーとリスナーの間には絆があって、側にいるような安心感がある。今はTwitterやメールで、昔のようなハガキや手紙、FAXだった頃と少しやり方は変わりましたけど、ラジオの根底にある“ハート”は変わりません。自分がパーソナリティーをやるようになってから、お便りを介したリスナーとのやり取りの素晴らしさをより実感して、いちリスナーだった頃よりもっとラジオが好きになりました。それで“ハートチューニング”というタイトルを付けさせていただきました」

――「光の在処」はBiSHやEMPiREなどを手掛けるSCRAMBLESさんの楽曲で、BiSHなどに通じるエモさのあるロックチューンですね。

「BiSH感が満載です(笑)。僕はBiSHさんの曲にはあまり触れていなかったんですけど、とにかくエモいというのはうかがっていたので、それで「プロミスザスター」などを聴いたらめちゃめちゃカッコ良くて。聴きながらエモさの理由はどこにあるのかを考えたり、歌い方の参考にもしたんですけど、とにかくキーが高くて歌い切れるのか不安がありました」

――BiSHなどWACK系の楽曲には、歌詞の言葉とは別の言葉に聴こえる発音をするという特徴もありますしね。

「ありますね。でも、この曲はエモさをストレートにぶつけたかったので、それはやりませんでした。というのも、この曲はある作品の主人公に掛けてあげたい言葉やメッセージを歌詞にしているんです。だから、言葉遊びよりもストレートなほうがいいと思ったんです。そういう言葉遊びは以前から個人的にやっていて、今作では「UNBREAKABLE」で《risin' sun & gold》という歌詞を“雷神さながら”と歌っていたりします」

――「深海より」はお洒落でクラブっぽい要素もあるトラックなのが印象的でした。

「ディレクターから今は世界的にも音が少ない曲が増えているという話を聞いて。僕らのアニソン界隈は音が盛り盛りでドラマチックな展開の曲が多いから、逆に音が少ない曲は面白いと思って制作しました。ただ、作詞が難しくて。アルバム制作の序盤に曲はできていたんですけど、作詞に手こずってレコーディングは最後になりました」

――都会も深海も、そこにいる者を飲み込んでしまう闇があるという。

「そうそう。都会に疲れて海に逃げて来て、何となく海に吸い込まれそうな気持ちになる時ってあるけど、そこで何かを思い立ったのか、何かに癒やされたのか、また都会の生活に戻っていく。人間の持つそういう不安定さみたいな暗い部分を歌詞にしました。他の曲はメッセージ性があるけど、「深海より」と「UNBREAKABLE」は物語として作った感覚です」

――《鈍色の》という表現が好きです。灰色のことですよね。

「そうです。海は本来きれいなものなんだけど、心の影が全部に覆い被さってそう見えてしまう。鮮やかなものでも心の在り方次第で見え方が変わりますし。昔から好きな言い方ですけど、初めて歌詞に使いました」

――最後の「僕らの奇跡」はちょっと懐かしいシティポップ感がありますよね。

「今、竹内まりやさんとかシティポップが再注目されてますけど、僕は土岐麻子さんが好きで、もともとシティポップに対する憧れが漠然とあったんです。それを実現していただいたので、すごく嬉しかったです」

――この曲では“みんなと出会えたことは奇跡だ”と歌っていて。

「以前から歌詞のテーマにしたいと思っていたゲームがあって、日常でいろいろなことをこなしながら仲間と絆を深めていくっていう内容なんですけど、ゲームってひとつでもイベントを逃したら辿り着けないエンディングがあったりして、そのキャラのルートにも入らないんです。でも、それって僕らの人生も同じで、当たり前のように生きているけど、どこかで選択が違っていたら今の瞬間は訪れていないわけで。選ぶか選ばないかの選択を当たり前にやっているけど、一個一個の小さな奇跡の積み重ねで今があるんですよ。だから、応援してくれるみんなと出会えたのも、みんなで作った奇跡なんだって。本当に大げさではなく、そう思ったんです」

――みんなで《lalala…》と歌っている絵が想像できますね。

「昨年の『おれパラ』でのことなんですけど、体調不良で本編には不参加だった鈴村健一さんが１曲だけ歌いに来てくださって。その曲が簡単に言うと、みんなで“ラララ～”と歌う曲だったんです。その光景が僕の中にはすごく残っていて、あれこそ鈴さんがみんなと積み上げてきたものがあったからこその瞬間だったと。その出来事もエッセンスとしてこの曲には込めています。最初は“奇跡の歌”というタイトルで、それじゃ大袈裟すぎると思ったんですけど、“僕らの奇跡”くらいは言っても大袈裟じゃないんじゃないかなって」

取材：樗林史章

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『ASSEMBLE』

Album　3/25 Release
Lantis
LACA-15816
¥3,700(税抜)

『TAKUMA TERASHIMA LIVE TOUR 2020 4th STAGE ～ ASSEMBLE ～』

5/10(日)　宮城･仙台 PIT
5/16(土)　大阪･堂島リバーフォーラム
5/24(日)　石川･金沢歌劇座
5/30(土)　愛知･ダイアモンドホール
6/06(土)　広島･BLUE LIVE HIROSHIMA
6/07(日)　福岡･スカラエスパシオ
6/14(日)　北海道･ペニーレーン24
6/19(金)　東京･Zepp DiverCity Tokyo
6/20(土)　東京･Zepp DiverCity Tokyo

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■タイムパラドックスを試す
「過去に行って何かしてみて、本当に未来が変わるのかを確かめてみたいですね。昨日、『ドラえもん』を観て、ちょうどタイムパラドックスについて考えていたんですよ。僕、『ドラえもん』が好きなんですけど、作品によってはタイムパラドックスでハッピーエンドを迎えるものもあれば、そうじゃないものもあるので、実際のところどうなるんだろうって。自分の人生で試すのは怖いから他人の人生でやるかもですが(笑)」

工藤晴香

自分の意志を反映させないと、自分の作品とは言えない

『バンドリ！』こと人気ガールズバンドプロジェクト『BanG Dream!』で氷川紗夜役を担っていることでも知られる声優の工藤晴香。モデルやイラストレーター、デザイナーなどマルチな才能を発揮している彼女が、ソロアーティストとしてデビューを果たす。処女作『KDHR』は、そんな彼女の個性や魅力が詰まった注目の一作と言える。

――『KDHR』はパワフルかつスピーディに場面が変わっていく「MY VOICE」と「IRON SOUND」で幕を開けますね。

「“激しい曲を作ろう！”ということになって一番最初にできたのが「MY VOICE」だったんです。曲を書いていただいた平地孝次さんに、なるべくギターが目立つような感じにしてほしいということと、落ちサビは転調してほしいということを伝えたら、この曲を作ってくれました。最初にデモを聴いた時は“求めていたものが来た！”と思いましたね。“これだぁーっ！”みたいな（笑）。ヘヴィなギターが活かされてるし、どんどん場面が変わっていくのも良くて、すごく嬉しかったです」

――ただ、これだけ展開が多いと楽曲の構成やメロディーを覚えたり、歌詞を書いたりするのが大変な気もしますが。

「こういうものを表現したい、歌いたいという気持ちが強かったので、“やってやる！”という気持ちでした」

――さすがです。「MY VOICE」の歌詞は“自分の内なる声に従って生きたい、生きろ”ということを歌っていますね。

「この曲はまずテーマを決めようとなった時、“強さ”だったり、“諦めない”や“強い意志で前に進んでいく”といったことを表現したいと思ったんです。そこから入って歌詞を書き始めたんですけど、自分の想いを一方的に訴えるよりは、この曲を聴いてくれた方に元気をあげたいし、背中を押してあげたいという気持ちがあったんですね。だから、リスナーの方のことも意識して書きました。一人称が“僕”になっているのも“私”だと限定されちゃうと思ったからなんです」

――「MY VOICE」は最初にあがってきた曲だったわけですが、そういうことを感じさせない良質な歌詞になっています。2曲目の「IRON SOUND」の歌詞についても話していただけますか？

「ずっとライヴのことを考えながら歌詞を書いていました。曲を聴いた時に“激しいのが来た！”と思ったし、構成もすごく面白くて、これはライヴでやったらめちゃくちゃ盛り上がると思ったんです。なので、ライヴをイメージした歌詞を書きました」

――ライヴでは爆上げ状態になるでしょうね。今作の歌詞に関しては、言葉の意味よりも語感や響きを重視した感のある「Thunder Beats」も秀逸です。

「私はヒップホップがすごく好きなので、ヒップホップっぽい曲…ラップはできないんですけど、韻を踏んでいたりとか、言葉遊びをしている曲も欲しいというのがあったんですよ。だから、そういうものを意識して書きました。良い意味で楽しみつつ書けました」

――激しくてインパクトの強いハードチューンに加えて、「それぞれのPLANET」「アナタがいるから」といったエモーショナルな楽曲も収録されていますね。

「制作に入る前に、今回は初めてのアルバムなのでいろんな顔を見せたいという話をしていたんです。激しい曲だったり、バラードだったり、ミドルテンポの曲だったり。それは結構最初の段階で決めました」

――全曲を同じチームで作ったとは思えない幅広さですね。「それぞれのPLANET」と「アナタがいるから」はどんなふうに作ったのでしょう？

「「アナタがいるから」は歌詞先行だったんです。いろいろやってみようということで、まず歌詞を書いて、それを作曲家さんに投げて。そういうやり方をしたんですけど、これも想像通りだったというか、自分がイメージしときながら、書いた通りの楽曲があがってきてびっくりしました。「アナタがいるから」はラブソングととらえられるかもしれないし、そう解釈して自分の想いを重ねて聴いてもらってもいいですけど、私の中では今まで出会ってきた人たちに感謝の気持ちを届ける曲として歌詞を書きました。でも、歌詞を“アナタたち”という言葉にするとはまりが悪いんですよ。“うわぁ、どうしよう！”ってなって、複数形だから“You”にしようかと思ったんですけど、“You がいるから”って何だよ！って（笑）。それで、“アナタ”にしたんです」

――それぞれにとって大切な人が思い浮かぶ歌になっていますので、“アナタ”で問題ないと思います。

「良かったぁ（笑）。いろんなとらえ方ができる曲になって、音楽は面白いなと改めて感じますね。「それぞれの PLANET」はテーマがはっきりしています。人と比較されたり、自分を否定された経験がないという人は多分いないと思うんですよ。あとは、“あの人みたいになりたいけど、自分はなれない”と思って落ち込んだりとか。そういうふうに誰しもが感じたことがある経験に対して、“大丈夫だよ”というメッセージを送りたかったんです。それも、“そんなことに負けずに、もっと頑張れよ！”という姿勢ではなくて、“あなたは自分らしくあればいいんだよ”というふうに、それぞれの人を肯定したいという想いがあったんです。だから、人はそれぞれだし、あなたが羨ましく思っている人と同じように、あなたも輝いているよ…という歌詞になっています」

――そんな「それぞれの PLANET」や「アナタがいるから」は包み込むような温かみにあふれた歌も聴きどころです。

「この辺りの曲は強い曲とは違うヴォーカルということで、やさしさをすごく意識しました。あと、声優のお仕事をしていると距離感がすごく大事なんですよ。隣にいる人に“大丈夫だよ”と言う時と、ちょっと離れている方に“大丈夫、大丈夫！”という言う時では自然とニュアンスが違ってくるじゃないですか。今回のアルバムの歌はそういう距離感をめちゃめちゃ意識しました」

――そこは声優ならではの強みと言えますね。ということは、歌の表情や温度感などは全て自分で決めたのでしょうか？

「基本的にはそうです。歌詞を書いている段階でどういうふうに歌うかを自分で組み立てるんですよ。で、レコーディングスタジオに行って、まず一発目にツルッと歌う。それを聴いたディレクターが“あぁ、そういう歌い方をするんだね”と言って、“だったらここはもうちょっとこういうふうに歌って”とか“ここはこういう感じに”といった要望を出してくれて、それを踏まえつつふたりで組み立てていくという感じです。自分の意志や想い、やりたいことなどを反映させないと、自分の作品とは言えないですから」

――最後を締め括るのは華やかかつアッパーな「Memory Suddenly」ですが、この曲については？

「この曲は「アナタがいるから」とちょっとテーマが似ているんですけど、「アナタがいるから」は感謝の気持ちを歌っているのに対して、「Memory Suddenly」は“自分が経験してきた嫌なこととか、忘れたい記憶とかもあなたの一部なんだよ。それも今のあなたを形成している要素なんだよ。だから、全てを肯定して生きていこう”という歌詞です。それは自分自身にも言えることですし、相手にも言えることなので、“受け入れることで前に進む”というか。それがテーマです」

――いいですね。工藤さん自身が歌詞を書かれて、本当に良かったと思います。

「ありがとうございます。歌詞は大変でしたけど、出来上がったアルバムを聴いて、自分で書いて良かったと思いました。これからも歌詞は自分で書いていきたいという気持ちになっています」

――『KDHR』を完成させて、どんなことを感じていますか？

「たくさんの人に届けたいという気持ちがすごく芽生えています。リスナーさんのことを考えたりしつつ歌詞を書きましたけど、こうやって完成してみると普段応援してくださっているみなさんはもちろん、私のことを知らない人とかにも『KDHR』を聴いてもらいたいです。私の曲を聴いて元気になったり、悩みがあったけど背中を押してもらえたというような人がいるといいなという想いがあるので。そういう力を持った作品になっていると思うので、より多くの人に届くことを願っています」

取材：村上孝之

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『KDHR』

Mini Album 3/25 Release
CROWN STONES
／日本クラウン

【TYPE-A（M-CARD付）】
CRCP-40600
¥3,182（税抜）

【TYPE-B（M-CARD付）】
CRCP-40601
¥3,182（税抜）

【TYPE-C】
CRCP-40602
¥2,273（税抜）

music UP's Q! 今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■ The Beatles と X JAPAN と Nirvana のライヴを観に行く

「どうしてもライヴを観てみたいバンドが３つあるので、過去に行って The Beatles と X JAPAN と Nirvana のライヴを観に行きたいです。The Beatles は親の影響もあって聴いていたってのもあるんですけど、昨年の２月に Roselia で日本武道館のステージに立った時、“ここで The Beatles がライヴをやったんだ!?”と感慨深いものがあって、“どんなライヴだったんだろうな”と思ったので、その武道館のライヴを観てみたいですね。X JAPAN は今のメンバーももちろん好きなんですけど、HIDE さんと TAIJI さんがいた頃のライヴを観たいですね。映像では観てるんですけど、自分がギターを持ってステージに立つようになったこともあり、“どんな音なんだろう”“どんな空気感なんだろう”って気になるので、生で観てみたいんですよね。あと、Nirvana は“ギターを始めたいな”って思ったきっかけのバンドなんですよ。それもあって、ライヴを観てみたいです」

上田麗奈

“ごめんね”じゃなく、“ありがとう”で伝えたい

上田麗奈が初のフルアルバム『Empathy』をリリース。共感をテーマに、高橋 海(LUCKY TAPES)、ORESAMA、唐沢美帆、松井洋平(TECHNOBOYS PULCRAFT GREEN-FUND)、田中秀和(MONACA)など多彩なクリエーターが参加し、透明感のある歌声と声優ならではの豊かな表現力で彩られた、自らネガティブと評する彼女の内面を覗くようなアルバムとなっている。

――タイトルの“Empathy”は“共感”という意味ですが、どうしてこういうタイトルを付けたのでしょうか？

「前作『RefRain』(2016年12月発表のミニアルバム)は自分ひとりで完結したものだったので、今度はそれとは違うアプローチで、誰かと一緒に音楽を作ってみたいと思って、その時に“共感”というテーマが浮かんだんです。このテーマと同じ意味を持つ言葉を探していった結果、“Empathy”というタイトルになりました」

――今作には多彩なアーティストが参加していて、「アイオライト」はLUCKY TAPESの高橋 海さんが作編曲、「あまい夢」はORESAMAが作詞作曲されていますが、こういうシティポップ調で明るく軽快な楽曲を歌っているのが新鮮でした。

「前作は静かめが多かったですからね。初めて歌うジャンルの曲だったので、やっぱり難しかったです。曲調は明るいのですが、それに対して暗めに歌うというギャップに、最初はなかなか慣れなくて。そのギャップが魅力につながるということを知るのに、少し時間が掛かりました」

――LUCKY TAPESはもともとお好きだったとか？

「実は、このアルバムの制作を始めてすぐくらいの頃に、初めて聴かせていただいたんです。『dressing』というアルバムでした。もともと今作はミニアルバムの予定で進めていたのですが、LUCKY TAPESさんの曲を聴いたことで、やりたいことがミニアルバムでは収まらなくなってきてしまって、急遽フルアルバムに変更したという経緯があります」

――「アイオライト」の作詞は上田さんですが、タイトルは鉱石の名前ですね。

「アイオライトは角度によって色の見え方が変わる石なのですが、この曲には仕事で苦しいと感じたことも角度を変えれば糧になっているという意味を込めたくて。アイオライトは語感も良くて、“新しい変化”や“美しい変化”といった意味もあるそうで、それも素敵だと思って付けました」

――自分の経験を肯定する歌ということですね。

「そうですね。ネタばらしをするようですけど、仕事をしていると不甲斐なかったり、情けなかったり、辞めてしまいたいと思うことが、毎日あって…」

――毎日ですか！

「それでも辞めないのはなぜかと考えた時に、いろいろ思い浮かんでくるものがあったんです。自分ひとりでは何もできないということや、周りの人が自分の力を発揮させてくれる瞬間があるということ。あと、角度を変えれば、耳を澄ませば、ちょっと違った色が見えたり、音が聴こえたりするということも。ひとりではなくみんなで作品を作るという行為には、そんな辞められなくなる魅力みたいなものがあるんじゃないかと。そんなことを考えながら歌詞を書きました」

――普通は気にしない些細なことでも気に病んだり、すぐに落ち込んだりするほうですか？

「そうですね…。被害妄想が激しいタイプなので、何でもネガティブにとらえて勝手にイメージを作ったり。些細なことにとらわれがちですね」

――「あまい夢」はMVも素敵でした。観る側の主観視点で上田さんのお相手になった気分になれました。洗濯物をたたんでいたり、歯を磨いていたり、日常のいろいろなシーンがありましたが、個人的に好きなシーンはありましたか？

「選べないですね…。自分ではどのシーンを観ても恥ずかしくてむず痒いです。「甘い夢」のMVはすごく少人数で撮っていたため、それゆえにリアリティーが増して…撮影中もずっと恥ずかしくて。ただ、歌った時に私が持っていたものとはまた別のイメージで作っていただいたMVだったので、「あまい夢」という曲の新しい可能性を感じられて、観ていて恥ずかしい以上に、とても嬉しかったりもします」

――レコーディングではどんなイメージを持って歌ったんですか？

「自分の尊敬する人や憧れの人、好きな人などが、男女問わずたくさんいる中、その人たちを見ているだけで幸せで、だけど私はその輪の中には入って行けない…といった感じの曲だったので、絶対に相手と接触しないようなイメージで歌わせていただきました」

――見ているだけでいいというのが、なんとも上田さんらしい。

「そうなんですね(笑)」

――どの曲も情感がたっぷり込められているし、“Empathy”には“共感”の他に“感情移入”という意味もあるので、感情移入して歌ったアルバムという意味でも通じると思いました。ヴォーカル録りで印象に残っている曲はありますか？

「「いつか、また。」はリズムに少し早く乗ったり、声がヨレたりするのもありということだったので、歌うというよりも台詞をしゃべるような感覚でレコーディングに臨みました。一番身体に堪えたのは「aquarium」です」

――体力を使ったということですか？

「体力もそうですし、筋力も(笑)。レコーディングのあと、筋肉痛になりました。海の底から、水圧に抗って、もがいて、ようやく水面まで辿り着いて顔を出す…というようなイメージで歌わせていただいたんですが、本当にエネルギーを必要としました」

――実際に水中にいるわけではないけど、そういう感覚になったということですか？

「そうなるように、頑張りました。前傾姿勢になりつつ、でも水面に行きたいから、踏ん張りながらも上に伸びるような力み方で、レコーディングを続けました。そうやって体勢からもアプローチを掛けていたこともあって、「aquarium」では筋肉痛になったんじゃないかと思っています。逆にスッと静かに脱力するように歌った曲もありました。「旋律の糸」は肩を開いて顎も上がり気味で、“あぁ、もう何でもいいや～”って椅子の背もたれに寄り掛かるみたいな感覚で、ス～っと歌って、ス～っと終わった感じでした」

――そんな中、RIRIKOさんの作詞の「旋律の糸」は歌詞には《殺してく》や《痛いよ》など、印象の強いワードがたくさんあってインパクトがありますね。

「全てを諦めようとするけれど、結局は諦められなかったという曲になっています。最後はコーラスがちょっとずつ近づいて来るのですが、それは現実に気持ちが引き戻されて我に返るといった様子をイメージしています」

――上田さんは「Campanula」でも作詞されていますが、タイトルは花の名前ですね。

「“感謝”という花言葉を持った花はないかと調べてて、出てきたのがカンパニュラで。“ごめんね”じゃなく、“ありがとう”を伝えたいという気持ちを教えていただいた機会があって、それをもとに作っていきました。素朴なお花畑が広がるような、少し身近に感じられる曲になったらいいなと思って頑張りました」

――ラストに収録されている「Walk on your side」は前作で歌詞を共作されていた松井洋平さんが作詞されていて、サビのメロディーは懐かしさを含んだキャッチーさがあって、切なさも感じられるポップな曲ですね。

「本当に素敵な曲です。この曲は他の曲以上に、共感よりも理想に近いニュアンスが込もっています。少し精神年齢が上がって、温かみがある感じにしたいと思って制作を進めつつ、レコーディングでは“私もこういうふうになれたらいいな”という想いで歌わせていただきました」

――“Empathy”というタイトルに掛けた質問になるのですが、人に共感してもらえなかったことって何かありますか？

「昔は家に有機物があることが許せなくて。時間とともに変わっていくものが嫌いで、家に花や観葉植物などを絶対に置かなかったんです。食べ物があることすら嫌だったから、冷蔵庫は空っぽで、食事は外食、喉が渇いたら家の前の自販機で買って、その場で飲み切ってから家に戻るという生活を送っていた時期がありました。その話をすると、誰も共感してくれなくて」

――でしょうね(笑)。

「(笑)。今は猫2匹と一緒に暮らしているんですけど、うちに猫ちゃんがやって来てからは変わりましたね。両開きの大きい冷蔵庫を買って、おうちでご飯を食べるようになったし。何も置かない感じだった家に、猫ちゃんグッズなど物と色がどんどん増え、やっと人間らしい部屋になりました！」

取材：樽林史章

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『Empathy』

Album 3/18 Release
Lantis
LACA-15809
¥3,000(税抜)

★ 1st ライヴが決定！
7/23(木) 東京・なかの ZERO 大ホール

music UP's Q! 今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■使用しない
「ん～…すごく悩んだ結果、使えなさそうです。昔は過去を変えたいと思ったかもしれませんが、今は別にそうでもないので。人よりもいっぱい失敗してきた分、得てきたものもあって、それはそれでなくしたくない気がします。逆に未来を見たいかって言われたら…どうなんでしょう。安心するのか、逆にショックを受けるのか。だったら、知らないままでいいのかなって。ずっと保管しておけるのなら、隠し持ったまま人生を過ごしてみて、万が一“あ～、やり直したい”って思ったら過去に行くとかですかね。だから、今は必要ないかもしれません」

Pop’n’Roll

https://popnroll.tv/

スペシャルグラビア「from ワンルーム」1007号室
土光瑠璃子（FES☆TIVE）

撮影：曽我美芽

BARKS が運営するアイドルメディア『Pop'n'Roll』でのグラビア企画「from ワンルーム」のアザーカット。
“もしも、アイドルが彼女だったら……”をテーマに、アイドルの室内での飾らない姿を撮り下ろし。3月にピッタリなチェリーピンクのランジェリーで魅せる土光瑠璃子の健康的な美ボディをお届け。

DISC GUIDE

東京事変
『ニュース』

EP　4/8 Release
EMI Records
UPCH-29360
￥1,700(税抜)
※初回生産限定仕様出荷終了次第、同価格の通常仕様(UPCH-20547)に切り替わります。

放たれる言葉も曲も刺激的でザワザワする。「選ばれざる国民」で《終日片手はオンライン》と歌い、「うるうるうるう」でも《到頭命題失くす人類よ通信を遮断せよ》と知的な表現で喪失寸前で迷走する世界を切り取り、ロックンロールナンバー「現役プレーヤー」で生命力を加速させる。猫賛歌やウイットに富んだナンバー、劇場版『名探偵コナン 緋色の弾丸』主題歌まで惹き付けられっぱなしの5曲。

(山本弘子)

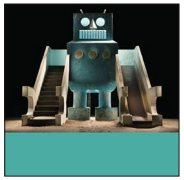
清春
『JAPANESE MENU / DISTORTION 10』

Album　3/25 Release
PONY CANYON
【初回限定盤(DVD付)】
PCCA-04904　￥4,545(税抜)
【通常盤】
PCCA-04905　￥3,000(税抜)
【DISTORTION3×KIYOHARU コラボデザイン・オリジナルバーカー付きCD(通常盤)】
SCCA-00091　￥25,000(税抜)
※ポニーキャニオンショッピングクラブ限定発売

あふれ出すエナジーとロマンティシズムとロックンロール――。昨年、デビュー25周年を迎えた清春の新作はソロやバンドの境界線を消し去るほど強く、儚さと激しさが混ざり合って鮮やかな色を描き出す。生々しく熱量高めのヴォーカルスタイルも、削ぎ落とされた演奏も新たな地に踏み出したことを感じさせる。アニメ『無限の住人-IMMORTAL-』の主題歌「SURVIVE OF VISION」と「下劣」の冒頭2曲で持っていかれる。

(山本弘子)

赤い公園
『THE PARK』



Album　4/15 Release
EPIC Records Japan
【初回生産限定盤(YouTube Live音源付)】
ESCL-5383～4　￥3,273(税抜)
【通常盤】
ESCL-5385　￥2,727(税抜)

18年に石野理子(Vo)を迎えた現体制初となる、ほとんどが未発表の新曲というオリジナルアルバム。独創性の高い曲と歌詞、演奏力の高さはそのままに、アップテンポな曲からバラードまで、真っ直ぐな歌声で華麗に軽快に乗りこなす石野のヴォーカルが新しい色を生んでいる。《行こうぜ　うつくしい圧巻の近未来》と歌うラスト「yumeutsutsu」が逞しい。彼女らの今が見える初回生産限定盤のライヴCDも併せて聴け！

(フジジュン)

妖精帝國
『The age of villains』

Album　3/25 Release
Lantis
LACA-15820
￥3,000(税抜)

４年振りとなる7作目のアルバムは、ヘヴィメタルを基軸にゴシックかつドラマチックな世界観を構築。とはいえ、シンフォニックな「Autoscopy」、ポエトリーリーディングを取り入れた「濫觴永遠」、ミュージカルチックな「Hell in glass」などストーリー性豊かな曲調で聴き手を惹き付ける。また、コンセプト作とは謳ってはないものの、作品トータルの緩急や静穏の流れも楽しめる一枚だ。中毒性はとても高い。

(荒金良介)

Aldious
『Evoke 2010-2020』

Album　3/18 Release
Radiant A ／ VAA
【限定盤(DVD付)】
ALDI-026　￥3,600(税抜)
【通常盤】
ALDI-025　￥2,900(税抜)

新ヴォーカリストにR!Nを迎え、約3年振りに放つニューアルバム。本作は過去の名曲や代表曲をリレコーディングした内容で、新体制のお披露目的な狙いもあるのだろう。R!Nの伸びやかで力強い歌声は既発曲に新たな息吹を注ぎこみ、“ここからまた出発するんだ！”という気概を感じさせる。そして、ラストに収録された新曲「I Wish For You」はストリングスを導入した歌謡風味のバラード。名曲だ。

(荒金良介)

AliA
『eye』

Single　3/11 Release
SLIDE SUNSET
【初回盤(DVD付)】
SSSA-1008A　￥2,000(税抜)
【通常盤】
SSSA-1008B　￥1,000(税抜)

2018年に結成された男女混成6人組ハイブリッドロックバンドの1stシングル。サウンドプロデュースに平出 悟を迎え、持ち味の激情的なヴォーカルとカラフルな音色を織り交ぜた疾走感あふれる表題曲からストリングスを取り入れたバラード「ムツノハナ」まで、タイプの異なる3曲で攻めている。急展開する演奏やヘヴィロック寄りのアプローチ、バイオリンなどでハッとさせてくるアレンジも聴きどころ。

(田山雄士)

結城アイラ
『Leading role』

Mini Album　3/25 Realease
Lantis
LACA-15817
￥2,700(税抜)

ジャズをコンセプトに制作された約7年振りの新作は、管楽器やピアノがフューチャリングされた華やかで大人なテイストのサウンドに混ざり合う結城アイラの歌声が新鮮。ビルがそびえる都市の中、見失いそうになっても光を見付けようとする歌詞から彼女の人生観も垣間見える。ジャズのみならずストリングスが優美なバラードや温かい癒しのナンバー、アプリゲームやアニメに提供した曲のセルフカバーも収録。

(山本弘子)

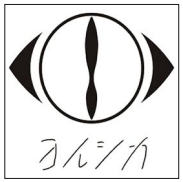
KEYTALK
『Best Selection Album of Victor Years』

Album　3/18 Release
Getting Better Records
【完全生産限定盤A】
VIZL-1737　￥6,800(税抜)
※2CD+Blu-ray+Photobook+GOODS [Towel]
【完全生産限定盤B】
VIZL-1738　￥5,800(税抜)
※2CD+DVD+Photobook+GOODS [Towel]

2013年11月発表のデビュー曲「コースター」から、14thシングル「Cheers!」まで。Getting Better時代のシングル＆アルバムリード曲を中心としたベスト盤。２枚組全20曲収録のCDに加え、貴重な映像も収録されたライヴDVD、Photobookやグッズも付いた贅沢すぎ＆お得すぎ！　４人の作詞作曲楽曲に各々の個性が炸裂している同時発売のカップリングベストや、全部乗せのBOXセットもオススメです!!

(フジジュン)

ヨルシカ
『夜行』



Digital Single　3/4 Release
UNIVERSAL J

少女と少年の思い出の花である“一輪草”は、少女が夜を行った(大人になった)今、少年だけを置いてけぼりにする――。AメロとBメロが静かなのに対し、サビに入った途端にバンドサウンドで大きな盛り上がりを描く展開。コンポーザーのn-bunaによるアコースティカルなギターサウンドとsuisの穏やかな歌声が、未来は見えなくても、ただ前に進もうとする人たちをやさしく包み込む。

(小町碧音)

ナナヲアカリ
『マンガみたいな恋人がほしい』

Mini Album　4/8 Release
Sony Music Associated Records
【初全生産限定盤(「俺、このロングTシャツを着こなせたら合コンしようと思うんだ…」盤)】
AICL-3870～1　￥4,800(税抜)
※「マンガみたいな恋人がほしい」ロングTシャツ付
【初回生産限定盤(我がライブ映像に一片の偽いなし)盤(Blu-ray付)】
AICL-3872～3　￥3,300(税抜)
【通常盤(「冴えない主人公が現実にいたら普通に友達になりたい」盤)】
AICL-3874　￥1,800(税抜)

数式では解き明かせない恋心を歌った「チューリングラブ feat.Sou」を１曲目に選んだ今作は、豪華作家人を迎え、ポップからバラードまでバラエティー豊かな作品に。恋愛ではなく、“変”愛をテーマにしているあたりも個性的なナナヲらしい。中でもパンチが効いてるのは、マンガに出てきそうな少女が《大す…キライ！！》と歌う「逆走少女」。ナナヲだからこそ表現できるトリッキーな歌世界が広がっている。

(小町碧音)

ましのみ
『つらなって ODORIVA』

Mini Album　3/18 Release
PONY CANYON
【初回限定盤(DVD付)】
PCCA-04934　￥3,000(税込)
【通常盤】
PCCA-04935　￥2,000(税込)

ピアノを中心とした生音、エレクトロやチップチューンも取り入れ、オリジナリティーあふれるサウンドで創造された音像の広い今作。そこに詰め込まれているのは人生で誰もが経験するだろう愛に対する感情。しかし、本作はその過程を楽しんでいる時よりも、行き詰ってしまった時にこそ、寄り添ってくれる。例えれば、それは温かいコーヒーでも飲みながら、ふと窓の外を眺めてホッとひと息ついた時の安心感に近い。

(小町碧音)

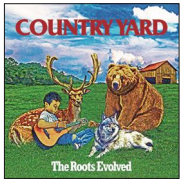
the peggies
『アネモネEP』

EP　4/8 Release
EPIC Records Japan
【初回生産限定盤(DVD付)】
ESCL-5380～1　￥2,273(税抜)
【通常盤】
ESCL-5382　￥1,818(税抜)

“愛に溢れた、エモドラマティックな私たちの共感シグナル”と謳うEPは、音源化を求める声が多かった「アネモネ」他計5曲を収録。島田昌典によるドラマチックなアレンジの中で、切なさと清々しさが絶妙に入り混じる失恋バラードの表題曲を中心にギターロックからアーバンなポップスまで、実は幅広いthe peggiesの魅力をギュッと凝縮。弾き語りで収められたインディーズ時代から人気の「いきてる」も聴き逃せない。

(山口智男)

COUNTRY YARD
『The Roots Evolved』



Album　3/4 Release
PIZZA OF DEATH RECORDS
PZCA-88
￥2,500(税抜)

ベスト盤に続き、ついに届いた新作はCOUNTRY YARDの音楽的豊潤さを知らしめる内容に仕上がった。ハートフルな歌メロを主軸にしたメロディックパンクを掲げながら、US＆UKロックのテイストも取り込んだ曲調は唯一無二。憂いを帯びたメロディーだが、気持ちが明るくなるポジティブな空気を漂わせ、聴き手の隣に寄り添う親密な音色もいい。アコギを用いた「Son Of The Sun」など粒揃いの楽曲ばかり。

(荒金良介)

マカロニえんぴつ
『hope』

Album　4/1 Release
TALTO ／ muffin discs
【初回限定盤(DVD付)】
TLTO-22　￥3,454(税抜)
【通常盤】
TLTO-23　￥2,727(税抜)

2年半振りの作品となる2ndフルアルバムはタイアップソング9曲に新曲を加え、たっぷり全14曲を収録。ブレイク間近！と期待されるタイミングにダメ押しで自ら掲げる“マカロック”の魅力を知ってもらうには、まさに持って来いの一枚。ブラックミュージックの影響も消化しながら、等身大の恋愛観を歌うパワーポップソングの数々は、巧みに織り混ぜた、さまざまな洋楽のオマージュも聴きどころだ。

(山口智男)

なきごと
『sasayaki』

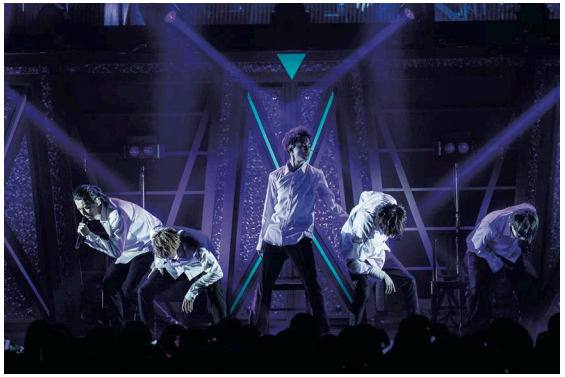
Single　3/25 Release
[NOID] ／ murffin discs
NOID-0034
￥1,000(税抜)

女性ふたり組ロックバンドの2ndシングル。キャッチーでトリッキーなギターリフから胸ときめく「セラミックナイト」は、ふわりと舞い上がるようなヴォーカルとダンサブルなビートの相性も冴えるアップチューン。《2人のランデブー》の終焉を悩ましく綴った「アノデーズ」、《空き缶に煙草を捨てる癖が治らない》と失恋の傷を憂う「癖」を含め、ほろ苦くて奥行きのある情景描写、表現力がどの楽曲も素晴らしい。

(田山雄士)

超特急

『BULLET TRAIN FUN CLUB TOUR 2020「Toooooo 8」』
2020年2月23日@ Zepp Tokyo



超満員の8号車(ファンの呼称)が埋め尽くす中、「Fashion」からクールにスタート。続けて「Booster」「Kiss Me Baby」と会場のテンションをどんどんアップさせ、「SAY NO」では力いっぱいの楽しさを爆発させる。また、最初のMCでリョウガが"このたびは8号車のみなさまを驚かせてしまい、申し訳ない想いでいっぱいです。本日が6人と8号車での最後のライヴとなりますが、メンバーとしてはユースケを笑顔で見送ってあげたいです"とユースケの脱退についてコメント。その後、ユーキが手掛けた新たな試みの演出が実践される。特に「Rush Hour」などをメドレーにし、男女4人のバックダンサーを交え、リョウガが主人公のミニミュージカル的に展開していくコーナーは斬新な面白さがあった。

そして、本編を強烈に盛り上げたあと、アンコールのMCでメンバーは今後の想いを語っていく。カイは"僕は超特急の先頭車両なので、みんなと超特急をドームの先の未来まで引っ張っていきます"、タカシは"超特急とユースケは僕が絶対守ります。自分は末っ子担当でヴォーカルもひとりでやってるけど、もっと胸張っていろんなところに出て行きます"、リョウガは"僕たちと8号車、強い想いがあればどんな道も走っていけると思っています。これからも超特急をよろしくお願いします！"など、それぞれが涙混じりに熱い気持ちを口にした。オーラスに披露されたのはユースケが作詞作曲した「超特急です !!!!!!!!」。会場全体に笑顔の一体感を作り上げ、6人体制ラストとなるステージは大団円を迎えた。

撮影：米山三郎／取材：土屋恵介

■SET LIST■ 1.Fashion 2.Booster 3.Kiss Me Baby 4.SAY NO 5.No.1 6.Pretty Girl 7.Body Rock 8.We Can Do It! 9.Rush Hour 10.Jesus 11.EBiDAY EBiNAI 12.サヨナラは雪のあとで 13.Refrain 14.Synchronism 15.Drawイッパツ！ 16.Don't Stop 恋 17.Burn! ＜ENCORE＞ 1.Love again 2.超特急です !!!!!!!!

内田雄馬

『YUMA UCHIDA 1st LIVE TOUR「OVER THE HORIZON ～& Over ～」』
2020年2月24日@パシフィコ横浜 国立大ホール

疾走感と力強さを兼ね備えたサウンドと伸びやかなヴォーカルで、まるで観客を地平線の向こう側へといざなってくれるような「NEW WORLD」をはじめ、「Speechless」などシングル表題曲のイメージからロックの印象がある内田雄馬。しかし、普段好んで聴いているのはR&Bやダンスミュージックということで、「VIBES」などのダンスチューンでは4人のダンサーとともに息の合ったダンスを披露し、中盤のダンスパートではソロダンスで観客を魅了する場面も。その後のMCで"猛者ども(ダンサー)のあとに踊るのは超緊張した～"と語っていたが、さらなる緊張が彼に襲い掛かる。バラードナンバー「SOS」でのピアノ弾き語りだ。これは自分が何かにチャレンジする姿を見せることで誰かの力になりたいと、昨年のツアーで約束していたもの。内田はグランドピアノの鍵盤をひとつひとつ確認するように丁寧に演奏しながら、ファルセットを活かした、やさしくエモーショナルな歌声を響かせる。観客はそれを心の中でエールを送りながら静かに見守り、演奏を終えて"何度も挫けそうになったけどやって良かった"と安堵する彼を大きな拍手でもって賞賛した。アンコールでは「Shower」でのタオル回しで会場がひとつになった他、ロックナンバーの「Over」ではマイクスタンドを使ったパフォーマンスで会場を沸かせるなど、大きなステージを歌い踊り駆け回り、体力の限界ギリギリまで観客を盛り上げようとする姿が印象的だった。そして、"こういった空間をまた作るために、これからも一緒に歩いて行ってください"との言葉のあと、最後に「ボクらのカタチ」を歌唱。《必ずここでまた会おう》という歌詞とともに観客と再会を誓ったのだった。

撮影：上飯坂一／取材：樽林史章

■ SET LIST ■ 1.NEW WORLD 2.BE MY BABY 3.Before Dawn 4.Stardust 5.Speechless 6.Rainbow 7.VIBES 8.Can you keep a secret? 9.ERROR 10.Looook UP!!! 11.Kiss Hug 12.SOS 13.君に話したいこと 14.Horizon 15.MAJESTIC 16.JOURNEY 17.FROM HERE ＜ENCORE1＞ 1.Shower 2.Over ＜ENCORE2＞ボクらのカタチ

FLOW

『FLOW 超会議 2020 ～アニメ縛りリターンズ～』
2020年2月24日@幕張メッセイベントホール

内田真礼の前説、『コードギアス』の主人公のルルーシュがゼロに扮して行なった開幕宣言と、豪華すぎる幕開けとなったこの日。彼らの登場を待ちわびたファンの大きな歓声が上がる中、「COLORS」でライヴがスタート。「WORLD END」「PENDULUM」と続き、スクリーンに映るアニメ映像も気持ちを煽り、序盤から最高潮の盛り上がりを見せるオーディエンスに"伝説作ろうぜ！"とKEIGO(Vo)が笑う。躍動感ある「Steppin' out」に会場中がタオルを回し、「愛愛愛に撃たれてバイバイバイ」をオタ芸ダンサーが盛り上げ、インスト曲「INVASION」ではゴリゴリの演奏でロックバンドの凄みを見せ付ける。さまざまな演出を施しながら、勢いと疾走感あるアニソンが連発されるライヴは全編が魅せ場で、全編がクライマックス。"アニメ制作陣が命を懸けて作ってるのを見てるから、本気で向き合いぶつかり合っている"とアニソンへの想いを、そして"FLOWはこれからも直接、作品の魅力を届け続けていきたい"とライヴへの想いを語ったKEIGO。アニメとロックに多大な敬意を表し、その壁を壊し続けるFLOWの存在は偉大だ。『NARUTO』オールスターによるナレーションから「Re:member」で始まった終盤戦は、彼らの代表曲でもある「GO!!!」、世界で2,000万回再生された「Sign」で華々しく終演。"FLOWにしかできないライヴをやってる自負があります！"とKEIGOが超満員の観客と世界の生配信視聴者に力強く告げたように、FLOWとアニソンの歴史、ジャンルレスで色鮮やかな楽曲たち、アニメ作品との信頼あってこその豪華演出、そして愛と熱がぶつかり合う熱狂のステージをもって、FLOWは誰も真似できない前人未到のライヴ空間を作り上げた。

撮影：Rie Shibata／取材：フジジュン

■SET LIST■ 1.COLORS 2.WORLD END 3.PENDULUM 4.Steppin'out 5.WORLD OF THE VOICE 6.Hey!!! 7.愛愛愛に撃たれてバイバイバイ 8.CHA-LA HEAD-CHA-LA 9.HERO ～希望の歌～ 10.INVASION 11.CALLING 12.DAYS 13.Realize 14.ブレイブルー 15.BURN 16.風ノ唄 17.INNOSENSE 18.光追いかけて 19.Re:member 20.Break it down 21.SUMMER FREAK 22.虹の空 23.GO!!! 24.Sign

新居昭乃

『新居昭乃 NEW ALBUM RELEASE LIVE「ツバメ」』
2020年2月24日@日本消防会館（ニッショーホール）

昨年12月にミニアルバム『ツバメ』とコンピレーションアルバム『Another Planet』を2枚同時リリースした新居昭乃。そのリリース記念の東京公演が2月24日に日本消防会館にて開催された。昨年大晦日のライヴ『NORTH BAZAR』はバンド編成だったが、今回は打って変わって新居の歌とピアノ、『ツバメ』にも参加したtico moonのふたり、ハープの吉野友加とギターの影山敏彦、後半からはバイオリンで藤堂昌彦も加わり、シンプルな編成ながら、豪華な音を届けてくれた。『ツバメ』の1曲目「花の行方」でライヴはスタートすると、『Another Planet』収録の「月のうまれる夜」「少年の羽」を続けて披露。楽曲の世界に合った映像がステージ後方のビジョンに映し出され、幻想的な雰囲気を作り出していく。もちろん2枚のアルバムの曲以外にも「The Tree of Life」や「バニラ」など、少し懐かしい曲も聴くことができた。また、中盤ではtico moonのふたりが退き、『ツバメ』のために作った楽曲だったが、自分の中でまだ熟してない気がするという理由で収録しなかった「無言の詩」をピアノの弾き語りで初披露。アンコールでは『Another Planet』について"みなさんからのご要望があって、33年の音楽人生でこういうアルバムが作れて良かったなと思っています"という想いを語り、"世界がこうあってほしい。そんな曲を最後に歌います"とファンに感謝の気持ちを伝えて「Stay」を歌唱。サウンドプロデューサー保刈久明による研ぎ澄まされたアレンジによって、楽曲の良さ、歌詞のメッセージはもちろん、楽曲の世界観もより明瞭に伝わってきたライヴだったことは言うまでもない。

取材：田中隆信

■ SET LIST ■ 1.花の行方 2.月のうまれる夜 3.少年の羽 4.The Tree of Life 5.凍る砂 6.バニラ 7.無言の詩 8.眩光 9.VOICES 10.遥かなロンド 11.in my tears 12.Neverland 13.サンクチュアリ･アリス 14.降るプラチナ 15.Soul of AI 16.氷の城 17.羽はツバメ ＜ENCORE＞Stay

MUSIC SUPPORTERS

インディーズシーンを引っ張るアーティストの情報を、インタビューで紹介していきます。
music UP'sのWebでは、インタビューの拡大版や過去の記事がまとめてご覧いただけます。
『MUSIC SUPPORTERS』で、あなたの運命のアーティストを見つけよう！

『MUSIC SUPPORTERS』
https://okmusic.jp/ups/music_supporters

MOSHIMO

Album　3/18 Release
『噛む』
Noisy / KOGA RECORDS
KONS-001
￥2,200(税込)

L→R　岩淵紗貴(Vo&Gu)、一瀬貴之(Gu)

モシモ：2015年4月に福岡で結成。日常生活で抱くさまざまな不安、困難、フラストレーションを全てポジティブに変える熱いライヴパフォーマンスと、かわいくもパワフルな歌声、ポップながら骨太なロックサウンドで若者の心を掴む新進気鋭のギターロックバンド。20年1月のライヴを最後に現体制となり、汐碇貞也(Ba)と高島一航(Dr)をサポートメンバーに迎え、同年3月にアルバム『噛む』をリリースする。
http://band-moshimo.net

なりたい自分に向かって世の中に噛み付いていく

岩淵紗貴(Vo&Gu)、一瀬貴之(Gu)が新体制のMOSHIMOとしてスタートダッシュを切ったアルバム『噛む』。レギュラーのサポートメンバーとして汐碇真也(Ba)、高島一航(Dr)を迎え、タイトルからして強気にも感じる作品が完成したが、そのパワフルさは孤独や葛藤に向き合った証であり、そこにはふたりの生き様が刻まれている。そして、新レーベル"Noisy"の第一弾作品ということで環境の変化もある中、今作で意識したのは"音源とライヴでのイメージをつなげること"。

「今までCDを出したあとにツアーをすると"音源でイメージしてた人と違う""こんな人だったんだ!?　ライヴのほうが好き"って言ってもらえることがあって。それはめっちゃ嬉しいんですけど…ってことはライヴと音源がイコールになってないんだって思ったんです。自分のいいところがライヴなら、その魅力を出せる音源にしたいと思って作ったのが『噛む』ですね。前作の『TODOME』(2019年3月発表のアルバム)も"ライヴバンドであり続けたい"っていう想いで作ったアルバムなんですけど、それからだんだん"私らしさ、MOSHIMOらしさって何だろう？"っていうのを考えて、今の自分の等身大を出したいと思って作りました」(岩淵)

「MOSHIMOのライヴって"最近こんなことがありました"ってお客さんが報告しに来てくれることが多くて。岩淵も自分自身の人生経験とか、恋の話とか、彼氏に振られた話をMCで話していて、その距離感をライヴでは表現できてたけど、曲ではあまりできてなかったなと。「もっと」はそういった空気感も全部込みで、今の自分たちを表せた一曲だと思いますね。いろいろネガティブなことを歌っている部分もあるけど、最後は前向きになっているところとか、"いいことだけばっかりじゃないけど、進んでいかなきゃないけないんだ"っていうのがMOSHIMOのライヴらしさだと思うので」(一瀬)

今作には痛快なロックナンバー「もっと」をはじめ、遊び心あふれる「バンドマン」、バラードナンバー「誓いのキス、タバコの匂い」など、個性豊かな6曲を収録。全体を通してどんな出来事も跳ね返すポジティブなメンタルを感じるのも印象深く、それでいて思わずファンが自分のことを話したくなるようなリアリティーもある。一曲一曲聴いていると、"何事からも目を逸らさない""自分が言いたいことを言う"というスタンスが、彼らが困難に立ち向かう武器になっていることが分かる。特に2019年は岩淵にとってもさまざまな出来事があったそうだ。

「極論ですけど、"生きてればなんとかなる"っていう考えに至った経験があるから、もう吹っ切れてるというか(笑)。いかに楽しく、自分が納得のいく一分一秒を過ごすかっていうのが大事って思っていて。そう思える出来事が去年あったし…やり切ったこともあるけど、結構長く付き合った彼氏に振られたりとか(笑)。メンバーが脱退したこともボディーブローだったし。関わってくれる人が変わったタイミングだったんです。でも、今が一番いいとは思ってます。それは、そういう別れに直面しても目を逸らさないようにしようっていう意識があったからかもしれないですね。逃げたら上手くいかないから、ちゃんと受け入れて今を見ないといけない。"もう無理！"ってなることもあったけど、それを跳ね返せるくらいの周りのサポートもあったなって」(岩淵)

"噛む"というタイトルには"ネガティブなことやマイナスなことを噛み砕いていきたい""なりたい自分に向かって世の中に噛み付いていく""今の自分を噛み締めて進んでいきたい"という想いが込められている。MOSHIMOのエネルギー源には思うようにいかない毎日に対する反骨心があるように感じるが、それは向上心とともに年々増しているようだ。

「"腹立つ！"って思うこともあるけど、それを言うと堂々巡りだし、グッと堪えないといけない場面もたくさんあって、だからこそ反骨心が増してると思います。でも、それだけじゃなくて、"この人みたいな考え方になりたい"って憧れて、"この人と同じ目線で話せる日が来るのかな"って考えたり、そういう刺激をくれる人たちに食らい付いていきたいって考えるとメラメラ燃えてくるんです。だから、マイナスな気持ちからくるものもあれば、自分を引き上げていきたいっていうプラスなものもあって、反骨心みたいなものはどうしても出てきちゃうんですよね」(岩淵)

最後に今作が出来上がってみての気持ちを語ってもらった。

「ライヴをしている時の私を音で表現しつつ、自分自身がぶれていないことは歌詞で表せたと思います。新体制になって新しい刺激をもらったし、自分の中でワンステージ上がったような、スタートダッシュに近い作品になっていて。自己表現が苦手だった理由は、振り返ると意外に小さいことだったりするから、同じ状況の人にも"大丈夫だよ"って言えるアルバムになったんじゃないかな」(岩淵)

「岩淵の経験が盛り込まれているので、これを聴いてライヴに来てくれた人とまた最近のことを話したりするのも楽しみですし。何かに悩んでたり、話したいことがある人とお互いに成長するきっかけになったら嬉しいですね」(一瀬)

取材：千々和香苗

リュックと添い寝ごはん

L→R　宮澤あかり(Dr)、松本ユウ(Vo&Gu)、堂免英敬(Ba)

リュックトソイネゴハン：2017年11月に高校の軽音楽部で結成された3ピースバンド。19年夏、ロッキング・オンが主催するバンド／アーティストのオーディション『RO JACK for ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2019』で優勝し、『ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2019』に出場を果たした。
https://sleepingrices.wixsite.com/home

Mini Album　3/4 Release
『青春日記』
RICE RECORDINGS×Eggs
RICE-1　￥1,500(税抜)
※タワーレコード限定リリース

3人の高校3年間が詰まった青春日記

2019年にインディーズバンド、アーティストの楽曲を配信するサイト『Eggs』で年間再生数1位を獲得し、『ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2019』にも出場を果たした、リュックと添い寝ごはん。2020年3月、高校を卒業した彼らがタワーレコード限定で初の全国流通盤となるミニアルバム『青春日記』をリリースした。高校生活をバンドに捧げてきた彼らにしか作ることができなかったであろう本作を振り返ってもらった。

「"日記"とタイトルに付けた通り、3人の高校3年間の日記になったのかなと。入っている曲も高校2年生の時にできたものばっかりなので、一曲一曲にその当時の思い出がありますね。例えば、「ノーマル」は高校2年生の夏の思い出が浮かびますし、「サニー」はその年の秋の思い出が浮かびます」(松本)

軽音楽部に所属する部員の中でも演奏スキルが高かったメンバーが集まったと話す松本。本作に収録されている楽曲は、それぞれ曲調が異なっている点も特筆すべきところ。作詞作曲は松本が担当しているのだが、どのようにアレンジが進んでいくのかなど、楽曲制作についても話を訊いた。

「先に話し合うことはそんなになくて、スタジオに入ってセッションをしながら固めていく感じです」(松本)

「"ここはこうしたい"とか意見があれば言い合いながら進めていて」(宮澤)

「各パートで先に考えておくというより、スタジオで合わせながら決めていきますね」(堂免)

確かに「サニー」のグルーブ感やドラマチックな展開、「グッバイトレイン」での3人の波長がグッと合っているところなど、セッションの生々しさが滲み出た仕上がりとなっている。そんな彼らがこれから目標としていることは何なのか。

「3人でずっと言ってるのが、日比谷野外大音楽堂でライヴがしたいということですね」(宮澤)

「そうそう！　僕たち、野外が似合うバンドになりたいなと思って」(松本)

自然と身体が動いてしまうような楽曲が揃っているからこそ、野外が似合うバンドに成長していくのではないかと、その気持ちを確信させてくれた。今後のライヴではどんな空間を作り出してくれるのか、大いに期待したい。

取材：岩田知大

錯乱前戦

ハングリー精神剥き出しの1stアルバムが完成！

2017年より本格的に活動をスタートさせ、『未確認フェスティバル2018』『SUMMER SONIC 2019』をはじめとする音楽フェスに出演し、現在までにEPとミニアルバムをリリースしてきた若干21歳の5人組バンド、錯乱前戦。そんな彼らの名刺代わりとなる1stアルバム『おれは錯乱前戦だ!!』が完成した。結成当時、ヤマモトユウキ(Vo)は初期のThe Rolling Stonesのようなバンドをイメージしていたそうだが、今ではガレージロック、ブルース、パンクと、メンバーそれぞれの血肉となっている音楽をベースにしながら、若々しいエネルギーと衝動でもって聴く者の心をガツンと掴んでいる。まずはアルバムが完成してみての手応えを訊いた。

「うるさくて、早くて、生々しくて、踊れるアルバムが作りたいと思ってました。結果、すごく性急でリアルなスピード感を持った一枚になったと思います」(ヤマモトユウキ、以下同じ)

今作は《かっこ悪いたらありゃしないなんて　俺の方を見ていうんじゃねえ　ちくしょーババア覚えてろ》(「ロッキンロール」)と思い切り中指を立てるものもあれば、《情熱や愛のような　気持ちだけがあるところ》(「また旅」)と想いのままに進んでいくバンドの展望を思わすものがあったりと、約3年間の活動で培ったハングリー精神でいっぱいなのも魅力的。再録を含む全11曲を収録しており、「ドンドア」のギターリフで力強く幕を開け、ラストのアップナンバー「モンキー・オ・マンキー」までライヴのような躍動感のある展開が楽しめる。

「曲順はレコードのようにA面B面を意識して組みました。A面で加速してB面で踊るイメージです。レコーディングはヴォーカルも含めた一発録りで、ライヴで演奏するのと同じテンションでやれるようにリラックスして録りました」

今後やってみたいアプローチを尋ねたところ、"ズギャァァァン！　ドカドカ！　ブゥゥゥウン！　ガガガガ！　というようなオノマトペを感じながら鳴らしたい"とのこと。その感覚がどこで発揮されるのかも楽しみにしつつ、猪突猛進に突き進むであろう錯乱前戦に注目を！

取材：千々和香苗

左上から時計回りに、森田祐樹(Gu)、サディスティック天野(Dr)、成田幸駿(Gu)、ヤマモトユウキ(Vo)、佐野雄治(Ba)

サクランゼンセン：高校の軽音部で結成し、2017年より本格的に活動をスタートさせた、若干21歳の5人組バンド。18年に会場限定でリリースしたEP『あッ e.p.』が口コミで評判となり、1stミニアルバム『ランドリー』は限定店舗、ライヴ会場のみの販売だったが、徐々に店舗を拡大して2,000枚を超えるスマッシュヒットとなった。
https://twitter.com/sakuranzensen

Album　3/4 Release
『おれは錯乱前戦だ!!』
たわしレコーズ
UXCL-225
￥2,000(税抜)

Editor's Note of Vol.185

■ コブクロ ■
小渕健太郎が"music UP's Q!"の質問に答える際、"昨日ですね"と言った瞬間、"そんなもったいない使い方するなら、お前はタイムマシンに乗せへん！"とすかさずツッコミを入れた黒田俊介。インタビュー中もふたりの掛け合いが面白く、終始笑いが絶えない取材でした♪

■ lynch. ■
今回のアルバム制作に大きな影響を与えたというアニメや映画の世界観。葉月は制作作業をしながらアニメを観ているそうで、今は『鬼滅の刃』に絶賛はまっているらしい。また、玲央はストイックに体力作りを続けているため、もう5年以上はラーメン屋でラーメンを食べていないそう。取材後の雑談では、そんなメンバーのパーソナルな話をしておりました。

■ 上田麗奈 ■
『music UP's Q!』でタイムマシンがあっても使用しないと答えてくれた上田麗奈。それに対して編集部の石田が"過去に行って、例えば卑弥呼がいるか確かめるとかは？"と尋ねると"あっ、全然興味がないです"と笑顔を返し、ライターの樽林史章さんが"恐竜が見たいとかは？"と訊くと"恐竜か～。殺されちゃうかもしれないので、危ない橋は渡らないです"とサラッと返答。そこから作品インタビューに入っていったのだが、そのキャラの強さが発言からも垣間見られ、取材陣は新しいタイプのアーティストに出会ったと実感したのだった。

■ Plastic Tree ■
取材後、他のメンバーは喫煙所に向かったので、残った有村竜太朗としばし雑談。年齢を感じさせない美麗なアーティスト写真やジャケット写真の話から、頭髪は男性アーティストの深刻な問題という話になり、ケアや体力作りの話題へ。有村は5年前に禁煙したとのことで、煙草をやめたことでライヴが楽になったが、その分、呑む量が増えてしまったとも。どっちが喉に良いのか…となったけど、自分にストレスがないのが一番だと思います。それは頭髪のためにも！

■ 樋口楓 ■
終始、楽しそうにインタビューに答えてくれた樋口楓。編集部としても初めてとなるVTuberアーティストへの取材だったが、いざ始まると普段と変わらない雰囲気で進んでいった。ひとつ大変だったのはSNS用の写真撮影。ずっと笑顔で待ってくれている樋口に対し、構図を考えすぎて待たせてしまう編集部の岩田。そんな岩田にも"全然大丈夫ですよ。ほんまにありがとうございます"とやさしく対応をしてくれた。その言葉に助けられました。ありがとうございます！（by 岩田）

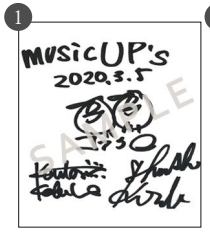
■ 水樹奈々 ■
『music UP's Q!』で穴あき靴下の話をしてくれた水樹奈々。その流れでライターの樽林史章さんが"ちょっと前にブログに穴のあいた靴下の写真をアップしてましたよね"と話を振ると、"見事に穴があいたので大爆笑で(笑)。朝はなんともなかったのにリハーサルが終わったら両足とも親指のところに穴があいていて、どれだけ力が入ってたんだって！(笑)"と話が発展。両足の親指が穴からきれいに出ていたのがツボだったそうで、周りのスタッフと大爆笑し、記念に写真を撮ってブログに上げたとのこと。ちなみに、それが30代最後のブログだったそうです。

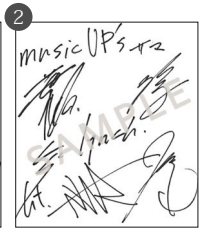
■ OKAMOTO'S ■
music UP's vol.184号を読み込んでいたオカモトショウとハマ・オカモト。取材終わりにショウは"鮎川さんのインタビューめちゃくちゃいいですね！"と感想を伝えてくれ、ハマは"鮎川さんも初めて演奏したのが『Day Tripper』だって初めて知った"と言いつつ、『Pop' n' Roll Special Photo』に登場した生牡蠣いもこ(神使轟く、激情の如く。)を見て、"この人、"なまがきいもこ"って読むんですか!?　ここまでインパクトがある名前は衝撃です！"とかなり驚いていた。もちろん正式な読み方を伝えておきました。そんな感じで隅々まで本誌を楽しんでくれていました！

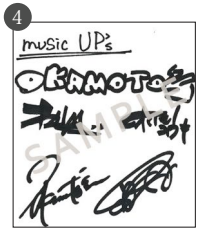
■ MOSHIMO ■
取材中、編集部の千々和が突然少年のパーカーを着ていることに気が付いた一瀬貴之。"ライヴを観たことがありますよ。カッコ良いですよね！"と話を振ってくれたので、ちょうどこの日に見本誌として持って行ったmusic UP's vol.184に彼らのインタビューが載っていることや最近観たライヴの話へと発展。すると、取材後にMOSHIMOのスタッフの方も"私も突然少年好きなんです！"と声を掛けてくれたので着て行って大正解でした。

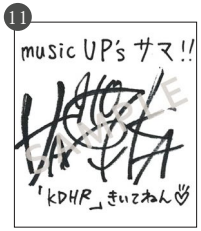
Vol.186は4月20日発行予定。お楽しみに!!

music UP's 読者プレゼントコーナー









直筆サインを各1名様にプレゼント!!

1. コブクロ
2. lynch.
3. 水樹奈々
4. OKAMOTO'S
5. 超特急
6. ONE N' ONLY
7. ウォルピスカーター
8. 樋口楓
9. 吉田山田
10. 寺島拓篤
11. 工藤晴香
12. 上田麗奈
13. The Biscats
14. エルフリーデ
15. ナノ
16. vistlip
17. Plastic Tree
18. ROTTENGRAFFTY

Vol.185の締切は4月19日。当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

Listener's Voice of Vol.184

flumpoolの新曲の2曲について、レコーディングの時のそれぞれの取り組み方や音の表現の仕方とかの話をパートごとに詳しく聞くことができて、とてもためになったし面白かったです。インタビューをしている方の受け応えもとても好感が持てました！
（50代以上・女性・マッチー）

今回music UP's さんにM!LKの記事が載ると知り、とても楽しみにしていましたが、予想を遥かに超えるほどとてもいい記事内容で驚きました！ 一番心に刺さったのは『music UP's Q!』の「"卒業"と聞いて思い浮かぶこと」の佐野勇斗くんの回答です。板垣瑞生くんと宮世琉弥くんのことに触れてくれたのは、ファンとしてとても嬉しかったです。5人→4人→7人とメンバーが変わり、そしてまた2人が卒業し、新体制として5人となりました。でも、それもM!LKの歴史で、いつかは8人でステージに立つって佐野くんが1月31日のライヴで言ってくれたように、最年長の佐野くんがこうして誌面に残るように過去のことを話してくれたのが、本当に嬉しいです。やっぱりM!LKは素晴らしいグループです！
（10代・女性・ともか）

シド目当てでいただいてますが、他のアーティストさんたちもジャンル多彩で取り上げていてすごいなぁと思って見てます。最近は音楽雑誌を購入することがめっきり減ったのですが、紙媒体ってやっぱり必要だなと思いました。
（30代・女性・友霞）

CHiCO with HoneyWorksの記事はCHiCOさんの楽曲に対する想いだったり、制作時のエピソードなどが知れて(高校時代の思い出もw)、CHiCOさんのファンとしては最高でした！　ありがとうございます！
（20代・女性・kaho）

私は足立佳奈ちゃんがデビューした時から大好きで、リリースイベントやライヴには必ず行かせていただいています。今回、music UP's さんで取り上げられていることを知り、真っ先に手に取りました。こんなにも大きく取り上げられていて、嬉しくて涙が出ました。デビューから着々と大きな階段を歩んでいる佳奈ちゃんをこれからも応援していきます。佳奈ちゃんは"岐阜県の宝"です。
（20代・男性・ぱっさー）

ビッケブランカのインタビュー目当てで入手しました。インタビューはもちろん、『Editor's Note』もとても良かったです！　自分でPCを作ってしまうほどメカに強いビッケさんならではですね！　素敵なエピソードありがとうございました！
（40代・女性・ソラ）

卒業間近のさくらしめじさんのインタビューは青春真っ只中！って感じがして素敵だなと思いました！　「しめじ体操」、まだ聴いたことがないのですが、みんなで楽しく踊って歌えるのは楽しそうで、ライブでも盛り上がる曲がまた増えたと思うと嬉しいです！　学生生活と両立しながらの活動は大変だと思いますが、大学生になっても応援したいです。頑張ってください～!!
（30代・女性・もちこ）

CARRY LOOSEさんを取り上げてくださるということでタワーレコードに足を運び読んでみたら、見開きページを使って大きく扱っていただき嬉しくなりました！　また、『Live Report』のページにはBiSHさんも載っており、WACKが好きな自分にはテンションの上がる一冊となりました！　CARRY LOOSEさんのページの『music UP's Q!』の内容もかわいく、友達に勧めたくなる記事でした！
（20代・男性・くどー）

内田雄馬くんのファンで、今回もインタビュー掲載されるとのことで、web で先に読ませていただいておりましたが、『music UP's Q!』が気になってフリペも手に入れさせていただきました。糖質制限を始めてから本当にストイックに苦しみながらやられていたイメージが強く、年末からバナナで糖質を取り始めた話は聞いていたのですが、改めて糖質制限を卒業というワードを見て、糖質制限し続けていたこの2年間の雄馬くんを思い出してしみじみさせてもらいました。
（20代・女性・おやぎん）

STEREO DIVE FOUNDATIONの記事が目当てで今回読みました。大好きなアーティストで、長年待ったアルバムの制作話を読めてとても感激しました。この曲はどう作られたのかと思い返しながら聴くと、何度も聴いてるアルバムがまた違ったアルバムに感じられ幸せです。
（30代・男性・澤田裕樹）

仲村宗悟さんの曲がとても好きなのでインタビューも興味深く読ませていただきました。あと、他のアーティストの方々のライヴレポートも面白かったです。その方々について詳しいわけではないものの、その当日しか味わえない緊張感や臨場感が文章からも感じられるので、楽しく読ませていただきました。ちなみに『Editor's Note』の内田雄馬さんのインタビュー秘話のところで、糖質に関して語る内田さんが思い描かれ、なぜか自分も顔を逸らしました(笑)。
（20代・女性・らむね）

今回の『スターの証明』は松田聖子さんとのことで、私も知っている方だったので興味を持ち目を通したのですが、こんな短文かつ8人程の言葉で松田聖子さんの存在の大きさを感じ、言葉の力はすごいなぁと思いました。
（20代・女性・くまお）

いつもネット記事やフリーペーパーで読んでますが、今回初めてPDFの電子版を読みました。すごくありがたいと思います。フリーペーパーを取りに行けない日も読みたい記事を読めるのが嬉しいです。ありがとうございます～。
（30代・女性・きみ）

行くはずだったライヴがコロナで中止になって残念です。それはアーティストも一緒だし、さらに活動が止まって大変そうなので、払い戻しになったお金でグッズやCDを買いたいと思います。そうやってアーティストにお金を落として、今後の活動資金にしてもらわないと！
（30代・男性・asd）

▸▸読者プレゼントの応募やコメントはTwitter＆読者プレゼント専用フォームから◂◂

★Twitterからの応募

1. music UP's のTwitterアカウント（@music_ups）をフォロー。
2. 希望のアーティストの直筆サインプレゼントについてのツイートをリツイート。

※いただいたコメントは『Listener's Voice』内でご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者にはDMにてご連絡させていただきます。

music UP's Twitterアカウント▶
https://twitter.com/music_ups

★読者プレゼント専用フォームからの応募

music UP's 読者プレゼント記事よりご応募ください。
コメントもお待ちしています♪

※いただいたコメントは『Listener's Voice』内でご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者にはメールにてご連絡させていただきますので、予め『@music-ups.jp』のドメイン解除をお願いいたします。

music UP's 読者プレゼント記事▶
https://musicups.page.link/2003_present

全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳の スターの証明

第 10 回／石川さゆり

歌謡界のスーパースターと称される人物を取り上げ、さまざな資料から、その人物の“すごさ”を浮き彫りにする証言集。今回は、現在、NHK 大河ドラマ『麒麟がくる』で女優としても注目を集める、石川さゆりをフィーチャーする。演歌の枠にとらわれない幅広い分野で輝き続ける秘訣とは ？

イシカワサユリ：1 月 30 日生まれ、熊本県熊本市出身。演歌歌手。女優。1973 年、「かくれんぼ」で歌手デビュー。1977年、「津軽海峡･冬景色」が大ヒット。同年、第 19 回「日本レコード大賞」歌唱賞受賞。2018 年、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2019 年、紫綬褒章受章。

「ソウルシンガー。聴く人の細胞まで躍らせる声。ボーカリストは数多くいても、心震わせる真のシンガーは少ない。そしてさゆりさんは紛れもなく選ばれし者。この度御一緒させていただいて、ギタリスト魂に火がつきました。躍動的なソーラン節を共に歌い奏で、スタジオ内は真夏のカーニバルのように熱く燃えました。共演させて頂けたのはギタリスト冥利につきます。この伝統的且つ新しい日本の歌がたくさんの心に届きますように。いつまでもその歌声で我々に勇気を与えてください。ずっとずっと応援しています」

ギタリスト・布袋寅泰
『音楽ナタリー』
（石川さゆり歌う「ソーラン節」に布袋寅泰参加「ギタリスト冥利につきます」／2019 年 3 月 15 日）より

「僕は演歌が大好きで、カラオケでも『津軽海峡・冬景色』を歌うんですね。石川さんは実は演歌歌手ではなく、すべての歌を歌うことができる歌手。とても尊敬している」

日本画家・千住博
『SWITCH』
（SWITCH インタビュー　達人達 石川さゆり×日本画家 千住博／2014.4.26）より

「さゆりさんはミュージシャンとの和を大事にする方で、録音の時、必ずオケの皆さんと一緒に歌うのですが、それが最終的に良いテイクになることが多いんです」

エンジニア・内沼映二
『内沼映二が語るレコーディング・エンジニア史 スタジオと録音技術の進化 50 年史』
（DU BOOKS／著：内沼映二／2019 年 9 月 13 日発行）より

「私たち二人が“似ている”というのは、斎藤ネコ（※編曲）さんもおっしゃっていましたね。光栄の極みです。さゆりさんは、歌はもとより、破格の高性能アンテナの持ち主。しかもこれ程のキャリアなのに、会えば会うほど好きになってしまうお茶目さ、愛らしさまでお持ちでいらして。気付けば仕事を忘れ、純粋にその鮮やかさを楽しんでいる私がいました」

シンガーソングライター
椎名林檎
『BARKS』
（石川さゆりと椎名林檎は、似ている／2014 年 2 月 28 日）より

「石川さゆりはいま現存の歌手の中でもめずらしいくらいヒット曲に恵まれた歌手です。でも、いい曲というのは実は歌い手に負うところが大きいんです。ヒット曲ほどそうです。この人の芝居のうまさは偶然じゃない。言葉に即して作られる歌の心情や風景を石川さゆりがこれまで正確な描写で表現し歌ってきたことに裏づけされた芝居のうまさなんです」

作詞家・なかにし礼
『石川さゆり オフィシャルウェブサイト』
（「女優、石川さゆり」の魅力。ふたつの証言。／2018 年 1 月 15 日）より

「レコーディングの合間に、おっしゃっていた言葉が印象的だったんです。『やりたいことが年々、増えていく』って」

作詞家・阿木耀子
『サンデー毎日』
（阿木耀子の艶もたけなわ／2019 年 4 月 14 日号）より

「ご本人は、なんでもやりたい方なんですよ。多くの技術を磨いてきたけど、『音楽はいろんな人の力を借りなくちゃいけない』という考えを、ちゃんと持ち合わせている人です。奥田民生の曲も歌ってる。きものを着て歌いあげる以外の石川さゆりを自分でちゃんと作ってきた人です。私といっしょにコンサートをやったときも、私としかできないことをやってくれます。でも、ステージで最後に『飢餓海峡』を石川さんが歌ったときに‥‥。（中略）それ（映画『飢餓海峡』）だって、2時間なんぼあるんです。その世界を、石川さんは1曲を歌うことによって見せる。その力量たるや、すごいんですよ」

ミュージシャン・矢野顕子
『ほぼ日刊イトイ新聞』
（矢野顕子は糸井重里の言葉をどうやって歌にするのか 祝 !! 矢野顕子 40 周年記念／2016 年 5 月 17 日）より

「さゆりさんにわたしの書いた歌を歌っていただけることが、とても嬉しく、何だか不思議な気持ちです。“少女”を歌う時の、普段の艶っぽい大人の女性とは全く違う、本当に少女のような可憐な歌声に驚きました」

シンガーソングライター
谷山浩子
『TOWER RECORDS ONLINE』
（石川さゆりがジョジョ立ち！ 新作「X -Cross-」ジャケは荒木飛呂彦描き下ろし／2012 年 9 月 12 日）より

アルバム『粋～Iki～』
2020 年 2 月 19 日 発売
TECE-3579
￥2,909（税抜）

シングル「しあわせに・なりたいね」
2020 年 3 月 25 日発売
TECA-20022
￥1,227（税抜）

全日本歌謡情報センター
この記事と他の証言を掲載中▶

L→R　Suke(W.Ba)、Misaki(Vo)、Kenji(Gu)、Ikuo(Dr)

何にも媚びず、自分たちがカッコ良いと思うロカビリーを全力でやる

Jロカビリーシーンのポップアイコンとして鮮烈なオーラを放つMisakiが中心となり2019年に結成されたThe Biscats。彼らの処女作『Cat's Style』はロカビリーテイストと近代感を融合させた独自の魅力を湛える一作に。大きな可能性を感じさせる彼らの全員インタビューをお届けしよう。

――本作の制作に入る前は、どんなことを考えていましたか？

Misaki：私たちには昔ながらのロカビリーではなくて、自分たちの色や今の時代の感覚を取り入れたロカビリーをかたちにしたいという想いがあるんです。だから、今回は何にも媚びず、自分たちがカッコ良いと思うロカビリーを全力でやろうと決めていました。

Kenji：ロカビリーは50年代と80年代に流行った音楽で、今の時代にそういうブームを自分たちで巻き起こしたいという想いがあって。そのためには、2020年に相応しいロカビリーを提示する必要があるんですよね。例えば80年代のStray Catsとかのサウンドは上質だけど、最近の音楽の音圧とかに慣れた耳で聴くとペラッペラに感じると思うんです。だから、"コテコテやけど今の音楽"ということを意識していて、それは今回の『Cat's Style』でも大事にしました。エレキベースとウッドベースでは低音の質感とかが違うけど、ウッドベースでもドン！というローが感じられるものにしたりとか。そういう試行錯誤を結構しましたね。

Suke：僕は今の音楽をラジオとかで聴いたりする時、その音像にウッドベースのスラップが合うかどうかを常に考えるんですよ。今回の作品はそれを上手く取り入れることができて満足しています。

Ikuo：ロカビリーはウッドベースが重要ですけど、ドラムとの関係という面で難しい部分があって。現代の音楽ということを踏まえると、バスドラはかなりローが必要で、そうなるとアタックも出す必要があるんです。でも、バスドラのアタックを出しすぎると、ウッドベースの帯域とぶつかってしまう。なので、ベースの邪魔をしない程度にアタック感を作るようにしました。スネアも今の音楽っぽい抜け方にしつつ、ノリとかは絶対にロカビリーっぽさを崩さないということを意識しましたね。

――The Biscatsはサウンド面に限らず、楽曲面でもロカビリーの魅力と時代性を巧みにハイブリッドさせていることが印象的なのですが、それぞれの収録曲で特に印象の強い曲を挙げていただけますか？

Misaki：全部です(笑)。でも、強いて言うと「ハートのエース」ですね。すごくカッコ良い曲だし、歌詞を自分で書いたんですけど、カフェレーサーをモチーフにした歌詞になっていて一番好きです。カフェレーサーというのはイギリスに『Ace Café』という24時間営業のお店があって、そこのジュークボックスにコインを入れて、1曲が終わるまでの間、バイクで走って勝負するんですよ。だから、「ハートのエース」のMVも私がジュークボックスにコインを入れるシーンから始まって、そこから妄想の世界が始まり、自分がカフェレーサーになって…という流れになっているんです。あと、この曲はトライアンフの"Thruxton RS"というバイクのデビューフェア・キャンペーン・ソングで使っていただいていて、私も自分のトライアンフのバイクでカスタムをお願いしていますし、昨年は『Ace Café』にもバンドのメンバーみんなで行って、その場の空気も感じてきたんです。そういうことも含めて「ハートのエース」は一番気に入っています。

Kenji：僕が特に好きなのは「ハートのエース」と1曲目に入っている「lingering scent」です。「lingering scent」はベースから始まる…そこはSukeが話したかったと思いますけど(笑)、ベースから始まって、ロカビリーならではのギターリフがバーン！と来るという。Brian Setzerがやってもおかしくないような曲で、それをさらに現代に近付けることができて、すごく手応えを感じています。どの曲のレコーディングも楽しかったけど、自分はギターなので、こういうインパクトが強くて、耳に残るフレーズを弾くと"キターー！"という感覚になるんですよ。"このフレーズ、そうそう！"みたいな(笑)。この曲のレコーディングは本当に楽しかったです。

Suke：僕も一番気に入っているのは「lingering scent」ですね。今回の7曲の中で一番ベースが前に出ている楽曲なので。それに、今回のアルバムのベースは全部マイク1本で録ったんですよ。

――マイクだけで、これだけきれいにスラップ音が鳴っているのはさすがです。ドラムとスラップが混ざり合って心地良いリズムを生んでいますし。

Suke：そこは一番大事なところなので気を遣いました。

Ikuo：ロカビリーを知らない人が聴くとベースのスラップのカチカチっていう音はドラムが出していると思うんですよね。でも、そうじゃなくて、ベースのスラップとドラムのビートが重なり合うことでロカビリー特有のリズムになるんですね。それはロカビリーでしか味わえない気持ち良さなので、Sukeも言ったように、ぜひ味わってほしいです。僕は1曲だけ挙げるとしたら「take away」です。この曲のドラムのフレーズは1曲通してずっと一緒なんですね。いわゆるトレインビートを叩くだけなんですけど、ロカビリー特有のハネを出す必要があるし、この曲みたいに速いテンポでそれを出すのは難しいんですよ。だから、レコーディングは手こずると思ったけど、しっかり練習して録ってみたら、今っぽいキャッチーさがありつつちゃんとリズムはロカビリーになっていて、すっげえいい曲になったと思います(笑)。

――「take away」もThe Biscatsの個性を味わえます。それに、この曲は明るい曲調とキュートな歌詞が相まって、アルバムのいいアクセントになっていますね。

Misaki：アルバムの中にドライブソングを1曲は入れたいと思っていたんです。ロカビリーはアメ車とかで流すようなシチュエーションに合うから。それに、この曲の歌詞はデートを楽しみにしている女の子のピュアな心を描いていますけど、実はライヴに来てくれるファンの人たちのことも思いながら書きました。私、いつもライヴの前はこの曲の歌詞みたいな感じなんですよ。ライヴをイメージしていろんなことを考えてワクワクして、ライヴ当日の朝にカーテンを開けて、やっと今日みんなに会えると思う。それをみんなに伝えたくて、そういう想いを入れながらドライブデートの曲というところに持っていきました。

――そんな本作を聴いてThe Biscatsはロカビリーの枠を超えて多くのリスナーの支持を得るバンドになる可能性を感じました。

Misaki：頑張ります！　どんどん新しいことをプラスしていきたいですね。ロカビリーの絶対に押さえないといけないポイントは押さえた上で、どんどん幅を広げていきたい。そうやってロカビリーが好きな人たちに認めてもらいつつ、ロカビリーに馴染みがない人にもカッコ良いと思ってもらえるバンドになることを目指します。今後の活動としては5月から6月にかけて全国8カ所でのアルバムツアーがあります。The Biscatsになってから初めてのツアーなので、ハイブリッドなロカビリーの世界観を見せつけたいですね。あと、私たちはファッションにもすごくこだわっているので、そこにも注目してもらえると嬉しいです。

Kenji：僕らもそうですけど、ロカビリーバンドは"Cats"という言葉を使うことが多いじゃないですか。それはジャズが好きな人を"Hepcats"と呼んだことから来ていて、ロカビリーを象徴する言葉になったんです。自分たちの中には"もう1度ロカビリーをリバイバルさせたい"という強い気持ちがあるし、"これがロカビリーなんだぞ！"というのを世に知らしめたくて"The Biscats"というバンド名にしたし、デビュー作も"Cat's Style"というタイトルにしたんです。だから、今後はそれを実行していくのみという気持ちですね。ロカビリーの魅力をより多くの人に知ってもらえるように、突き進んで行こうと思っています。

取材：村上孝之

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『Cat's Style』

Mini Album　3/25 Release
ROCK'A BEAT TOKYO
TMER-20001
¥2,200(税込)

music UP's Q!

今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■ Misaki…子供の頃に戻って音楽をもっと学びたい
「極端に言えば、学校にも行かず、音楽だけに取り組めば良かったと思っているので、過去の自分を変えたいですね。だから、もしも過去に戻れるなら3歳くらいからやり直したいです。でも、タイムマシンってそんな使い方はできないのかな？(笑)」

■ Kenji…50年代を体験したい
「大好きな50年代の音楽を体感するために、その時代へ戻りたいですね。Elvis Presleyのライヴに行ってみたいし、『日劇ウエスタンカーニバル』も観てみたい。そう考えるだけでもワクワクしてしまいます！」

■ Suke…80年代に行ってみたい
「80年代に戻ってStray Catsのライヴを観てみたいと思います。81年のスイスで行なわれたライヴとか、いろんなバンドを観たいし、当時の音楽シーンを肌で感じたい。特にアメリカ、イギリスの音楽に触れたいですね」

■ Ikuo…59年の飛行機事故を防ぎたい
「59年に起こった飛行機の墜落事故を防ぎたいです。その飛行機にはBuddy Holly、Ritchie Valens、J. P. "The Big Bopper" Richardsonという3人の偉大なロックンローラーが乗ってて、"音楽が死んだ日"とも言われているくらい衝撃的で…。"離陸しちゃダメだ！"と乗務員の人に伝えるとか、どんな方法でもいいので未然に防ぎたいと思います」

L → R　星野李奈（Ba）、山吹りょう（Gu）、みくる（Vo）、ゆーやん（Dr）

エルフリーデ

さらに成長するために１度壊して、新しいものを作り上げていく

ガーリーでキュートなルックスと、一線級の演奏テクニックを併せ持つエルフリーデがミニアルバム『rebirth』を発表した。メジャーデビューからまだ１年足らずの時期であるから、“再生”とは些か早計なのではと思うものの、そこには一層のステップアップを狙う彼女たちの並々ならぬ意気込みがあった。

――本作の収録曲について順にうかがっていきたいと思います。まず「Break Heart」から。これは『rebirth』収録曲の中で最初にできた楽曲なんですよね。

李奈：一番最初にメンバーに共有された曲ですね。MV も撮ってますし、レコーディングも早い段階でやっちゃってました。この曲だけはすでにライヴでやってます。

――ファーストインプレッションはいかがでしたか？

李奈：ギターにディレイが掛かっていて、こういうきれいな曲ってエルフリーデの曲で言えば、「Hello Goodbye」（2018 年 6 月発表のミニアルバム『-LOVE &-』収録曲）があるんですけど、それよりも激しくてエモかったりするので、“あぁ、こういう新しい曲を書いてくれたんだ”って新鮮に思った記憶があります。歌は聴きやすいんだけど、テクニックの一個一個が細かく考えられていて、すごくいい曲だなと。

みくる：私、初めて聴いた時に“超好き！”って思ったんですよ。イントロ部分はすごくきれいだし、“早く歌いたい！”ってずっと思ってて。歌詞をもらってわりとすぐに歌えるようになったというか、すんなり入ってきたというか、スッと自分の中に落とし込むことができたので…すごく歌った気がします（笑）。“好きだな”と思って、入り込みやすかった記憶がありますね。

――次に「栄光へのエール」。個人的には２番の A メロに重なるギターリフがとても好きでして。あそこ、超カッコ良いです。

りょう：あそこはデモの段階から入ってました。結構忙しいんですよね、この曲（笑）。ギターソロはプロデューサーの小田内志徳さんと一緒に考えることになったので、“ギターソロ、どうしよう？”って悩みました。

――速弾きですよね？

りょう：最初に考えたものはここまで速くなかったんですけど、かなり速くなりました（笑）。

李奈：この曲、エルフリーデ初のタイアップ曲なんです。『ボートレース多摩川・静波まつり』のタイアップで、それを意識して小田内さんが書き下ろしたので、歌詞に《ハンドル》とか《水しぶき》とか若干マニアックなワードが出てくるんです（笑）。

――続いて「ハルユメ」。これは卒業ソングというとらえ方でもいいですかね。

李奈：そうですね。ツインヴォーカルになっていて、リョウが歌う割合がすごく多いんですね。ふたりの女の子たちが掛け合って歌っているところは、より青春感が強いなと思ってます。エルフリーデにとってはいつもとはまったく違う感じの曲だったので、みんなデモを聴いた時に“大丈夫かな”って思ったんじゃないかな。作詞作曲も小田内さんではなく、赤山コウさんだし…編曲には小田内さんも関わっているんですけど。仮歌もこれまでとは全然違った方が歌っていたりして、“これをエルフリーデに落とし込んだらどうなるのかな”って想像しながらやりましたね。

――「Beyond the rainbow」はメロディーがいいですね。切なくもあり、力強くもあり。

みくる：初めて作詞をさせてもらった曲なので、今回の中では一番聴いてます（笑）。それほど目立つ曲ではない印象があるものの、自分の中ではこの曲がないと成立しないというか。

――私が申し上げるのも恐縮ですが、これは大事な曲ですよ。

みくる：…だと思っちゃってます、私も。

――《君の歌　大切に奏でよう》《君の歌大切に届けよう》と歌っていますから、これはヴォーカリストとしての宣誓であり、所信表明であって、これからライヴを重ねるにつれてさらに大事になっていくのではないかと思います。

みくる：今の自分の想いを言葉にしてみようと思って素直な気持ちで書きました。個人的にすごく思い入れがある曲になったので、歌詞を見て聴いてほしいと思います。

――サウンドは派手じゃなく、引き算の美学という感じですよね。

李奈：この曲はライヴでやると映えると思います。みくるちゃんが歌詞を書いて、みくるちゃん自身が歌う時点で、ファンの人たちにとっては染みるじゃないですか。だから、その想いを全員でしっかりと届けようと思ったし、ミドルテンポで一音一音に気持ちを込めやすいので、“早くライヴでやってみたいなぁ”とか、そんなことを想像しながら録りましたね。

りょう：私は“切ない曲だなぁ”と思ってます。ピアノとストリングスが優先されているところもあるので、ギターはあまり主張しすぎないようにしました。

ゆーやん：ドラムは…やっぱりみくるが初めて書いた歌詞なので、いつも以上にじっくりと読んだし、“あっ、分かる”っていうところが多くて。《気づけば繰り返して　また消して思い出して　立ち止まり　言い訳ばかりで進めなくて》のところは“言い訳…分かる”とか、《曖昧な景色に甘えていた》とかも“甘えちゃいけないけど、だけど甘えちゃうこともあるよねぇ”とか。みくるの気持ちを考えながらドラムを叩いてました。みくるが初めて書いた歌詞だし、歌を大事に…という。

――「未来 is future」もまたいいメロディーを持ったナンバーですね。

みくる：ラップもあるので、“これは歌えるのかな”って。ラップのやり方もあんまり分からないままだったから、これがラップなのかも分からないんですけど、それっぽくやりました。

李奈：作詞作曲の平野俊輔さんはいつもレコーディングの時に立ち会ってくれて、いろいろ面白い案を出してくれるんです。突発的に“君はこういうのが得意そうだから入れちゃおうよ”みたいな。遊び心もある人なので、完成した曲を聴くと命が宿っている感じがしますね。

――さて、ラストの「Silence」。これも切なく、それでいて力強いメロディーを持ったナンバーですが、みなさんはどんな印象でしょうか？

李奈：これはリズム隊の話なんですけど、私とゆーやんは“うわっ、大変だ！”って思いました。毎小節、細くリズムが変わっていくんですよ。ドラムのバスドラの位置だったり。曲自体はすごくカッコ良いんですけど、細かいことをふんだんに取り入れてる曲なので、“緊張感を持って頑張んなきゃな”って思いましたね。

ゆーやん：意外と細かいんです。頑張りました（笑）。

――では、ヴォーカルは？

みくる：カッコ良くて、大好きなんですけど、とても苦戦しました。テンポが速くて言葉も詰まってるし、結構時間が掛かりました。自分としては“こう歌いたい”というのが出てきたりして、何度も“もう１回、お願いします”って録り直した記憶があります。

――それでは最後に本作『rebirth』について、みくるさんにまとめていただきたいと思います。歌詞に《myselif》が多く出てくるのが象徴していますが、本作は“いかに自分らしくあるか”ということがテーマにあるのかなと。

みくる：私もそう思います。全体を通して今の私たちを描いてる印象があります。つらいこともあるし、人間なんで落ちることもあると思うんですけど、やっぱり前に進まなきゃいけないというか。私たちも７月 17 日に LIQUID ROOM でのライヴも決まったので、それに向けて気持ちを切り替えるというか、もう前に進むしかない！

取材：帆苅智之

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『rebirth』

Mini Album　3/18 Release
KING RECORDS
KIZC-596 ～ 7
¥2,200（税抜）
※ DVD 付

『「rebirth」Release Tour 2020 FINAL『- Evolution -』』
7/17（金）　東京・恵比寿 LIQUID ROOM

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■みくる…過去に戻ってバンドを早く始める
「バンド活動や人前に出ることをもっと早くしておけば良かったと思うので、過去に戻りたいですね。歌もそうですけど、楽器も早くに始めていればなって。今が楽しいからこそ、そんなふうに考えています」

■山吹りょう…過去の自分を助けたい
「過去に戻って、悩んだりつまずいたりしていた自分を助けてあげたいですね。あとは、もうすぐ１歳になる愛犬が生まれた瞬間を見てみたいです。生後４カ月の時にうちに来たので、その前を見たいです」

■星野李奈…万葉集の謎を解く
「大学の４年間、私は万葉集の研究をしていたんですけど、古文書や資料が少ないから全然分らなくて。だから、過去に行って事実を知りたいです。4 年間、毎日 15 時間くらい研究してたのに、分からないことだらけで…モヤモヤしているんですよ（笑）」

■ゆーやん…生まれた時代に戻りたい
「生まれた時代のことってテレビとかでしか知ることができないので、その時に戻って体験したいですね。当時の自分の家を見たり、その頃に流行っていた遊びをしてみたり。“こんなお菓子あったな～”とか思いながら街を歩きたいです（笑）」

新たなスタートラインとなるベスト盤

2012年のデビューから発表された全シングル＋αを収めたベストアルバム『I』をリリースしたナノ。既発アルバムのリード曲、新曲、カバーと収録曲全てに意味があり、挑戦がある全21曲2枚組について、“これは新たな始まりの合図”と語ってくれた。

── 初のベストアルバムは8年前のデビュー曲「Now or Never」からリリース順に全シングル13曲が並んでいますが、聴いてみたご自身の感想は？

「これまで別々で聴いてきたものを改めて並べてみると、まったく違うものに聴こえるなって感じました。1曲ずつだとその時々のレコーディング風景だったり、MV撮影の情景だったり、具体的なことばっかり浮かんできちゃうのが、全部並べると、ただただ感情だけが出てくるんですよね。おかげでひとつの音楽作品として、自分の作品を初めて客観的にリスナーの立場で聴くことができた気がします。その結果、実感したのが…やっぱりナノって染まりたくない人間なんだなと。いろんな七変化をしてきて、良い意味でぶっ飛んだことをいっぱいしてきてる(笑)」

── 一貫して攻撃的なサウンドの中で、心に沸き出る何かを放っているような印象はありますよね。

「そもそも自分が音楽をやり始めた理由が、歌や音楽が好きだとかよりも、リスナーに何か力を与えたいとか、みんなのパワーになれる音楽を作りたいってことだったんですよ。自分の感じたこと、学んだこと、気付いたことを、少しでもみんなの栄養源にしてもらいたいと考えていたので、染まらずにいられるんだと思うんです。伝えたいメッセージがあるからこそ何かにすがったり頼ったりする必要もないし、逆に何かに染まってしまうと自分のやりたいことやメッセージが薄れてしまう可能性がある。今回リスナー側に立って聴いてみたら、それが多少なりとも曲に表れているように感じられて、ちょっと自信が持てました」

── そういった意味で特に印象深い曲を選ぶなら？

「やっぱり「Now or Never」ですね。冒頭に“ナノと言ったらこれ！”って言えるくらいの定番曲がいきなり来るので、聴いてくださるファンはテンションが上がるだろうし、みんなにとって重要な曲は自分にとっても大切なんです。ナノ個人としては他にも特別な曲はあるんですけど、自分の曲は人と共有してこそ意味を持つので」

── そもそもデビュー曲なんですから思い入れは深いはずですよね。

「もう当時は“ようやく好きなことがやれる！”っていう嬉しさで、がむしゃらに作ってました。もちろん実力的には自分の理想に辿り着けなくて、最初の数年は悔しい想いもめちゃくちゃしましたし、今でも聴き返すと“あぁ、幼いな”って恥ずかしくなる部分もあるんですよ。でも、曲を重ねるごとに着実に自分のイメージに近付けるようになっていったし、その成長の過程もミュージシャン／アーティストとしてはひとつの表現であり、作品だと思うんです。だから、初期の作品が失敗作とはまったく考えていないし、むしろ悔しい想いが滲み出てる曲だからこそ、リスナーが心打たれるってこともあるじゃないですか。実際、ベストのリリースにあたって改めて初期曲のMVをSNSにアップしたりすると、ファンの方が“やっぱりこれが好き！”とかって、8年経っても言ってくれたりするんです。上手い下手以前に、曲が与えるパワーだったり感情のほうをリスナーって大事にしてるんですよね。なので、今回のアルバムでも過去曲を聴いて“あれがあったから今のナノがあるんだ”って感じてもらえたら嬉しいです」

── シングルを集めたDisc 1だけではなく、アルバムのリード曲や新曲、カバーを収録したDisc 2との2枚組になっていますが、なぜこういった構成にしようと？

「アルバムのリード曲ってナノにとって欠かせない曲なんです。制作する時に一番力を入れて作る曲だし、ライヴでも絶対にやっている大切な曲なので、この曲たちが入らないとベストとして成立しないんですね。実際、ファンの方々もYouTubeとかでたくさん視聴してくださってますし」

── このタイミングでのベスト盤リリースも、きっと自然に導かれた結果なんでしょうね。

「本当に自然な流れでベストの話が出て、しっくりきたという感じです。ナノ自身、もっと自分のハードルを上げていきたい、自分の世界を変えてみたいっていう想いが、ここ1年くらいで芽生えていたんですよ。そこで気持ちを切り替えるきっかけとして、何か目に見えるものを提示したほうがファンの人たちとも足並みを揃えられるんじゃないかと思ったんです。だから、このベストは8年間のフィニッシュラインではなく、ナノ、ファン、そしてこれから新しく出会う人たちとのスタートラインなんですよね。2ndシングルの「No pain, No game」にある《今　終焉(はじまり)のEYES》という歌詞の通り、“ここからまたみんなで走り出そう！”っていう始まりの合図なんです」

── これまでの集大成というよりは、ここで仕切り直していこうというひとつのマイルストーンだと。

「ほんとにその通りですね。ナノの活動上、一番大きなマイルストーンがこのベストになるんじゃないかな。だから、初めてのオリジナル曲である「magenta」を再録したんです。ナノの本当のスタートはこの曲だから、これなしではナノだけでなく、きっと今まで応援してくれたファンの方たちも納得しない。でも、原曲を入れるのもちょっと違うと思ったんですよ。一番大事な曲だからこそ今のナノとして新しくみんなに表現してみたい…今のナノが歌ったらどんな「magenta」が生まれるのかチャレンジしたくて、それでアレンジし直したんです。ただ、原曲と同じような路線でやっても意味がないし、みんなが好きでいてくれてる要素はキープしつつ度肝を抜くようなアレンジを目指さなきゃいけないってすっごく悩みましたね。めちゃくちゃハードルが高い一曲になりました」

── 結果、原曲とは何が一番変わって、何が変わりませんでした？

「新しい「magenta」は彩り豊かなんですよ。当時はタイトルの通り、マゼンタ1色にモノクロしか入ってない感じだったのが、“タイトルを変えなきゃいけないかも!?”ってくらい色が豊富で。ミュージシャンもそれぞれ自分の個性をガンガンにアピールしてくれているから、決まりや束縛から解き放たれた「magenta」になってます。逆に変わってないのは、やっぱり“ナノ”であることですね。デビュー時の「magenta」に込めていた“ゴールは分からないけど、とんでもないところまでみんなと行ってやる！”っていう、その懐かしい気持ちがスタジオで歌っていて戻ってきたんですよ。なので、歌い方だったりは多少変わっていても、音ではない信念の部分…曲のソウルは変わってないんじゃないかと思います」

── ナノであることは変わらないと。それでアルバムのタイトルも“I”？

「いろんなミュージシャンだったり作曲家さんが関わってくださっているとはいえ、やっぱり全てが“ナノ”というフィルターを通しての楽曲ですからね。これまで自分が背負ってきた曲たちだし、これからもこの曲たちを背負っていくという、その責任感を感じた上で“I”しかないと。あとは、今まで応援してくれた人たち、このアルバムを手に取ってくれる人たちへの“愛”という意味も、もちろん込めました。ディレクターさんに“クサいかもしれないのは承知で、“I”って付けさせてください！”って言ったら半笑いされましたけど、押し通して良かったですね。“ナノ’s BEST”とかだと、ちょっと距離を感じてしまうから」

── では、Disc 2に収録されているカバー曲も、あくまでも“ナノ”のフィルターを通したもの？

「はい。カバーを入れるか最初は悩んだんですけど、ネットに上げたカバー曲をきっかけにディレクターさんと出会い、デビューに至った経緯があるので、そこへの最大のリスペクトを示すためにもカバーを入れる決断をしました。デビュー前から応援してくれてるファンの人たちが望んでいたこともあるし、「ECHO」は海外のファンからのリクエストで選びました。原曲が英詞なのもあって、以前から“ナノバージョンで聴いてみたい”という声をいただいていたんです。もう1曲の「ロキ」はカラオケの邦楽ランキングでも上位に入っている曲で、こちらは自分で英訳しました。両方ともわりと最近の曲でボーカロイドが原曲なんですけど、せっかくの機会だから新しいことをしたかったんですよね」

── なるほど。アコースティックギターでのアレンジは爽快感があって新鮮でした。

「自分は洋楽育ちなので、アコギでのアレンジって大好きなんですよ！　日本人はわりとピアノが多いですけど、洋楽アーティストってセルフカバーとかもアコギでやることが多いんですね。原曲へのリスペクトを表すためにも、カバー曲は楽しまなきゃ意味がないと思ったし、ほんとに楽しかったです。まるで自分の大切なオリジナル曲のように歌えたから自信を持って発表できるし、この8年間でそういうメンタル面も変わったのかもしれない。特に「ロキ」はスタッフみんな“大好き”って言ってくれてますね」

取材：清水素子

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『I』

Album　3/18 Release
FlyingDog
VTCL-60519～20
¥3,500(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■過去に戻って自分の姿を客観的に見たい
「子供の頃に戻って、自分の姿を客観的に見たいと思います。過去を変えるとかではなく、見るだけでいいんです。今の自分にとって学べることが多いはずだから。あとは、絶対に観ることができない自分のライヴですね。特にファーストライヴを観てみたいです。緊張とかもあって、何も覚えてないんですよ…。でも、もしかしたら恥ずかしくて観ていられないかもしれませんね(笑)」

L→R　海(Gu)、瑠伊(Ba)、智(Vo)、Tohya(Dr)、Yuh(Gu)

みんなの愛してくれた個性を“2020 ver.”として聴かせたかった

“かつての vistlip らしさを今の自分たちが表現したら”――そんな発想をもとに生まれたミニアルバム『No.9』は、当時の彼らを彷彿させながらも現在、そしてこれからの自身を示す作品に仕上がった。そんな今作について智(Vo)、Yuh (Gu)、瑠伊(Ba)に語ってもらった。

――これ、気を悪くしないでほしいのですが、今作に収録されている各曲って、昔の vistlip の楽曲みたいというか、どこか聴き覚えがある曲ばかりだったんです。なので、“あれ？　セルフカバーだったかな”と過去曲を聴き直してみたものの、特にそれらとの該当曲もなくて…。

Yuh：それ、良い意味で大正解です！　もう我々の罠にものの見事にはまってくれてる(笑)。

瑠伊：完全に僕たちの術中です(笑)。

Yuh：もともとは Tohya と智と俺が飯を食いに行って雑談していた時、Tohya が有線放送で流れていた曲を聴いて“、俺、このバンド好きだったな”みたいな話を始めたんですね。その流れから、“じゃあ、次のミニアルバムはメンバー各々が思う、昔の自分たちが作っていたっぽい曲を作ってみよう！”との話になったんです。しかも、それをそのまま出すんじゃなく、今の自分たちが当時のような曲をやるならとの体で。

智：今だからこそ完成させられることもありますからね。

――確かに、当時そのままではなく現在の vistlip として体現している感は非常にあります。

Yuh：シンセとかもふんだんに入っている曲もありますからね。あとは、総合的なバランスやバラエティーさは、まだ客観視できていないんですが、各々が各々らしさを出せた作品になったかなって。これまではあえて以前と違ったものを出そうと思いながら新作の制作に挑んできましたが、今回は“驚かす”はあっても、新しい要素をひねり出す必要はなかったですから。好きにやったら自然と今風に仕上がったというのが正直なところです。

瑠伊：“各々の個性が活きる楽曲を持ち寄ろう”的な話はしたよね。自分としては最近はシンプルにしがちだったんですが、今回は昔の気持ちを思い出すということで…昔は“より複雑にしたい”というキッズ心があったから、そういうフレーズを交えつつ、上手く今の自分も入れ込めたかな。

智：制作に関しては今回はコミュニケーションも多かったから、みんなの力でより現在のバンドスタイルに持って行きやすかったかもしれません。

――今作の特徴のひとつとして各人からの作曲提供が 1 曲ずつ以上収まっていて、結果それがバランスやバラエティーさにつながっている印象がありました。vistlip は智さん以外が楽曲を持ち寄り、その中から収録曲を選んでいくスタイルでしたが、今回はメンバー各位全員の曲が 1 枚に収まっていますよね。

智：こういうコンセプトとなると、もちろん全員分が欲しくなるし、聴きたくなるんで。その分、プレッシャーもそれぞれあったかもしれませんが、メンバーが自分を見つめ直す時間にもなったと思うんで有意義でしたね。みんながどの時代の特徴を切り取ってくるのかも重要でした。

――メロディーもクレジットを見ずとも“これは○○の曲だろうな”と予想できるほど各人王道ですね。

Yuh：各々が各々として求められているものをあえて出した感じかな。言われなくても染み付いているところもあっただろうし。特に Tohya の曲はむちゃくちゃ Tohya っぽい(笑)。

――これまで常に前進してきた印象があるので、今回のルックバックは意外でした。その辺りに葛藤などは？

瑠伊：葛藤や不安はなかったけど、僕の場合は苦労しました。ずっと前を向いて進んできて、自然と今のスタイルや音楽性に至ったこともあり、かつての自分のスタイルが思い出せなくて。逆に考え込みすぎて煮詰まりましたね。

――智さんはいかがでしたか？

智：バンドは前進していくものですからね。単純な飽きだったり、時代に合わせた商法だったり、さまざまですが。ただ、ファンは常にバンドの過去も抱き締めて愛してますから。もちろん僕らもそうあるべきだし。なので、みんなの愛してくれた個性を“2020 ver.”として聴かせたかった。というか、僕が聴きたかったです。

――今回、そのようなテーマにトライされて Yuh さん的には？

Yuh：何もないところから作るよりかは、最初にテーマが決まっていたので作りやすかったです。自分で言うと「四季彩」なんて、“あの頃のあの曲のような和な感じの曲を作ろう”と出口が明確にあっての進行だったりもしたので。逆に「DANCE IN THE DARK」は先に「四季彩」でノルマは達成していたから(笑)、こちらは縛りなく、今の自分が好きな感じの曲にしました。

――「四季彩」なんてヴォーカルが矢継ぎ早なので、ブレスのタイミングとか大変そうです(笑)。あと、「Atelier」も。

智：おっしゃる通り、レコーディングしながらブレスの位置を再度決めました。歌詞も都度変更して。本当はこれよりも詰まってたんですよ(笑)。そんなやり取りも実にアナログで、今回のテーマに合ってましたけどね。

――「ミミックの残骸」も美しいメロディーで、いかにも瑠伊さんが作った感のある曲でした。

瑠伊：自分としても進化が自覚できる作業ではありました。当時はコード進行が複雑であればあるほどいい曲との変な概念があったので、それを思い出して書いた曲だったんです。いわゆるコード進行から作って、そこにメロディーを探りながら乗せていく方法論で。それも手伝って、昔の僕が作ってそうな感じが出せたんでしょうね。

――それでいて、今ならではの大人っぽさも感じました。

瑠伊：大人っぽいフレーズは意識しました。休符を多めに入れたり。このようなハネる感じやファンキーさは、わりと今ならではかも。そうそう、この曲の聴きどころはピアノとギターです。特にギターカッティング。普段あまり使わないテレキャス(テレキャスター：乾いてカラッとした音像が特徴のシングルコイルギター)を使っているんですけど、その音色にシビれて。テックさんの私物だったんですが、譲ってもらおうかと考えたぐらい(笑)。

――《鬱陶しくて苛々するぐらい僕らは似てきてしまったんだな。》の歌詞フレーズも印象的でした。

智：これはバンドにも恋愛にも言えることだと思うんですけど、僕は人とともに生きるなら相手と上手く違っていたいと思うんですよ。刺激だったり勉強だったりの場ですし、お互いの穴を埋めてこそだと思うので。

――同曲では感動的にせず、切なくさせない歌唱のように感じたのですが。

智：この歌詞のストーリーは“ミミック”を壊して自我を目覚めさせるというか、自立っていうか、カッコ良い結末を描きたかったんですよね。なので、心では強く歌いました。伝わっていたようで嬉しいです。

――智さんの歌にしても今回かなり各曲歌い分けている感があり、その辺りにも今ならではさを感じました。

智：時代によって歌い方を結構変えてきましたからね。今もそれをできないわけじゃないんで、吸収してきたものを楽曲に合わせた感じです。とはいっても、僕自身より周りのほうが違いを強く感じてるみたいです。

取材：池田スカオ和宏

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『No.9』

Mini Album　3/18 Release
マーベラス

【PREMIUM EDITION（DVD 付)】
MJSA1286 ～ 7
¥7,200(税抜)

【LIMITED EDITION（DVD 付)】
MJSA1288 ～ 9
¥3,300(税抜)

【vister(DVD 付)】
MJSA1290 ～ 1
¥3,300(税抜)

【lipper】
MJSA1292
¥2,500(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■智…過去に行って救いたい人を救う
「んー、過去には絶対に行きたいです。救いたい人が何人もいます。でも、未来にも行きたいなぁ。僕はオカルトや都市伝説が大好きなんで、陰謀論の先を確かめたいんですよね(笑)」

■ Yuh…高校 2 年生ぐらいに戻って遊びまくる
「過去に行って、高校 2 年生ぐらいの自分になって遊びまくる！　スノーボードに行ったり、温泉に行ったり、旅行に行ったり！　財政と意識記憶は今のまま過去に行けるってことで考えてますが(笑)。自由に遊べる時間が欲しいです…」

■瑠伊…幼少期の自分に英才教育
「過去へ行って幼少期の自分に音楽の英才教育を受けさせます。後々諸々楽になるので。ついでに語学やダンス、演技なども学ばせます。“あの頃にあれやっておけば良かったなぁ”と思うことがしばしばあるので、それらを一掃してきたいです」

今までの中で一番面白いアルバムだなぁと思ってます

タイトルは“平面上のいかなる地図も隣接する領域が異なる色になるように塗り分けるには４色あれば十分”との意味の四色定理から着想を得たというニューアルバム『十色定理』。先行シングル以外の８曲はメンバーそれぞれが作詞作曲を手掛けた新曲を２曲ずつを持ち寄り、バンドで仕上げていった、４人の持ち味と個性が新鮮な印象を残す好作品となっている。

L→R　佐藤ケンケン(Dr)、長谷川 正(Ba)、有村竜太朗(Vo&Gu)、ナカヤマアキラ(Gu)

――新録の８曲はメンバーそれぞれが２曲ずつ持ち寄ったそうですね。

長谷川：そうです。曲を作った人間が歌詞も書いたら面白いんじゃないかっていう意見が出てきて、こういうかたちになりました。聴き返してみると、やり方としては良かったんじゃないかと思います。曲のキャラクターが際立った感じですね。

――タイトルの“十色定理”という言葉は造語ですか？

長谷川：タイトルを考える前に、まずアルバムのアートワークについてミーティングをしていた時に閃いた言葉なんです。デザイン的に色を使いたいとか、そういうのもあって。曲数の 10っていう数字と色を絡めたいっていうのもあったんですけど、ふと“四色定理”という言葉が浮かんだので、それをちょっともじって。数字も入ってるし、色っていう単語も入ってるからいいんじゃないかと。

――アルバム全体のテーマは？

長谷川：内容に関しては、今回は結構自由でしたね。前作『doorAdore』(2018 年３月発表)の時は、メンバーで集まって設計図みたいなのを考えたんです。“1 曲目はこんな感じで始まって、こういう曲があったらいいよね”って感じで作っていったんですけど、今回は本当に自由でした。決めてたのはサイズ感だけかな。アルバムのサイズ感的に10曲入りくらいがいいっていうのがあったんで、それに則ってやった感じです。今の時代で 10 曲って決して多くはないですけど、それくらいの風通し感がいいというか。

――今作の楽曲を作る時、各自どんなことを意識してました？

長谷川：自分の中では既発シングルの２曲(「インサイドアウト」「潜像」)は意識的に外に向けて作った感覚が強かったんですけど、アルバムの２曲(「あまのじゃく」「スウィング・ノワール」)に関しては逆にインナーというか。自分が今やってみたいこととか、わりとプライベートな意識で作りました。シングル曲に関しては“今バンドとしてこういうことを表現したらカッコ良いんじゃないか”とか、そういうところに主眼を置いて作るんですけど、かなり自分の趣味に走ってる感じです。

有村：俺はざっくり言うと、好きに作った曲です。「C.C.C.」はあまり考えずにノリでガチャガチャと音を出してやる曲があったらいいなという感じで。「エンドロール。」はジャンルで言えば、ネオアコとかニューウェイブとかになるのかな。自分がバンドで作るのに一番好きなタイプの曲ですね。バンドっていうフォーマットでやるなら、こういう８ビートで、テンポ感で、こういうコードワークとかメロディーの乗っかり方が好き…みたいな。もちろん他の曲もいろいろ好きなんですけど、自分的にこういうのが一番フラットというか。ただ、今回の制作中、みんなの曲に触れていくうちに、すごくクオリティーが高いし、作曲者の色が強いと思って刺激を受けたんですよ。だから、最初はなんとなく作ってたけど、この２曲を集中して何度も見直してみようと思って、そこからはいつもよりもメロディーだったり、特徴になるアレンジとか、そういうのをすごく考えました。

佐藤：３人が作る曲ってなんとなくもう確立しちゃってるから、俺はそこの隙間産業というか(笑)、３人が作らなさそうな曲を作らないと、自分がやる意味がないなって。だから、いわゆる Plastic Tree っぽくない感じの曲になると思うんです。それを４人でバンドとして違和感なくアレンジしていくっていう。今回の２曲(「remain」「月に願いを」)はストックから出したんですけど、先に出ていた６～８曲とは違うタイプの曲を出そうと思って選びました。そういうバラエティーに富んでるのも、今回のアルバムの面白さなんじゃないでしょうか。

ナカヤマ：俺はそんなに…“アルバムを作る時期ですよ”って言われて、“あぁ、そっかぁ。早いね～”と思ってたら２年経ってたっていう。要は『doorAdore』は最近作ったものだと思ってたの。シングル２枚もやったのを忘れてちゃってたからね。だから、この２曲(「メデューサ」「Light. Gentle.and Soul.」)を書いた時も、別に“これで世界をひっくり返してやる！”とか、そんな気持ちなんかなくて。

――別に誰かに聴かせるために書いてるわけではないと？

ナカヤマ：いやいや、それはめちゃめちゃ思ってるよ。“聴いた人は必ずなぎ倒す！”みたいな(笑)。やっぱりさ、作る時には気持ちを奮い立たせないと書けないから。気合いを入れていかないと。ダラダラと書いちゃいけない…といつも思ってやってる。って、今回の２曲の説明になってないね(笑)。でも、いつも通りそういう気合いで書きました。

――アルバムが完成して、今はどんな気分ですか？

ナカヤマ：俺は“さぁ、ツアーだ！”っていう感じかな。制作中にツアーを明確に意識して作ったアルバムって、これだけかもしれない。作ってる時は必死なんだよね、たいていのアルバムって。でも、今回は“ライヴを見据えてやろうぜ”って言いながら制作をしていて…ほんと、そんなことを言って作ったのはこれが初めてかも。だから、今は“できた！　万歳！”じゃなくて、“よっしゃー、ツアーに行くぞ！”っていう気持ち。…って、アルバムの感想を言えって言われてるのに、ライヴのことばかり言ってるけど(笑)。まぁ、まさにそういうことなんじゃないのかな。

佐藤：俺もライヴありきですね。アルバム発売からツアー初日まで時間がないから少しでも曲を予習してもらって、ライヴを一緒に楽しめたらいいなと思います。あと、今回って 90 秒の MV を全曲分出すんですけど、自分が作った曲が映像化されるのは初めてだから、それも嬉しかったですね。

――全曲分の 90 秒の MV もですが、収録曲 10 曲をそれぞれシングル化したマキシシングル 10 枚セットの完全限定盤では、10 枚全てジャケットも帯も違うデザインで、そのこだわりの細かさに驚きました。

有村：今回のアルバムはメンバーそれぞれのパーソナルな曲というか、曲に個人の色がすごく出ていると思っていて。それがあったから作詞もその人に振ってみようってことになったんですけど、曲を作った人が Plastic Tree を使ってオールプロデュースしていくみたいな感じですよね。もちろんバンドでプリプロもするし、アイデアも出すし、プレイヤーとしても参加するんですけど、作曲者が最後まで仕上げるっていうテーマみたいなものがあって。僕は今までの中で一番面白いアルバムだなぁと思ってます。“まだまだ面白いことができるんだ、うちのバンドは!?”ってびっくりしたというか(笑)。もちろん手応えもあるけど、“まだできるんだ！　すげぇなぁ～”って自分のバンドに驚いてますね。メンバー自身がそんなふうに考えて作ってるのがスタッフにも伝わって、全曲分の 90 秒 MV を撮るとか、シングル 10 枚入りの BOX を作るとか、なかなかできないような企画も受け止めてもらえて。むしろ、“この内容だからやりたいですよね！”ってなってくれてる。そういう熱が聴いてくれる人にも届いてくれたら、もう本当に作り手冥利に尽きますね。今回の曲は俺的にはライヴでやるのが楽しみな曲が多くて。うちのバンドもキャリアが長いだけに、いろいろ変化しつつやってるんですけど、またひとつ Plastic Tree の新しい側面が出たアルバムだと思うので、そんな新しい側面のライヴができるようなツアーになればいいなと思っております。なので、ぜひたくさん聴いて、たくさん足を運んでいただければ、これ幸い至極。以上です(笑)。

取材：舟見佳子

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『十色定理』

Album　3/25 Release
ビクターエンタテインメント

【完全生産限定盤】
VIZL-1759
¥15,800(税抜)
※10CDs+DVD
　+PhotoBook 付
※豪華 BOX 仕様

【通常盤】
VICL-65361
¥3,000(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■有村竜太朗…地球の最後を見に行く
「やっぱり気になりますからね。生きている間は難しいだろうし(笑)。遠くから“あちゃ～、これで終わっちゃうのか”って傍観したいです」

■ナカヤマアキラ…1 年後に行く
「1 年後にある一番でかい競馬の結果を見て帰って来て、1 年後にその馬券を買いに行く(笑)。過去でもいいんですよ。例えば 18 歳の時に戻るとして、まずはその時にあった一番でかい競馬の結果を調べてメモしておいて、18 歳の自分にそっと“これを買え”って渡す(笑)」

■長谷川 正…100 年後を見に行く
「100 年ぐらいだとそんなに変わってないかもしれないけど、逆にそれぐらいのほうが興味がありますね。もしかしたら、びっくりするくらい変わっているかもしれないし」

■佐藤ケンケン…自分の葬式を見に行く
「どう思われて死んだのかなって。葬式の時って“あいつ、こんなだったよな”って言い合ったりするじゃないですか。それが気になるので」

amazarashi

テーマは自分を苦しめるものに対する“拒絶”

ニューアルバム『ボイコット』は“拒絶”という激しい言葉を投げ掛けることでリスナーに共闘を誘う、バンドの強い意志を閉じ込めた劇的な作品。秋田ひろむ(Vo&Gu)は今何を考えているのか、メールインタビューに答えてもらうかたちで、その心の内を語ってもらった。

――前作からおよそ２年４カ月振りというのは、フルアルバムとミニアルバムを含め、これほどのインターバルは過去最長ですね。

「制作に時間は必要だっていうのはずっと思ってて。ただ、早く出さなければ忘れ去られてしまうっていう焦りもずっとあったので、そのせめぎ合いはありました。今になってようやく余裕を持って時間が取れるようになりました。曲は作ってたし、シングルも配信限定曲を出してたので、今までと忙しさの感覚は変わらないんですが、心の余裕を持てたっていうのが今回の制作においては一番大きかったです」

――アルバム制作のスタートはいつ頃、どんな想いから始まったのですか？　個人的には武道館公演(2018年11月16日)が前作のタームと今作のタームの交錯地点だったような気がしています。

「明確な始まりは分かりませんが、武道館が終わってから曲は地道に作ってました。“いい曲が集まったら次はアルバムだな”って漠然と思ってて、去年の夏くらいにはそろそろアルバム出せるかなって、テーマとか方向性を考え出した感じです」

――“ボイコット”は単なる“異議申し立て”ではなく、“交流を拒否する”という自動的な強い意味があるように思います。なぜこの言葉をタイトルに選んだのですか？

「今回のテーマは自分を苦しめるものに対する“拒絶”です。タイトルを“ボイコット”としたのは“僕は拒絶する”という意志の表明と、それを多くの人に呼び掛けたいからです。“あなたを苦しめるものを拒絶しませんか”っていう」

――アルバムは“拒絶”“拒否”という強い言葉で幕を開けます。１曲目「拒否オロジー」で提示したかったテーマはどんなものだったのでしょうか？

「アルバムの幕開けを意識した、テーマの始まりを提示する曲です。アルバム制作の最後に作りました。自己紹介とか所信表明みたいなイメージですが、詩の朗読なので音読して気持ち良い言葉を選びながら作りました」

――「とどめを刺して」には“君”という他者を守る意識が非常に強く感じられました。一貫して“個”を歌ってきた秋田さんの世界観の中で、珍しいような気もしています。歌い掛けたかった相手がいたのでしょうか？

「この曲は“拒絶”や“ボイコット”っていうテーマの中でも他者に呼び掛ける、問い掛けるっていう側面の立ち位置の曲です。“僕は拒絶するけど、あなたもそうしたら？”っていう共犯関係を築くイメージです。特定の誰かというよりは、苦しんでる人に届けばいいなと思って作りました」

――「帰ってこいよ」には極めて純粋な故郷へのノスタルジーを感じます。ついでに言えば、「夕立旅立ち」にも同じ匂いを感じます。故郷から離れたい、帰りたい、愛する、嫌う、そうした感情は交互にやって来る気もしますが、今の秋田さんはどの位置にいると思いますか？

「僕はもう地元の青森で暮らしだして長いので、地元を離れて頑張る人を見守る「帰ってこいよ」のほうが今の気持ちに近いです。「夕立旅立ち」は故郷を離れる若者の歌で、上京する時の昔の僕の気持ちが色濃いです。故郷に関しては、僕の中で消せないテーマです」

――「月曜日」は２年前にリリースされた曲で、《君だけは大人にならないで》という叫びが鋭く刺さります。衒いのない素直な叙事と抒情の言葉がたくさん並ぶ、子供→大人という普遍的テーマの一貫の曲だと思いますが、どんな想いで書いたのでしょうか？

「漫画『月曜日の友達』のテーマ曲として描いたんですけど、作品の雰囲気を音楽にしたいと思いながら作りました。気持ち的にはファンアート、二次創作に近いかもしれません。アルバムの中では、最初に逃避行があって、旅立つ人と見送る人がいて、望郷がありつつ学生時代のノスタルジーに後ろ髪引かれる…みたいな立ち位置です、「月曜日」は」

――「アルカホール」は女性目線のようです。書く時にどんなイメージが浮かんでいたのでしょうか？

「僕はお酒好きなんですけど、酔っ払いながら作りました。アルコール依存症の歌です。メッセージも何もなく、なんとなくできた歌です。アルバムのストーリー的には、夢破れた人が落ちぶれて行くさまを描いています」

――「抒情死」にも“拒絶”というワードが何度も出てきます。この曲はアルバムのコンセプトの中でどんな位置を占めていますか？

「この曲がアルバムのテーマの中では一番中心かもしれません。「抒情死」と「とどめを刺して」が自分を苦しめるものに対する拒絶、自分らしく生きるための拒絶を描いてます。世間や人間関係の中、雰囲気で曖昧に受諾してるもの、そういうところから息苦しさが生まれるんじゃないかっていう曲です。例えば愛想笑いとか、なんとなく雰囲気でノーと言えなくて断れなかった案件とか、そういう日常で小さく自分を殺していく状況は拒絶するべきだという曲です」

――「独白」は、あの武道館で本編ラストを飾った曲。《言葉を取り戻せ》と叫ぶ、この曲を作った当時の想い、武道館で披露した想い、そしてアルバムに収められた今の想いに変化はありますか？

「武道館のライヴではまた違うストーリーがあったので、歌っている時は物語の登場人物の気持ちで歌っていました。《言葉を取り戻せ》というメッセージも“自分を押し殺さないで”っていう意味合いで、今回のテーマを共有してします」

――「未来になれなかったあの夜に」はつらい過去を“ざまあみろ”と言う言葉で愛おしみ抱擁するメッセージに聴こえます。《今更弱さ武器にはしないよ》《足りないままで幸福になって》といった言葉に込めた力強い肯定が胸を打ちます。

「これは amazarashi リスナーに向けて描いた曲です。僕らもいろいろあったし、今になって言えることや感謝もあるし、責任を感じることもあるし、“こっちはこっちでやってくけど、そっちは大丈夫？”みたいな。手紙みたいな気持ちで作りました」

――アルバムの最後を飾る「そういう人になりたいぜ」に宮沢賢治の“そういうものにわたしはなりたい”(「雨ニモ負ケズ」)の面影を感じるのは考えすぎでしょうか？

「それは考えてませんでした。でも、なんか嬉しいです。ラブソングなんですけど、いろんな思い出、素敵な人間、尊敬する人間、男も女も、今現在のことも切り貼りしたコラージュのような歌です。ほぼノンフィクションのコラージュを男女ふたりのラブソングに落とし込んだらこうなりました」

――そして、４月からホールツアーが始まりますが、どんなコンセプトで何を提示するのか、抱負をお願いします。

「ライヴを毎回がむしゃらにやって、その果てに“この感覚はなんだ？”っていう新しい高揚感の発見があります。そして、今度はその新しい高揚感を意図的に起こそうとがむしゃらに頑張ります。その繰り返しで僕らは成長してきたので、また新しい僕らの高揚感を共有してほしいです。テーマやコンセプトはあるんですが、まだ内緒です」

取材：宮本英夫

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『ボイコット』

Album　3/11 Release
Sony Music Associated Records
【初回限定盤 A】
AICL-3850～3
¥4,800(税抜)
※2CD + Blu-ray
　+特殊パッケージ
※Note 小説「雨天決行」封入

【初回限定盤 B】
AICL-3854～7
¥4,300(税抜)
※2CD + DVD
　+特殊パッケージ
※Note 小説「雨天決行」封入

【通常盤】
AICL-3858
¥3,000(税抜)

『amazarashi Live Tour 2020「ボイコット」』

4/28(火)	大阪・グランキューブ大阪(大阪国際会議場)
4/29(水)	大阪・グランキューブ大阪(大阪国際会議場)
5/04(月)	福岡・福岡サンパレス
5/06(水)	愛知・日本特殊陶業市民会館 フォレストホール
5/10(日)	北海道・カナモトホール(札幌市民ホール)
5/19(火)	東京・東京国際フォーラム ホール A
5/20(水)	東京・東京国際フォーラム ホール A
5/24(日)	青森・リンクステーションホール青森(青森市文化会館)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■未来に行って新しいテクノロジーを見たい
「未来がいいです。僕らが死んでしまって見られないであろう新しいテクノロジーを見たいです。宇宙旅行やワープ航法はできるようになるのかとか、AI はどこまで進むのかとか、PC をインプラントするようになるのかとか、人類が絶滅するとしたら原因は何なのかとか知りたいです」

ROTTENGRAFFTY

L→R　侑威地(Ba)、NOBUYA(Vo)、HIROSHI(Dr)、N∀OKI(Vo)、KAZUOMI(Gu & Programming)

子供から大人までファンのレンジは広がった

20周年の締め括りとなるベストアルバム『You are ROTTENGRAFFTY』。Disc 1はファンのリクエスト曲、Disc 2はメンバーのセレクト曲、Disc 3は過去のカバー曲を網羅した内容となっている。ライヴバンドとして駆け抜けてきた道のりはもちろん、初期衝動に貫かれた結成当時の曲調や意外な側面が垣間見えるレア楽曲満載の今作について、N∀OKI(Vo)とNOBUYA(Vo)のふたりを直撃した。

── 20周年の締め括りとなる今作ですが、最初はどんな内容にしようと思ってました？

NOBUYA：ベストアルバムは以前にも出しているので(2011年発表の『SILVER』『GOLD』)、最初はまた出すのはどうなんだろうと思ったんですよ。20周年のタイミングで今のROTTENGRAFFTY(以下、ロットン)が何を言えるのかと思って、新曲(2019年12月発表のシングル「ハレルヤ」)を出したんですけど、よく考えたらこの間でバンドに興味を持った人も増えてるわけで、SNSを見ると"ロットン、何から聴いていいの？"という書き込みがあったりして。前のベストに入らなかった曲やこの間で増えた新曲を入れるのはありかなと。

──ロットンの肌感としてもこの5年間(15周年から20周年の間)でファン層が広がった感覚はありますか？

N∀OKI：ありますね。子供から大人までファンのレンジが広がりました。今が一番いいバランスだと思います、偏ってないというか。理想的だなと。

──ファン層が広がっている要因は何だと思います？

N∀OKI：長いことやってるからじゃないですか(笑)。その持続は大事だと思うんですけどね。ただ続けてるだけじゃなく、自分らなりに切り開いてきたし。普段絡まない対バンもあったり、10年前は埋まらなかった会場でも今はやれてますからね。

──新曲「ハレルヤ」もそうでしたが、バンドの音像的にはよりヘヴィさがどんどん増している印象もあります。

NOBUYA：そうですね。20周年を迎えてより過激になってるバンドは少ないと思うんですよ。その中でさらにヘヴィになってるロットンはカッコ良いなと。「ハレルヤ」がKAZUOMIから届いた時にガッツポーズを取ってる自分がいましたからね。"20周年でこれを出すのはありやろ！"って。

──では、まずはDisc1からうかがいたいと思います。これはファンのリクエスト曲を収録してますが、この結果を見てどう感じました？

N∀OKI：「金色グラフティー」が1位じゃないんだなって。まぁ、ライヴでよくやってる曲が入っているイメージですね。だけど、「I Believe」は意外だったし、これが素直なお客さんの意見なんだなって。

NOBUYA：ライヴで全然やらない「I Believe」「Familiarize」「アイオイ」が4、5、6曲目になってて…収録順も順位投票通りなんですよ。だから、この3曲が4、5、6位なのは相当びっくりしました。

──ロットンの持つ哀愁感のある歌メロが多くのファンに愛されているんでしょうね。

NOBUYA：そうですね。KAZUOMIが作る曲で自分が特に大好きなのがロックバラードなんですよ。「I Believe」「アイオイ」「マンダーラ」「Walk」とか、こういう一面もあると見せる曲も必ずあって。そこがロットンを支えてくれる人とリンクしているのは幸せですね。

──「I Believe」は歌詞を含めて、今聴くとまた染みますね。

NOBUYA：ミックスをやり直して、今の時代の音になってますしね。当時はもう少し歌の細かな表現が出ていたらいいなと思っていたので良かったですね。

──そして、Disc 2はメンバーセレクトですね。

NOBUYA：前のベストに入ってなくて、わりとライヴでもやる曲を入れたり、この間にできた新曲で構成した感じです。

N∀OKI：Disc1とDisc2を聴いたら、初めてライヴを観ても7割ぐらいは網羅できるんで楽しめるんじゃないかなと。でも、「日進月歩」は結成当時の曲で、デモテープ以来、世に出てないんですけどね。

──そんな「日進月歩」を収録しようと思った理由は？

NOBUYA：ライヴ活動しかできない時期があって、自分たちのお金でレコーディングした曲を会場や通販限定で売ってたんで、そういう曲を全部入れたらどうだろっていう話も出たんですよ。でも、当時のデータがなくて、奇跡的に「日進月歩」だけ録り音が残ってたんです。

N∀OKI：1stデモテープの1曲目だし、この機会じゃないと日の目を一生見ないと思うから。お客さんは嬉しいんじゃないかと。

──「暴イズDE∀D」だけは新録なんですね。

N∀OKI：1stシングルですからね。

NOBUYA：定期的にリテイクしたいという話が出てた曲なんですよ。KAZUOMIから"あのやんちゃな歌い方できる？"と言われてたんですけど、俺的にはあまり自信がなくて…"何をそんなに熱り立ってるねん!?"っていう(笑)、あの自信満々感は何だろうって。でも、その歌い方がKAZUOMIはいいと言ってくれたから、このタイミングで録り直せて良かったなと。レコーディングではどれだけやんちゃに歌えるかを意識しました。

──ミックスし直された「響く都」はより曲の持つ個性が引き出されてますね。

NOBUYA：当時は表現できなかったことができたかなって。その頃はお金もなく、録音技術もない中でアイデアを出し合ってましたからね。今回は効果音をもう少し出したりして。

N∀OKI：思い入れのある曲だし、「THIS WORLD」もそうですけど、ライヴでやり込んできた曲ですからね。四星球がトリビュート(2019年12月発表の『ROTTENGRAFFTY Tribute Album ～MOUSE TRAP～』)でカバーしてくれましたけど、これが本筋だと思ってもらえたらなと。とにかく「THIS WORLD」「響く都」は二枚看板でお客さんを巻き込める曲だったから。この2曲がなかったらライヴバンドになってなかったと思う。リリースがほぼない時期で、お客さんも歌詞を分かってなかったけど、歌ってくれるような曲でしたからね。

──そして、完全生産限定盤に同梱されるDisc 3はいい意味でロットンのとっ散らかった音楽性が爆発してますね。

NOBUYA：ははははは。これまで僕らもいろいろなトリビュートに参加してきたので、それを集めたものか、シングルのカップリング曲を集めたものか、どちらにしようか考えてたんですよ。トリビュートを集めるのは権利的に無理だと思っていたら、ビクターさんが頑張ってくれて、夢を叶えていただいたという(笑)。

──ファンにはたまらない内容ですよね。

N∀OKI：絶対に知らない音源もあるやろうし、ほぼ全部入ってると思います。「マジンガーZ」はライヴで1度もやったことがないですからね。

──他に思い入れの深い曲はあります？

N∀OKI：GELUGUGUの「RAT FINK」もライヴでそんなにやってないし、BOØWYの「MORAL」も…

NOBUYA：いや、1度やってるよ。新宿LOFTで。

N∀OKI：あっ、そうか。あと、「その向こうへ feat. ROTTENGRAFFTY」は10-FEETのライヴに俺らふたりで出ることもあり、この2バンド独特のグッドヴァイブスが出てるんじゃないかと。仲間以上のファミリー感があるから。

NOBUYA：ロットンを応援してくれる人たちにGULUGUGUやニューロティカを紹介できるのが嬉しいですね。自分たちが世話になった先輩なので、いつか恩返ししたい気持ちがあったんで。"原曲どんなんやろ？"って聴いてもらえたらありがたいです。

取材：荒金良介

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『You are ROTTENGRAFFTY』

Album　3/18 Release
Getting Better

【完全生産限定盤
(BONUS DISC付)】
VIZL-1747
¥5,000(税抜)

【通常盤】
VICL-65344～5
¥3,500(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■NOBUYA…自分の寿命より先を見たい
「自分が死んだあとの未来を見てみたいですね。絶対に見ることができないからこそ気になるし、どんな世界が広がっているのかなと思います。行って何かするということではなく、単純に興味本位ですけど」

■N∀OKI…この世の終わりを見たい
「人類が終わる少し前の世界に行ってみたいです。人類の滅亡はこの世の最後だと思うから、世の中が滅びる瞬間をこの目で見る。全然イメージが沸かないからこそ気になるのかな。みんなも興味がありますよね？(笑)」

各自が思い描くサイバーパンクの要素が入っている

L → R　悠介（Gu）、晁直（Dr）、葉月（Vo）、明徳（Ba）、玲央（Gu）

今なお動員を増やし続けているlynch.がニューアルバム『ULTIMA』（アルティマ）をリリースする。ヘヴィで鋭角的なサウンドとメロディーに磨きを掛け、スケール感を増した楽曲の数々はこれぞ究極！　結成15周年を迎え、一貫して上を目指し続けてきたという5人に話を訊いた。

――約1年8カ月振りとなるニューアルバム『ULTIMA』ですが、ロックバンドとしてのlynch.らしいエッジと激しさがありつつ、メロディアスな曲が増えた印象を受けました。スケールが大きい作品になりましたが、制作する前に共有したことはありましたか？

玲央：制作に入る時に葉月から“サイバーパンク”というワードだったり、近未来的な要素を取り入れたいという提案があって、そこから今回の写真やMVのアートワークにつながっていったんです。サウンドに関しても葉月が言ったことはメンバー全員が意識しているので、より一体感が生まれたと思っています。

――なぜ“サイバーパンク”だったんですか？

葉月：単純に僕がそういうアニメや映画にはまってたんです。近未来的要素があるものって意外とlynch.はやったことがなかったけど合うんじゃないかなって。で、曲を作り出したんですが、いざコンセプトに据えたら狭まっちゃって全然できなかったんですよね。これは良くないと思い、僕は途中から意識しなくなっちゃったんですけど。

全員：（笑）。

葉月：アートワークや言葉の選び方とか、エッセンスとしては残ってるんですけどね。

玲央：そう、コンセプトじゃなくてエッセンス！　各自が思い描くサイバーパンクの要素が入っているんです。メタリックな音質だったりとか。例えば悠介のギターは華やかなんだけど、無機質なフレーズが入っていたりして、“これが悠介なりの解釈なんだ”って思いましたし。

――悠介さんはどんな意識で取り組みました？

悠介：“ULTIMA”というタイトルは他のメンバーは“究極”という意味で解釈していると思うんですが、僕の中では“最後”というスペイン語の意味合いから、気持ち的には最後のアルバムでもいいかなっていう。

――“最後の”という意味でとらえるとドキッとするタイトルですよね。

悠介：“え！?”って思うかもしれないですけど、それぐらいの気持ちで取り組んだアルバムですね。lynch.は短い期間で音源を制作することが多いので、どこかで区切りを付けなきゃいけない場面が出てくるんですけど、今回は少しでも納得できない部分があったら、ギリギリまで突き詰めたい気持ちが強かったんです。明日、自分が死ぬかもしれないと思ったら、後悔するようなものは作りたくないって。

――悠介さん作曲の「ASTER」は広大な風景が浮かんできてとても印象的だったのですが、どんな想いがあって書いた曲になるのですが？

悠介：昨年、祖母が亡くなって…そういう想いから書いた曲です。タイトルはデモの段階で付けました。

――“ASTER”は“星”という意味ですか？

悠介：ラテン語で“星”なんですけど、花の“紫苑”という意味もあって、紫苑の花言葉が“追憶”なんですよ。上手くリンクしたなって。サウンドは近未来の要素を取り入れつつ、宇宙をイメージして作りましたね。

――この曲からラストの「EUREKA」に移行する流れがドラマチックで感動的でした。

葉月：「EUREKA」でチャレンジしたのは途中のシンガロングするパートですね。lynch.のライヴの最後を飾る曲ってたくさんあるんですけど、それら過去の曲全てを超えたかったんです。お客さんのパワーがドカーン！と伝わってくる時って一番感動するから、そこはもう思い切り丸投げしてみようって。

――1曲目の「ULTIMA」と最後の「EUREKA」には女性コーラスが入っているので、何か関連性があるのかなと思ったのですが。

葉月：女性コーラスは新たなアプローチですけど、そこにつながりはないですね。

玲央：「ULTIMA」と「EUREKA」は曲調は全然違いますけど、僕の中では感覚が近いんですよ。2曲とも天井が高い360度の大きな会場で演奏しているイメージがあって。「EUREKA」はポップな曲だけど、それだけではないスケール感を出さなきゃと思って弾きましたね。前作『XIII』（2018年7月発表）でもスケール感は意識したんですが、昨年のホールツアーの実体験から大きな会場を意識するようになったことがフィードバックされたアルバムなのかなと思います。だからと言って躍動感がなくなったわけではなく、ライヴハウスでも観たいし、もっと大きい会場でも観たいと感じてもらえる作品になったんじゃないかと。

晁直：特にギターは音色が多彩だし、全体的に鮮やかさが増したアルバムになったと思いますね。それぞれの楽曲の個性が濃いから今までのコンセプチュアルなアルバムと比べたらバラバラかもしれないですけど、強い作品になったなって。これまでのアルバムにはSEが必ず入っていたんですが、SEなしで12曲も収録されているのはlynch.では珍しいですしね。

――確かに鮮やかさが増していますよね。リズムセクションとして心掛けたことはありますか？

明徳：5人組バンドならではの個性や面白さに磨きが掛かったんじゃないかと思います。それこそ15年やってきたからこそのバンドアンサンブルというか。誰かひとり超絶上手いメンバーがいるバンドとはまた違う5人のバランスですよね。今までのlynch.は構築美にこだわってやってきたんですが、音で遊ぶところは遊んでいるし、絶妙なバランスだからこその味や深みが出てきていると思うし。僕自身はオーソドックスに、リズム隊としてガチッと固めることを意識してベースを弾きました。その分、ギターが自由に動いている箇所があったり、歌やシャウトもいろいろなパターンがあるので、バッキングとして活かせたらいいなって。

晁直：バンドアンサンブルという点では音との兼ね合いがより繊細になっていますね。lynch.のようにチューニングが低いバンドだと音がぶつかることが増えるので、ドラムも以前より気を使っていこうと思いました。

取材：山本弘子

okmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『ULTIMA』

Album　3/18 Release
KING RECORDS

【数量限定豪華盤】
KICS-93904
¥9,000（税抜）
※2CD＋Blu-ray＋Photo Book

【初回限定盤（DVD付）】
KICS-93906
¥3,500（税抜）

【通常盤】
KICS-3904
¥3,000（税抜）

『[XV] act:5 TOUR'20 -ULTIMA-』

4/18（土）　岐阜・club-G
4/19（日）　静岡・SOUND SHOWER ark
4/25（土）　熊本・B.9 V1
4/26（日）　鹿児島・CAPARVO HALL
4/29（水）　福岡・DRUM LOGOS
5/08（金）　群馬・高崎 club FLEEZ
5/10（日）　神奈川・KT Zepp Yokohama
5/14（木）　宮城・仙台 Rensa
5/16（土）　青森・ Quarter
5/17（日）　秋田・Club SWINDLE
5/23（土）　山口・RISING HALL
5/24（日）　岡山・CRAZYMAMA KINGDOM
5/30（土）　和歌山・SHELTER
5/31（日）　奈良・EVANS KINGDOM CASTLE HALL
6/06（土）　新潟・LOTS
6/07（日）　富山・MAIRO
6/13（土）　北海道・帯広 MEGA STONE
6/14（日）　北海道・北見オニオンホール
6/16（火）　北海道・札幌 PENNY LANE24
6/27（土）　香川・高松オリーブホール
6/28（日）　愛媛・松山 WStudioRED
7/04（土）　沖縄・桜坂セントラル
7/05（日）　沖縄・桜坂セントラル
7/12（日）　愛知・Zepp Nagoya
7/18（土）　大阪・なんば Hatch
7/26（日）　東京・TACHIKAWA STAGE GARDEN

music UP's Q!

今月のお題：『タイムマシンがあったら何をする？』

■葉月…バブル期に行ってみたい
「バブル期に興味があるんで、行ってみたいですね。映像とかでよく観るマハラジャ六本木で遊びたいんですよね（笑）。お金の巡りがいいイメージがあるから、ビジネスをしたり、遊んだり、楽しいんじゃないかな」

■玲央…祖父と祖母に会いたい
「父方と母方の祖父と祖母が小さい頃に亡くなっているので、過去に戻って会いたいですね。2回くらいしか会えなかった祖母もいるので、自分の両親を育ててくれた感謝の言葉を届けたいんですよね」

■悠介…自分が生まれた瞬間を見てみたい
「自分が生まれた時の両親の反応が見てみたいですね。見ることができない瞬間だからこそ興味がありますし、両親に直接訊いたこともないですから。きっと、幸せな顔をしてくれていたんだろうな」

■明徳…過去に戻って好きなバンドのライヴが観たい
「過去に行って、JUDY AND MARY と BLANKEY JET CITY のライヴを観に行きたいですね。バンドに興味を持ち出した頃にいろんなバンドが一気に解散や活動休止をして…復活したバンドもいますけど、この2バンドはそれはなさそうだし、ライヴを観たことがないので、すごく観てみたいんですよ」

■晁直…未来の予言者になってみたい
「過去に戻って、これから起こる大きな出来事をブログにまとめて、記事を全世界に発信する予言者になりたいです。これが叶ったらノストラダムスとかよりもすごい人物として歴史に名を残しますよね（笑）」

music UP's

TAKE FREE

Interview … コブクロ　水樹奈々　OKAMOTO'S　超特急　amazarashi　ROTTENGRAFFTY

music UP's Q! …『タイムマシンがあったら何をする？』